
王の竜玉

yumenisiki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王の竜玉

【Nコード】

N5980P

【作者名】

yumenisiki

【あらすじ】

「あなたは私が守る」そう言って王の寵妃になった。

だがそれは王に守られることだった。そんなのはイヤだと寵妃は仮面を被り、軍の最高司令官の將軍になる。

戦いに身を投じながら、王を恋思う。悟られぬように、そしていつかくる別れのために……。

シリアス、でもラブラブを目指したいと思います。

登場人物（前書き）

誰が誰か作者がよく分からなくなってきたので、載せました。
気まぐれで増えていくと思います。

登場人物

?国:

巨大国家 数千という歴史を持つ國。長きに続いてしまい人口増加、貧富の差で72代目の国王が他国との戦争を始める。10年以上続いた戦争で民からの信頼は失われ、内乱が起きる。次々に王がたつては、暗殺が繰り返された。79代目の王が立ったとき民からの信頼はほぼ失われていたが、閃のカリスマ性により国は少しづつ回復に向かう

緋 閃:

第79代目国王19才。元8番目皇太子(母が妓女のため地位が低い)父親の正妃にはめられて地位を脅かされ田舎に住む。いじめられっ子で神楽の後ろでよく泣いていた。正妃はいない

神楽:

村娘(実の家族は死去、義母に育てられる)17才。文武共に秀でている。小さい頃は閃をいじめる男共を放り投げていた。今は寵妃(公にはほとんど顔を出さない)

柳燕:

50を越えた女性。神楽の育ての母。実母ではない。かなりの薬師だが、神楽には負けるとよく口癖のように言う。閃の母の死後、閃を引き取り育てる。閃の第二の母のような存在

竜将軍:

顔に仮面を被り、身元、年齢一切不明。閃王の命によりいきなり近衛兵隊長となり、後々軍の最高司令官となる。他国からの暗殺者、地位を狙う者からことごとく王を守る。長きにわたって続いた戦争

から圧倒的勝利を勝ち取り王と並び英雄視されている。戦争を終えさせた功績として王から玉を賜り、長剣に下げている。武器は何でも使いこなす

三老：

国家の大臣達のトップ

凱長官、張官吏、燕官吏の三人が官吏のトップ

王に進言をするときの大抵この三人の誰かが進言する

史部：官僚の人事を行う

戸部：財政や地方行政を行う

礼部：礼制や外交を行う

兵部：軍事を行う（下の將軍達はここの管轄である）

刑部：司法と警察を行う（ここで言う警察は蒼の軍とは異なる）

工部：公共事業を行う

兵部の將軍達および担当

蒼の將軍：馬湊威。27歳。城の警護担当

朱の將軍：紅凱聯將軍。55歳。軍の騎馬軍

黄の將軍：呂鐘元42歳。軍の武器開発部。投撃機など担当

緑の將軍：林栄真45歳。弓部隊

黒の將軍：玄偉宗卓35歳。歩兵部隊

白の將軍：阿宗將軍。54歳。軍の衛生面、治療面担当。軍議などにはあまり参加しない

紫の將軍・紫伯承^{ししやくへん}28歳。軍の隠密部隊

橙の將軍・李忠泉^{しちゅうせん}30歳。軍の船部隊。元海賊。

近衛兵隊：將軍職と並び称される部隊。主に王の警護を行う。また王不在の際は軍の管轄は全部任される。兵は近衛兵隊長自らが決めることが出来る。色は王と並び称される金。

名前について

名は名字と名がある。だがそれを持つことが許されるのは貴族もしくは軍の高官のみ。

ただ唯一、阿宗將軍だけは民間からの起用で將軍まで上り詰めたが、他の將軍達と比べ低く見られがちで名字を貰うことが出来なかった

というより阿宗將軍は昔からの患者達に名前が変わりましたと言うのが、めんどくさくていらないと拒絶した伝説を持つ人である
名字を持つことは、それなりの身分があることを意味する

登場人物（後書き）

評価やお気に入り登録大変ありがとうございます!!

これを源に頑張って書いていきます。

戦いは終わりを告げる（前書き）

少しだけ流血表現や、気分を害する表現があります。
一切の責任は持てませんので、お気を付けてお読みください。

戦いは終わりを告げる

ダッ、ダッ、ダッ

規則正しく蹄の音が響く

荒れた大地に焼けた草の匂いに人の焦げる匂いが広がり
目を背けたくなるような光景が地平線の彼方まで広がっている

そんな大地を2頭の軍馬が駆ける

一頭にはひらりと長いマントをなびかせ、顔半分を覆う仮面をつけた軍服の竜將軍

その少し後ろを駆けるもう一頭には誇らしげに旗を待つ騎手

ひらめく旗には金の糸で縁取られた真っ赤な生地に剣を持つ黄金の竜の姿が刺繍されていた

その旗は焼けた荒野を駆ける

そこだけが切り離された世界のようにただ蹄だけの音が響いていた

これから始まる戦いに興奮と不安に包まれていた？国の兵たちはその旗を見た興奮を露わにする

剣を掲げる者、「將軍！」と叫ぶ者、各々を鼓舞する声が轟く

その声はドンドン広がり50万もの兵たちが声を上げ、地面を震わせ、反対側でにらみ合う敵に威圧感を与えていた

駆ける二頭の前には武器を抱えた兵達が敬意を込めた瞳で見つめながら道を空け始める

二頭は迷うことなく開いた道走り、中央部辺りにポツカリと空いた場所で馬を止めた

スタツと降りた竜將軍は既の番の者に手綱を任せ
目的の人物の前に跪いた

「ただ今戻りました。陛下。」

「よく戻った。竜將軍。報告を頼む。」

陛下と呼ばれた人物は他の鎧を纏う者達と比べ、線は細いように見えるが

その瞳は誰よりも力強く、迷いなき眼である

「はっ。露国は和睦の件につきましては全面的に破棄、最後まで戦う意志を示しております。」

竜將軍から淡々と出てくる言葉は一切の感情がこもらず、ただある
真実を述べていた

「まったく！なんとういう、分からず屋の国だ！」

「滅ぶのが分かっているだろうに！！！」

「陛下！奴らに私たちの力を見せつけましょう！！！」

王の周りを固める將軍達は次々に声を上げる

その声につけと兵の音がさらに大きくなる

王はサツと手を挙げる

その動作にピタリとその場に静寂が訪れる

1度目をつぶり、大きく息を吐いて目を開けた

その目に映るは敵国、露国の士気の低い兵達の姿

そして号令をあげた

「これより露国への最後の攻撃を仕掛ける。前線は黎將軍、李將軍！他の將軍達は足並みをそろえ竜將軍の合図を待て！これにて最後の戦いとする」

その声に伴い、兵達の鼓舞の音が広まり地面を揺らした

これが？国で十年と続いた戦争の終焉となる

戦いは終わりを告げる（後書き）

初めてのオリジナル小説です。気合いを入れて頑張りたいと思います。

二人の二つの関係

戦いが終わり1年後・・・

「ふああ~~~~眠い。」

春の日差しが降り注ぐ欄干に寄りかかり大口を開けて欠伸をする男がいた

「何をしてらっしゃるんですか、陛下」

「やあ！竜將軍！ここでお茶でもしないかい？」

そこに顔の半分を仮面で覆い、表情が全く読み取れない竜將軍が冷たいオーラを出しながら現れた

そのオーラが全く分かっていないのか陛下と呼ばれた欠伸をしているこの男、？国第79代、閃王せんおうはにこやかにお茶の用意をし始める

「今日は閣僚の会議のはずではありませんでしたか？」

「いやいや、竜將軍がいなかったから、抜け出してきましたよ」

悪気無しに言う台詞に竜將軍は大きな溜息をはくしかなかった

この二人は従属の関係であるが、もう一つの顔がある

「そんなことより、もうその仮面を外してくれないか、・・・我が寵妃よ。」

いきなりの話転換について行けず、すっと伸ばされる閃の手に反応が出来なかった竜將軍は仮面を奪われてしまう

仮面が外れて現れたのは、眉を八の字に曲げた閃国王の唯一の寵妃、
神楽かくらだった

「陛下、お止めください。誰が見ているか分かりません。」

陛下からゆつくりとした動作で仮面を奪い取り、また顔に付けようとするが

それを閃王は許さない

「ココは私の後宮だよ。それも寵妃の屋敷だ。誰も近づかないし、周りに人の気配がないのは將軍の君の方が分かりきっているだろう。」

「
仮面を付けるようとする手を押しとどめ、命令にも似た声に
寵妃としては諦めるしかない

「着替えておいで、君のその格好は何とも言えないよ。」
閃は神楽が諦めたことをいいことに、寵妃の姿を上から下まで眺めて言う

神楽の姿は肩まである髪を一つにまとめ、軽装ではあるが軍服に帯剣していた
表情が露わになると、あどけない少女が似合いもしない男装をしているようだ

神楽は瞳をあげると、閃と瞳が重なり合う
その瞳は誰の反論も許すことはない力強い瞳

神楽はその瞳から急いでそらすように
少し腰を折り顔を伏せ陛下に頭を下げる

「……はい、陛下」

そして、逃げるように部屋の中に急いで入り込み
閉じた扉に背を預けてズルズルと座り込む

「ハアハア、気づかれませんように……」

顔が赤くなるのが分かる

心の臓が高まり破裂しそうだ

「ばれてはダメ……お願い、もう少しだけ……傍にいさせて」

頬を伝う雫は誰に気づかれることなく陛下から賜った玉へと落ちる
誰に知られることもない恋心と共に……

この二人は王と臣下という関係ともう一つ、王と寵妃という関係が
あった

運命の出会い？

〳〳今から十年前〳〳

「ふえええ〳〳〳ん・・・か、かぐら、かぐら」

「ヤーイ泣き虫太子！泣き虫太子！」

村から少し離れた森の中で嗚咽をあげながら泣く子供の周りを泣いている子より大きな子供達がはやし立てる

「こらー！ー！ー！ー！！誰を泣かしてる！！！」

大きな男子達はぎくりと声のする方に振り返った

木の棒を肩に置きながら睨みつける子供は

男の子か女の子かも分からぬような幼い子供であったが

見つめる瞳は誰よりも強い光を持っている

その目を見た子供達は

「やべっ！！みんな逃げろ！！！」

ガキ大将の男の子の一言に蜘蛛の子を散らすように男の子達は逃げ出した

「二度とするな！！閃をいじめる者は絶対許さない！！！」

逃げ出した男の子達を追うようなことはせず、子供特有の高い声で一括した

「えっぐ・・・えっぐ・・・」

神楽は未だ泣き続ける閃近づき

「もう大丈夫だよ。閃。痛いところはない？」

閃より幼いはずの神楽は精一杯背伸びをしながら閃の黒い髪を撫でながら優しく声をかけ始めた

「かぐ・・・ら・・・」

涙でぐちゃぐちゃになった顔のまま閃は神楽に抱きついた

それを神楽は閃が泣きやむまで頭をなで続ける

これが二人のほぼ毎日繰り返される日常となっていた

運命の出会い？

この閃という子供、第70代目？国国王、緋ひ 琉瞬りゅうしゅんの子供
正当な王太子である

この？という国は大陸の7つの国のうちの一つでもっとも歴史が長く、また領土も広く、気候、流通の適所といい何をとっても最高の位置にこの国はあった

経済面もさることながら、軍事力も優れていたこの国は何度か他国から攻め込まれることがあったが、ことごとく返り討ちにし他の6カ国とは協定という名の支配をしていた
実質この大陸を支配しているのは？国であると言っても過言ではなかった

その国の王太子であると言えば権力者であると言えそうだが、すでに正妃の間に成人した太子や他の側室達が産んだ太子があり、太子としては8番目である

ましてや、閃の母は王の前で公演を許された劇団の花形女優であった身分の低い母に、8番目という王太子に誰も見向きもしなかった

だが閃の母に一目惚れした琉瞬王は側室として傍に置き、寵愛したそして産まれた子供が閃であった

まだ、琉瞬王が存命の時は良かった
両親に愛され幸せに王宮で暮らせた

だが、冬の寒い日に琉瞬王は何者かに暗殺された
そこから閃の親子の暮らしは激変した

琉瞬王の正妃の息子が王となると真つ先に閃親子は王宮から追放さ
れた

その理由は琉瞬王暗殺

閃の母は声を張り上げ無実を訴えたが、花形女優といっても平民の
閃の母と正王母に誰一人として閃親子に手を差し伸べる者はいなか
った

本当であれば処刑される予定であったが、閃親子の惨めな姿が気に
入ったのか琉瞬王の正妃

「生きながら王に愛されたことを悔やみなさい」
と笑いながら二人を追い出した

追放された親子は元いた劇団に向かうが正妃の策略で劇団に戻るこ
とも出来ず、色々な所を転々と移動した

そしてやっと見つけた安住の地、璃州の片田舎の村

そこで閃の母は身を粉にして働いた

そして何より閃をりっぱな王太子として扱った

礼儀作法、教育に厳しく閃に接した

それは5才にも満たない閃にとっては泣き出したくなるほど辛いこ
とであったが、夜になると母が声を抑えて泣いているのを見て、母
を守らねばと厳しい教育にも耐えてきた

そんな閃が運命の出会いを果たす

運命の出会い？（後書き）

まだヒロインと出会えず！！次回出てきます（たぶん）

運命の出会い？

閃は8才になり大人と同じような剣の練習に励んでいる時に村の子供達を取り囲んだ

「おまえ、・・・王族なのか？」
憎しみを込められた子供の瞳に閃はおずおずと頷くしかなかった

「父ちゃんの敵！！！！」
閃を取り囲んでいた一人の男の子の一声にみんなが賛同して手に持っていた木の棒を振り上げた

急なことに閃は何が起きたのか分からなかった
全身に走る痛み
留まることない攻撃
耳を背けたくなるような罵声
閃はうずくまり頭を抱えうずくまるしかなかった

どれくらい経ったかどうか
やっと保っていた意識を手放しそうになったときに

「何してるの！！」
そこに響いたのは女の子の声
その声と同時に攻撃はなくなり、走り去る音だけが聞こえた

だがそこで閃の意識はなくなった

「・・・っつっ」

ふと動かした腕に痛みが走り意識が浮上する

見渡すと所々空が見える天井に息が詰まるほどの謎の匂い

「あ！起きたの！」

声に反応したのかトタトタと床を鳴らしながら近づいてくる音がする

閃は顔を向けようとするが電気のように全身に広がる痛み一指一本動かすことが出来ない

「ああああ！だめ！動くとケガが酷くなるよ！」

寝ている閃を見下すように見る女の子

わずかに閃の方が年上のように見えるが、

閃の額にのせている布を新しく水につけてまた置いたり甲斐甲斐しく世話をする様子から少し大人びているように感じられた

「っっ・・・は？」

やっと出せた声に

「ここはね、診療所！お義母さんがやってるの！」

ニコリと笑いながら布に緑色の謎の物体を塗りつけ

「えいつ！」

と、閃の擦りむいた膝にその布をつけた

「っっっっっっっっt!!！」

さび声すら消え失せるような痛みが閃の体中を走った

「この薬ね。ちよつと痛いんだけど傷を治りの早いんだよ。」
また新しい物を用意している神楽の前で閃は布団の上でもがいていた

「ちよつと我慢してね。」

二枚目を閃の服を捲り上げ腹部に付けようとした瞬間に

「も・・・もういい!!やめろ!!」

必死に頼み逃れようとするが神楽は閃の服を掴み

「だめ。」

ぺとっ

「!!!!!!!!!!!!!!」

またまた閃の意識は遠くに飛び去った

運命の出会い？

「っは！！」

閃は文字通り飛び起きた

はあはあと荒い空気を吐き出す

周りを見渡すと悪夢の続きのようにつんとくる匂い

がたつと音の響いた

その音に反応して閃の肩がビクンと震えて音の方に目を向けると
つぎはぎの見える服を着た目尻のシワが印象的な70歳位のお婆さ
んが立っていた

「ああああ、目が覚めたんだね。どうだい、もう体を動かしても傷
まないかい？」

ニコニコと笑みを浮かべ、閃の寝ている布団の横に座り温かく見つ
めてくる

閃はぎこちなくなっではいたが、ふと思い出すと先ほどまだ指一本
すら動かすことの出来なかった体が、腕を回しても、立ち上がって
も痛まなかった

「な、なんで？」

立ち上がったまま呆然と零した閃の声にお婆さんの目尻のシワはさ
らに深くなる

「ふふつ、それはね。神楽のおかげだよ。あの子はね、今では私を
抜いての薬師だよ。ただちよつと難点はかなり痛みを伴うと言っ
とただけだね。」

笑いながら、持ってきたお盆の上にあるおむすびを閃に差しむける
「お腹すいてるだろ？食べなさい。」

母から施しなど受けるなど強く教わっている閃は首を振ろうとするが
空腹を訴えるお腹はクウーとSOSを出してくる

「ふふつ。元気になるにはたくさん食べる必要があるよ。」
そう言われると閃の手は伸びていた
おにぎりを掴むと急いで口の中に入れた

閃の瞳からボロボロと涙が溢れてきた
初めて閃は温かな心に触れた

閃親子がこの村にきた頃、？国は混乱していた
長い歴史により人口の増大、異常気象により作物の不足に伴う食糧難
また、他国の不穏な動き
そして相次ぐ王の死去である

閃の父親である70代目が死去した後、その嫡子が71代目を継いだ
されど、その数日後に何者かにより暗殺

第二太子がその後を継いだ、武力を好んだ王となり国の抱える問
題は他国を滅ばせばよいと号令を出し戦争が始まった
その後は坂を下るように？国は陰りを見せはじめた

いかに素晴らしい軍事力を持っていてもそれを操れる者がいなくて
は意味がない
その証拠に戦闘は連戦連敗

軍事の士気は下がる中、72代目は豪遊に走った

後宮に寵妃を100人以上抱え財務は一気に困窮した
そのツケは民に回った

一気に税率が上がり、冬を越すために溜めていた食料をことごとく
奪い去られた

民の不満は一気に高まった

一人の将軍が反旗を翻し、この72代目皇帝を暗殺した
その後は血を血で洗う戦いが続いた

そして民は王家に対して失望を抱いた
村から多くの働き手である男達を奪い、作物を奪った

民達は自分たちが生きていくのが必死になり、誰かに優しくすると
言うことを忘れてしまった

閃親子はこの村で白い目で見られてきた
そんな村で初めて優しくされた
色々な感情が入り交じって閃の瞳には涙が溢れた

「ぐっ、ごほっ・・・ごほっ・・・」
急いで詰め込んだため気管に入ってしまった咳き込んでしまう

「ほらほらゆっくり食べなさい。ご飯は逃げないわよ。」
お茶を用意し、閃の背中を撫でる
その笑みに閃はまた嬉しくなる

運命の出会い？

とたとたとた

「お義母さん！！患者さんきたよ！！あ！起きたの？」
いきなり入ってきた少女に今度こそ閃は大きく咳こんだ

「おやおや……。すまないねえ、神楽。ここは任せてもいいかい。
私は患者さんを見に行くから」

「はい。」
腰を上げようとしたお婆さんの服を閃は縋り付く気持ちで掴んだ
そんな気持ちを察してか

「大丈夫。大丈夫。」
閃の頭を撫でゆっくりと閃の手を放した

お婆さんの去る音を聞きながら、閃は顔を上げられなかった
そんな二人の静寂を破るようにクウーと音が鳴った

閃が顔を上げると真つ赤な顔した少女がお腹を押さえていた
「き、気にしないで！！何でもないの！！」
慌てて手を振るがまたクウーとお腹が鳴る
そのあまりにマヌケな音に閃は吹き出してしまふ

「笑う必要ないじゃない・・・」
頬を膨らませる少女が何とも可愛らしい
「・・・ありがとう。君のおかげで体もう痛まないよ。」

治療をしてくれたのはそう言えばこの子であった、と思いだした閃

は真っ直ぐに頭を下げた
今度は少女の方が笑い出した

「な、何がおかしいんだ？」

涙を浮かべて笑う少女に今度は閃が眉をひそめる

「あはは・・・ご、ごめんなさい・・・、はあはあおっかしい。だって、私の治療ってかなり痛いらしいから喜ばれるより、怒られることが多いんだ。だから、凄く嬉しい。こちらこそありがとう。」

満面の笑みの少女にドキリとした

顔が赤くなるのを閃は自覚した

二人して目が合うと、お互いがおかしくて笑った

「そう言えば君は何て名だい？僕は閃せんよろしく。」

「私は神樂かぐら。よろしくね、閃」

これが二人の出会いである

二人はこの村で出会い、育っていく

互いに惹かれあい、その運命に翻弄されて行かれることも知らずに
・

懇願のプロポーズ？

それから五年の時が過ぎた

十五で成人と認められる？国では閃は成人を迎えた

昔はいじめられては泣いてるような大人しい子だったが

今では背も伸び、精悍な青年へと成長していた

その姿を閃の母はみることなく亡くなった

二年前に盗賊団が村を襲い、食料が奪われ村はさらなる貧困にみまわれた

そのせいで閃の母は餓死した

美しい寵妃であった面影など全くはないが

最後まで閃に食料を優先させて、眠るように逝き、満足そうな死に顔であった

その後の閃を引き取ったのが神楽の義母の柳燕りゅうえんである

神楽と同等に育て、慈しんできた

ある日の朝

「閃、そなたも大人の仲間入りじゃ。嫁さん探しもせねばねえ。」

朝、顔を洗ってきた閃に向かって義母である柳燕が何気なしに言った

「な、何言ってるんだよ！柳燕さん！俺ここから出て行く気無いぜ
！」

「何ってるんだい。いつか子供は親の元から巣立っていくもんだよ。」

「じゃ、じゃあ、柳燕さんは誰が面倒を見るんだ！ここに俺みたいな働き手がいた方がいい 痛っ！」

後ろから薪でゴンと叩かれた
叩かれた部分をさすりながら振り向くと

「なーに言ってるの！私に勝てない男が男手と言っな！」

片手に薪を抱え、もう片手に閃の後頭部を叩いた薪を抱え仁王立ちする神楽がいた

この時、神楽は13才を迎え、小さい頃はそんなに無かった身長差が閃より頭一つ分低い身長差になり、クリツとした眼、寒さに頬が赤くなり、愛らしい少女に育っていた

だが、この少女を舐めてはいけない

二年前の盗賊団以降、この村は何度か襲われたことがあった
しかし、その度神楽がまとめた自衛団により、村を救ってきた
神楽はこの村一の武術の達人となっていた

「な！痛いだろう、神楽！た、確かにお前よりは弱いけど、田畑を耕すのは俺の方が得意だろう。」

「そうじゃない、閃！そろそろ、官吏の試験を受けに行ったらどうだと言っているんだ。」

「な、何でそれを・・・」

「閃が一生懸命官吏の勉強をしているのは知ってる。」

「だけど俺は王宮から追い出された人間だ。受け入れられるはずがない」

「諦めるのか・・・、閃。」

見つめてくる神楽の目に閃は反らしたくなる

だが反らすことは難しい。無垢な瞳は、閃の真実を見抜こうとする
一触即発の雰囲気

「ふふつ。そう言わないの神楽。閃も思うところがあってやっているんだよ。閃、お前のお母さんからお前を預かったときに頼まれて
いるんだ。好きな道を進みなさい」

そこで救いの手を出すのは柳燕だ

二人の間にわって入り、優しくなだめる

「つつ、俺はここにいる」

それだけ言うと、閃は駆けだしていった

閃がいなくなつた空間で柳燕の目が神楽に訴えてくる

「・・・神楽。」

「分かってる・・・。迎えに行ってくるね。」

閃に持っている淡い恋心が育ての母である柳燕にはお見通しである
それが認めるのが嫌で

閃が駆け出しって行った方向に神楽も走り出した

懇願のプロポーズ？

閃は一人神楽と初めてあつた場所にいた
何かに悩んだとき、悲しいとき、剣の練習をするときこの場所に
来
てしまう

ガサリと音がした方に目を向けると神楽が立っている
いつもこの場所に迎えに来るのは彼女の役目だ

「・・・帰ろう、閃。お母さんが待つてるよ。」

「・・・神楽。俺はお前達家族に必要ではないのか？俺はやはり誰
からも必要とされないのか・・・。」

閃が顔を伏せ、握りしめている拳が震えている

「・・・閃は家族だよ。家族なら家族の幸せを祈る。それが当
り前でしょう。閃がどこに婿に行っても閃の幸せを祈ってる」

神楽は自分を褒め称えたいと思った。笑顔でこんな嘘がつけるとは
自分自身思つてはいなかった

閃が誰かの横に笑つて過ごすなんて事を考えるだけでもいやだった
「だからね、閃。家に帰ろう。」

閃の大きくなつた背中に手を置き顔を覗き込む

閃は何かに耐えるように目をつぶり

口を開いた

「……神楽。俺……俺が好きなのは……お前だ。」

「えっ……」

狼狽えた瞬間神楽の足は後ろに一步下がってしまう
だがそれを閃の手が引き留める

「俺は、お前が好きだ。家族だからじゃない。神楽というお前が好きだ。結婚するならお前以外考えられない」

あまりにも真剣な閃の黒い眼に吸い寄せられる

嬉しいといきなりの告白に神楽の頭の中は混乱していた

「な、何、言ってるんだ閃。だっ、だって私まだ子、子供だし……か、家族だよ。」

「神楽！お前が子供だというなら、お前が成人するまで待つ。家族じゃなくて俺をきちんとして見てくれ！」

神楽の腕を閃が握りしめているので離れることが出来ず、神楽はイヤイヤと下を向いて首を振り続ける

閃の瞳を見たら私も好きだと伝えたくなる

いつもだったら簡単に離せる閃の腕が何故が重く離れない

ぐいっと力強く引つ張られ閃の胸にダイブする

閃が包み込むように神楽を抱きしめてくる

閃の鼓動が聞こえる

まるで全力疾走したかのように胸板を通じて伝わる
ジワリと瞳に涙が集まって限界を超えた

「…………泣くほどイヤか…………」

ポツリと言われた台詞に神楽は首を振る

「神楽、頼む…………俺の妻になってくれ…………」

閃の懇願にも似たプロポーズに神楽は横に振っていた首を縦に振った

「!!!!!!」

急いで閃は神楽の顎を上に向かせた

「い、いいのか？」

「大好きです…………閃。傍にいたいです」

その後は神楽を力強く抱きしめ

「ありがとう」

と、耳元で何度も何度も閃がささやいていた

お別れの結婚式？

そして二年後神楽15才、閃17才
成人した神楽をすぐさま閃は嫁に欲しいと柳燕に申し込み
了承を得た

そして春の日差しがまぶしい日に二人は婚儀をあげた
婚儀では、一つの杯に酒をつぎ、お互いの左手小指を少し切り、一
滴の血を垂らす
それを互いに一口ずつ飲みあう
こうすることで肉体を越え、相手の一部になるという古めかしい伝
統行事である

貧困で婚儀の衣装などそろえることが出来なかったが、二人は幸せ
だった
村の者達も楽しい話題に沸いた
久々にこの村に楽しい時間に包まれた

王宮からの使者が来るまでは……

ダダダダダダッ

土煙を上げて4、5頭の馬が駆けてくる
駆けてくる馬に盗賊団だと思った村の者達は我先にと逃げ出していく
神楽は頭に簪を付けているぐらいでこれといったおしゃれをしてい
たわけではないので

すぐさま直径5センチほどの自分の身長より長い棒を掴み、飛び出した

それに並んで閃も剣を持って飛び出す

駆けだしてくる馬の進路方向に立ち神楽は真つ向から立ち向かった棒の先端で地面を突き、その勢いで自分自身の体を宙に浮かせる高さは3メートル程の空中で馬の上に乗っている者達を確認すると地面に突いていた棒を引つ張り一振りした流れるような動きに反応が出来ず馬の上からたたき落とされた鎧を着た者達は地面へと落下する

馬は乗り手が急にいなくなったことに怯えそのまま走り去ってしまった

馬がまいあげた土煙が収まると

地面にたたき落とされた者達は次に襲ってきた剣と棒に身動きが出来ない

「一体何者だ・・・盗賊なら容赦はしない」

閃の容赦のない声と首に押しつけられる剣に

「ひっ」と兵士が頼りない声を上げる

「わ、我々は、しゅ、主人の命により？国太子閃様を捜しに参りました!」

「えっ、」

閃の持っていた剣が首元から離れたそれをいいことに兵士達は声を上げた

「放せ！！我々は三老、凱長官の命により我らが主、せいご？朱様から太子閃様を探しに参った者のである。お前のような平民が触れて言い存在ではない！！さっさと放さぬか！！それと閃様を出さぬか！！」

村の者が怯えていることをいいことに強気に出てくる兵士達

「出すもなにもそこにいる。」

その兵にくつてかかったのは神楽だ

「な、なにを！！」

首にあつた剣の持ち主に目を向ける

狼狽える瞳とかち合うと、信じられないと思つた兵は

「何を言う、小娘が！！このような貧弱そうな者が王太子であるはずがない！！」

「だそうだ、閃。玉を見せてやれ。」

閃は胸からかけていた小さな紅玉を出した

母が唯一王宮から持ち出せた物だ

寵妃の証として父親の柳瞬王が渡した物だ

「つつ失礼しました。ご無礼をお許してください」

打って変わって、平伏をして閃に許しを請う姿に閃は持っていた剣を降ろした

そして背を向けて歩き出した

「閃どこに行くの？」

「俺には関係ない……。俺や母さんを城から追い出した者達に何故俺が会わなければいけない。さっさと出て行け。」

背中からありありと分かる怒気に神楽は溜息をはいた
神楽は平伏している兵士の横に片膝を付いて

「兵隊さん。閃に何の用があつてきたのですか？」

「知らなくていい！！また俺から大切なモノを奪うと「だから逃げるの？閃らしくないよ！最後まで逃げない。それがあなたでしょう。大丈夫。傍にいるから。どんなことがあつても、どんな敵がきても、大丈夫だよ」

背中を向けたまま声を荒げる閃に対して、神楽は柔らかく答える
男としての威厳が全くなくなるような台詞に
閃は大きな溜息をはいて

「何の用だ……」

渋々ながら振り返って兵に聞いた

「はっ、ありがとうございます。この度78代目国王陛下が御崩御なされました。閃様の兄上様です。他の王太子様方も崩御されました、王家の血筋を残す男児が閃様、唯一とあいなりました。そこで、血筋を残すためにも、閃様には王宮に戻られ、玉座について頂きたいのです。」

まさに青天の霹靂だった

王太子として8番目、役にも立たないとしてあれだけの仕打ちを受けながら

王家の血筋が危ないと、無実の罪であるが反逆者の烙印を押されている閃を玉座につけたいという

「ふははっ、ははは!!」

高らかに笑い出した閃に見守っていた村人達、兵士達は呆然とする神楽だけはじつと閃の心を心配していた

「つつふざけるな!!!お前らが何をした!!俺の母さんに!俺の父さんに!!忘れたとは言わせない!!なのに今更、玉座だと!!俺はお飾りの人形じゃない!!」

怒気を全面にぶつけられ、ひっ、といつもの閃を知っている村の者さえ声をあげる者までいる

閃は叫び終わると走り去ってしまった

「ねえ、兵隊さん。その家が私の家なんだ。そこで休んで。大丈夫、閃は私が説得する」

兵士達を村人達に任せ、閃がいるあの場所へと走り出した

お別れの結婚式？

閃は同じ場所にいた

荒れ狂う怒気が静めるかのように剣を振り続けていた

だが、それが逆効果となり怒気を増長させている

あまりの怒気に動物たちも逃げだし、鳥の声、虫の声さえしない

「そんな体の動きじゃ、体を壊すよ。」

がむしゃらに振り回していた剣を棒で受け止めた神楽が声をかける
受け止めた相手が神楽だと分かると、閃は込めすぎていた力を抜き
持っていた剣を落とした

覗き込むように下から見つめる神楽の瞳に

閃の目がドンドンと悲しみを映していく

「……大丈夫か、閃」

神楽の声がきつかけに閃は神楽をきつく抱きしめた

神楽も閃の背中に手を回して、優しくトントンと叩き始めた

肩にある閃の顔から伝わる雫と慟哭を慰めるように

あれから一刻が過ぎ、いつの間にか夕刻となった

閃も落ち着いたのか神楽を抱きしめるだけで、さっきからピクリと
も動かない

ただ、神楽の服を握りしめているところを見ると意識はあるようだ

「閃・・・起きてる?」

神楽が尋ねるが動かない

「・・・ねえ、閃・・・離縁して・・・」

これには閃はがばつと起きた

目を大きく開いて小さな神楽の肩を掴む

その手はわずかながら震えていた

「・・・な、何・・・言ってるんだ・・・」

震える唇から途切れ途切れの言葉が出てくる

今は精一杯伸ばしても撫でること難しくなった閃の頭に神楽が手を伸ばす

「伸びたね、閃・・・私よりこんなに大きくなって・・・立派な大人になったね。」

「神楽!!何言ってるんだ!!」

「閃・・・玉座について・・・あなたなら良き王になれるよ・・・」

「俺は王にはならない!!あんな場所にも戻らない!!離縁もしない!!」

「閃、覚えてる・・・お義母さんと近くの村が襲われたときに薬師として行ったときのことを・・・」

数ヶ月前に近くの村が盗賊に襲われた
村は全焼、女子供老人関係なく殺され、生き残った者は片手で足り
るくらいだった

その後3人で村人達の墓を作った

三人で手を合わせながら、神楽は嘆いた

戦争が続く世の中に、助けられなかった命に

力なき自分たちにどうすることも出来ない世界に

「閃、あなたも言ったよね・・・戦争を無くしたいって・・・あな
たが玉座につけば・・・戦争を止められるの・・・止めることが出来
る力を得られるの・・・平和な時代が作れる・・・あなたなら出来
る・・・」

神楽の瞳から雫を頬を伝った

「・・・か、神楽・・・」

「あなたは玉座につくべきだ・・・その隣に私はいちやいけない・・・
大丈夫。離縁された女でも、こんな強すぎる女、誰も娶りたいなん
て思わないわ・・・」

この時代離縁されると言うことは、
出来ない女という烙印を押されることであり、次の結婚が望めなく
なってしまう

泣きながら笑みを浮かべる神楽を愛おしいと閃は思えた

「・・・い、イヤだ・・・傍にいてくれ・・・」

抱きしめようとする閃の手を振り払い、間を開けた

「閃、天命に従って自分の道を歩んで・・・玉座に座って・・・あなたの作る世界で生きていくから。大丈夫。閃、大好きだよ。大好きだから・・・」

右手を伸ばして別れの握手を神楽は差し出した

「・・・神楽・・・」

閃はその手を握れなかった

両目から溢れる涙に視界がゆがんだ

女の決意

太陽が沈み始めた頃二人は村に戻ってきた

そして、王宮からきた兵達に王宮に戻ることを閃は伝えた

次の日村では閃に対するお別れ会、いや神楽もついて行くと思って
いたため行われた

しかしその会に神楽の姿はなかった

森に閃に持たせる薬草を採りに行くと言って、朝からいなかった

どれだけ森にいただろう

背中に背負った籠にはたくさんの薬草が入っている

「・・・採り過ぎちゃったかな・・・こんなにあっても閃の荷物になっ
ちやうかな・・・」

一人で言った言葉に涙が出てきた

「うつつうわあああああ！！！！」

やっと、一人になることが出来て、感情が爆発した
溢れる涙を止めることなく、声を張り上げて泣いた

日はドンドンと傾いて西の空が赤く染まり始めてきた

「やばいなあ・・・目が腫れてるな・・・」

目を冷やすため籠をもう一度背負い治し川へと歩き出した

下を向いていても森のことを熟知している神楽は迷わずに近くの川まで歩いていける

「……………だろう。……………どうせ……………できない……………」

ふと川の近くにいる人影に神楽は気づいた

川にいたのは閃を迎えにきた兵士達だった

「どうせ、あの閃とかいう男も何も出来ないんだろっ」

「ああ、俺らのご主人様の人形になって王家を牛耳ろうって言うことらしいぜ」

「じゃあ、いらなくなったらポイツてことだな」

「ああそういうことらしいぜ。俺たちもおこぼれが貰えるといいなあ」

ゲラゲラと笑う声に神楽は怒りを越えた感情が溢れてきた

神楽は走り出した

持っていた籠も投げ出して村へ、閃の元へと急いだ

「お！神楽が帰ってきたぞ！！」

「神楽ねえちゃん！！行っちゃうの！！イヤだあ！！」

「残念ねえ、あなたがいなくなるとこの村は寂しくなるは」

神楽が村に着くなり村人に囲まれた

だが、呼び止める声を無視して神楽は目指す人を捜した

自分の家にたどり着いたときに捜し人は見つかった

「閃！！」

部屋の上座で落ち込んで座る男に神楽は足音を立てて近づいた

閃の服の首筋を掴み閃を立たせた

そして、顔の近くに引っぱり、今にもくっつきそうな距離で

「閃！！私もついて行く！！私は・・・あなたを守る！！」

閃の目はこれ以上ないほど開いた

「閃！！ごめんなさい！！やっぱり、あなたの傍を離れたくない！！」

一気に言い放った声に、その場は一瞬で静かになった

「はあああ、閃こんな娘だけど貰ってくれないかな？」

静かな空間で放たれた柳燕の言葉に神楽の意識が戻ってきた

「あっ！」

見渡せば多くの村人がいる

その目が立っている二人に注がれる

閃の襟を掴んでいた手が緩くなり、どんと顔が赤くなる

閃に目を向けると片手を口に当て、目線が彷徨っていた

あまりの恥ずかしさに閃の襟から手が離れようとした瞬間、今度は閃の手が伸びてきた

背中に手が回され、引き込まれる

反応できないまま、耳元でささやかれた言葉に目が開く

「……共に……歩もう……」

「閃、どうか娘をよろしくお願いします。」

柳燕の言葉と同時に多くの村人から祝福の言葉が飛んだ

男の決意（前書き）

今回はかなり残酷シーンが入ります。気分を害する恐れもあります。気分を害しても一切の責任が取れませんので、自身の責任としてお読みください。

男の決意

そして次の日

二人は晴れた空、村を出た

村から貰えた二頭の馬に跨り、都に向かった

離れていく村に神楽は哀愁を感じた

産まれて育った場所、義母と支え合った場所

閃と共に育ち、笑いあい、泣いて、喧嘩して、共に歩んだ場所を離れていく

心細さから溢れそうになる涙を唇をかみしめ、涙を堪えていた

閃は神楽の馬の横につけ

「今のうちに泣いておけ・・・、大丈夫。俺が傍にいる」

神楽が声を押し殺して泣いた

神楽は村が米粒ほどの大きさになっても何度も何度も振り返って見つめていると

村から煙が上がった

その煙はあまりにも黒く、大きな雲だった

神楽の心臓がドクンと嫌な音を立てた

その煙は何度も嫌と言うほど見たことがあった

村が焼かれる煙にあまりにも似ていた

「・・・せ・・・ん・・・」

小声で震える声に閃も何事かと神楽の視線を追った

「!!!!!!」

空を黒々と染める雲に、赤いものが混じる

「・か、義母^{かあ}さん!!!!」

神楽は乗っていた馬の進路を変えた
おもいつきり胸を蹴り、馬は駆け出した

閃も続いて馬の胸を蹴ろうとしたが、

「お止めください!どうせ、賊にでも襲われたのでしょ。助ける
必要などありませんよ」

見下したような兵の言い方に

「ふざけるな!!自分の国の民が苦しんでいるのにそれを野放しに
することが王の仕事か!!」

一括した閃は神楽の後を追った

あまりに遠くにきすぎていた
どんなに馬を駆けようとしても、先ほどから一歩も進んでないよう
な気がする

気持ちだけが焦り、視界が滲んでくる

「はあはあはあ……」

村に戻ってきた
いや、村だった場所に戻ってきた

今日の朝に出てきた村はもうその場にはなかった
全てが灰と煙になり、空を黒く染め上げていた

「か、義母さん！！義母さん！！」

神楽は馬から飛び降り走り出した
生まれ育った場所なら目をつぶっていても、歩いていける場所だが
こんなにも変わり果てた姿に頭が混乱する
道ばたに黒こげになった物言わぬ存在になった者達が多く倒れていた

駆けた先に家はあった

全てが灰となった状態であった

入り口だった場所に立ってみた
手を伸ばせば立て付けの悪い扉があるはずなのだが今は、手は空を
切る

一歩踏み出すと焼ける匂いがする
何度も嗅いだことがある人の焼ける匂い
ドクンドクンと心臓の音がやけに大きく響く
全身から冷や汗が出てくる

ゴクンとツバを飲み、一歩踏み出した
変わりすぎた家に呆然とする

「か、義母さん！！」

バタバタと探し回った

この匂いを否定したくて、一生懸命捜した

そして見つけた

台所の釜の近くに丸まった状態で黒々となり、煙をあげていたそれが人であったかも疑わしいが

その黒々としたものは、神楽が朝に最後に義母に渡した羽織の一部を纏っていた

匂いが鼻をつく

胃からこみ上げてくるものに止めることが出来ずに吐き出した

どれだけ吐き出しても、この不快感はとれない

瞳からはあふれ出す涙が止まらなかった

そして、神楽は意識を手放した

もう何も、考えたくなかった

「神楽!!!」

神楽が倒れていくのを見つけた閃はすぐさま駆け寄った

急いで仰向けにし、頬を叩く

反応は何も返ってこない

ただ、涙だけが次々と溢れては頬を濡らし、焼けた地面に落ちていった

閃は顔を上げ周りを見渡す

そこには第二の母である柳燕だったはずのモノがある

閃も息をのむ

柳燕の下には幼い固まりが二つある

村の子供達だったのかもしれない

それすらも分からないほど、直視するにはあまりにも残酷な光景だった

閃は家から離れ、まだ焼けていない木の下に神楽を連れ出した
周りには生きている存在が全く感じられない

昼間のこの時間帯なら、茶を飲みながら休憩している者達の声が何
処かしら聞こえてくるはずだ

だが、今はパチパチと何かが燃える音と崩れ去る音しか聞こえない

「誰がこんな事を・・・」

閃の握りしめた拳から血が滲み始めた

神楽を一人で寝かせておきたくなかったが、存命している者を捜す
ため

神楽に布を被せ、その上に木の葉をまいて、カムフラージュを行っ
て村の中を歩き出した

家の近くの家を一軒一軒探し回ったが、人の存在は何処にも感じら
れない

そう思つて神楽の元に戻ろうとした時だった

「ギャーーーーー」

人の悲鳴が聞こえて閃は走り出した

そこは村の外れの森の傍だった

大柄の男達の足下に村の者が倒れている

男達が持つ剣からは赤い雫が点々と地面を赤く染め上げている

閃は自分の体の中で血が逆流する思いだった
すぐさま駆けだして斬りかかりたい思いだったが男達の話によって
それは中断された

「こんな村潰すだけで金が手にはいるのかよ」

「そうらしいぜ。なんでも、お偉いさんのガキがここにいるらしく
てよ。そいつの過去がバレちゃいけないらしくて、この村潰せとよ
」！

「とんだ災難だぜ、この村にとつたらな！」

「ああ、それを頼んできたのもこの国のお偉いさんだからな！」

「まあ、俺たちにとっては、この村のちんけな金と大金が入るから
いいとするか！！」

「あはははは！！」

閃は愕然とした

この村に起きた災難は自分がいたせいなのか
俺が玉座なんか望んだからこの村は襲われたのか

頭がガンガンと痛む

目眩まで襲ってきた

呼吸が荒くなりうまく立っておくのが難しい
膝をつき倒れてしまいそうになった

「あ！そう言えば、あと女一人殺せと言われてたな」

「ああそつだ、なんて名だつたけ？か、花梨かりん？違つ、ほら……」

「うーん、！あつ、神楽だ！」

男達の声に閃の意識は戻ってきた

「何でも、その女、ガキに言い寄つてやがる、尻軽女だとよ！」

「そりゃあいい！！殺す前に俺たちで味わつてやろつぜ！」

「いい女なら高く売れるかもしれないな！！！」

未だに続く神楽を卑下する言葉と下品な笑い声に閃はこれほど狂暴な気持ちを持ったことはない

腰に差していた剣をスルリと引き抜くと

男達の前に身をさらした

「お！！まだ殺しそこねがいたらしい！！！」

「あいつ、俺たちに向かつてくるつもりらしいな！！！」

「剣なんて持つて危ないでちゅよ！」

「ぎゃはは、気持ち悪い！やめろつて！」

もう、閃には何も聞こえてはいなかった

「……には……すな……」

ポツリと呟いた言葉に全てを聞き取ることは出来ない

「うん!？」

「怖じ気づいたのか？」

不審がる男達に閃は顔を上げ言い放った

「神楽には手を出すな!!!!!!!!!!!!!!」

一気に駆け出し、間合いを詰め先頭の男の右腕を切り落とした
腕が舞い上がり、血が飛び散る

我に返った男達が叫び声を上げた

男達は閃に一斉に攻撃に転じた

閃はそれを流れるように交わし、次々に男達の右腕を切り落とした

痛い痛いと言き叫ぶ者

自分の腕を一生懸命肩にくっつけようとする者

腕を持って泣いている者

腕を持って逃げ出した者

周りが真っ赤に染まっていることに何のためらいもなかった

敵がもう襲ってこないことを確認した後、閃は駆けだした

神楽が心配だった

自分がいない間に何者かに襲われていないだろうか

その思いが、足を一步、一步前に前に押し出した

元に戻ると、神楽はまだ意識を取り戻してはいなかった

胸が上がり下がりをゆっくりと繰り返している

呼吸は落ち着いている

だが、溢れる涙だけが眠っている神楽の異常信号であった

その涙を払おうと指を伸ばした
だがその指が真っ赤に染まっている

慌てて閃は自分の手を見つめる

そこには真っ赤に染まった自分の手があった

服には自分の血ではない、赤い血のあとがあり

自分の顔についたためりに手を当て、取ってみるとそれもまた、赤い血であった

閃は自分の手を服に擦り付けた

どんなに擦っても赤い液体は取れはしない

まるでこびり付いたように、閃の手を真っ赤にしている

「と、とれない、取れないよ、神楽・もう・触^ふれられない・
神楽・君にもう触^ふれられない・・・だけど、守る。君をどんなこ
とがあっても守ってみせる・・・。だから、傍にいてくれ・・・」

閃は両手を組み合わせて祈るようにして眠っている神楽の前で泣いた
自分が産まれてきてしまったことに対して、

育ててくれた者達への悲しみ、

愛する者を危険にさらしてしまう事になっても傍にいて欲しいとい
う己の貪欲な気持ち、

全てに申し訳なさに閃は泣いた

その後、兵達がまた迎えにきた

血まみれの閃に驚いたが、怪我の血でないと分かるとすぐに着替え
させた

神楽は未だ意識が戻らなかった

王宮に着くまでの2週間の旅の間も眠ったきり起きることはなかった
兵が女を抱えた状態で入城することを何度も止めたが、一向に譲ら
ず、閃が運び通した

王宮に着いてからも眠り続けた神楽を閃は後宮の一番奥の楼閣に運
んだ

まだこの場所で信じられる者は誰一人としていない
いや、信じることは出来ないだろう

村を襲うことを命じた者がこの王宮にいる
絶対に許すことが出来ない

そんな場所で神楽が眠り続けることはとても痛い
存在があっても、声がない、触れてくれる手が動かない、全てを癒
してくれる笑顔がない

閃の心は氷のように冷たくなる

「誰一人として、この部屋に近づけることは禁じる。近づいた者は
重罪として罰する」

後宮の女官達に厳命した閃は神楽の部屋に何重もの鍵をかけた
神楽に逢うことが出来るものは自分だけでいい

神楽の世話も何もかも、自分がやるう

そして、神楽の幸せだけを守っていいこう

他がどうなるうとかまわない

神楽の笑顔を奪うものは絶対に許さない

握りしめた手をさらに強く握り

一番外側の鍵をかけ、これから始まる玉座につく茶番劇に参加して
やるうと心に決意する

楼閣の亡霊

王宮について、後宮に連れて行った神楽は官吏の者達は下女として扱うように新しき王に頼み込んだが、閃が頑として譲らず、閃は神楽を寵妃として召し抱えた

寵妃として召し抱えられても婚儀を行うことも出来なかった
なぜなら神楽が眠り続けていた
その神楽の世話を閃は一人で行っていた
女官の誰一人として神楽の近くには近づくことは出来なかった
誰一人としてその寵妃の姿を見ることはなく
閃と神楽が村を出て一ヶ月が過ぎた

「神楽、幸せになるんだよ・・・」

いつもの村の光景で笑っている義母がいる
村人達の笑みと義母の笑顔に神楽も笑顔を返す

その瞬間義母と村人達が炎に包まれた
義母の悲鳴が聞こえる

村が焼けていく
感じる熱と人の焼ける匂いに助けようと手を伸ばす
だが底なし沼に囚われたかのように自分が動くことが出来ない
一生懸命に伸ばす手も届かない
張り上げる声は悲鳴にも似ていた

「はつつつ!!!はあはあはあ」

飛び起きた瞬間あまりの頭の痛さに手で押さえる
呼吸が荒く、心臓の鼓動が異常に早く感じる
体が震え、噴き出した汗に嫌悪感を感じる

呼吸が少し落ち着いてくると

少し周りを見る余裕が出てきた

どこかの部屋の中なのか窓は閉められ日の光が全く入ってこないが
それでも、ガラス越しに入ってくる光が薄暗く部屋の中を照らして
いる

目をこらしてみようとそこら彼処に整えられた調度品

綺麗な絵や置物、見知らぬ場所に神楽の頭は混乱してくる

自分がきているのも村を出てきたときとは全く違う滑らかなさわり
心地の服

自分のいる場所を確認したくて寝台の上から恐る恐る足を降ろし
いざ立ち上がろうとした瞬間

膝から下に全く力が入らず崩れるように床に倒れた

床には柔らかい敷物が敷いてあったため全身を強く打つことはな
かったが

それでも痛い

「つつっ！」

うめき声を上げながら足元を見る

足は自分の体についており異常なんて見られない

腕について上体を持ち上げようとしたがその腕さえ力が入らない
さすがにこれには神楽は焦りだした

「・・・なんで・・・なんで・・・どうして!!!! た、助けて、閃!!!
! 義母さん!!! 助けて!!!!!!」

焦りは混乱を生み出し、冷静な判断力を奪う
神楽は何とか出る声を懸命に張り上げた

張り上げた声は楼閣の入り口を守る番兵達の所まで届いた
楼閣の最上階にいるらしい王の寵妃の噂は有名であったが
王が入城してすぐさまこの楼閣の一番上に閉じこめてしまったため
本当はいないのではないか、死人を入れているのだとか、色々な憶
測がとんでいた

だが、その最上階から声がする
異常を知らしている声に本当であれば、すぐさま助けに行かなければ
いけないが

この楼閣は入り口を守る以外は何も番兵達には任されてはいない
この楼閣に入ること、寵妃を守ることさえ任されてはいない
ただ入り口に立ち王以外を入れてはならぬという命を厳命されてい
るだけだった

この楼閣の入り口の鍵さえ番兵達は持つてはいなかった
持っているのは新しき王、閃王のみだった

聞こえてくる声に番兵達は悩んで

「この声は怨霊の声だよ！！やっぱり死人がこの中にいたんだよ！
！」

「そんなわけないだろう！！」

「じゃー！聞こえてくる声は何だよー！！」

あまりに悲痛そうな声に番兵達は顔を見合わせ悩み
しょうがなく、自分たちの上司に相談するしかないと駆けだした

番兵達が向かった先は兵部尚書

ここには8つの軍があり、その一つ一つを8人の将軍が管理している
それぞれの軍は色によって分けられている

城の警護を任されている軍は蒼の軍と呼ばれている
その蒼の軍を任されているのが馬湊はそつ威

27歳にしてこの軍の将軍である

実力はあるが色男として有名で遊郭で名を知らぬものはいないとい
うほどである

「馬、馬将軍！！大変です！！」

「ろ、楼閣で、楼閣で！！！！」

一通りの礼儀を行って飛び込んできた兵達は将軍に詰め寄った

「何かあったのかい？」

このような状態に慣れている馬将軍は机に足をのせ、のんびりと新
しい王から賜った勅令を手でもてあそんでいた

「大変なんです馬将軍！！楼閣の亡霊が出ました！！」

「さつきから亡霊の声が聞こえるんです！！」

「おっかねえ！！！！」

ぶるぶると震える兵達に馬將軍の顔に笑みが浮かんだ

「本当か！…こりゃあいい！！最高の美姫に会いに行こう！！」

颯爽に部屋を飛び出し楼閣へと歩き出した

「えええええ！！いいんですか！！馬將軍！！」

「か、鍵持つてませんよ！！」

「声がするんだろう？だったらこの城を守るためには、亡霊を倒さないと！何の問題もないよ」

大股に歩く馬將軍を駆け足で追いかける兵達
明らかにこの將軍はこの騒ぎを楽しんでいた
端正な顔の口角が上がり、うきうきしている

一体どんな女だ！あの無慈悲の王が毎夜訪れる女とは！楽しみだ！
馬將軍の足はさらに速まった
後宮の門さえ軽々とくぐり抜け、最奥の楼閣へと向かう
だがその足も楼閣の前で止まってしまう

楼閣の前の入り口に身も凍るような冷気を放つ王が立っていた
ごっく、生唾を飲む馬將軍は自分の両手に大量の冷や汗が信じられ
なかった
多くの戦いを身をもって経験してきたが、ここまでの怒気と殺気を
感じたことはない

後ろについてきていた兵達は腰が抜け、失禁している者もいる

「どづいつことだ・・・」

王から放たれる言葉に鋭い刃物を感じる

「お、王よ・・・何故ここに・・・」

馬將軍もこの年下の王に声が震えてしまう

「私の質問に答えんか！！何故ここに兵がない！！この場の守りを任せていたが、そなたの軍は命令一つ満足に果たす事が出来んのか！！」

閃の怒濤が響いた

その声には兵は失神している者まで出た

「も、申し訳ありません。この楼閣から声がするという兵から報告を聞き、中で何か起きていますのではと、兵達が私の元に参りました。」

急いで王に跪いた馬將軍は事のあらすじを話した

「な、なんだと！！声がしただと・・・」

さっきまで閃の冷気が一瞬で消えた

閃は急いで入り口の錠に鍵をさした
慌てすぎて鍵がなかなかささらない

舌打ちをしながら閃は何とか鍵を開ける

扉を乱暴に押し開け中へと入っていく

馬將軍も続いていこうと思ったが立ち上がった瞬間に、膝が震える膝からガクリと倒れた馬將軍は

「な、なんだあいつは・・・あれが・・・王か・・・やつかいな奴が王になったもんだ」

全身から出る冷や汗を拭きながら呟いた

「神楽・・・神楽・・・」

何重もの扉の鍵を開け、最上階にいるはずの神楽に向かって足を纏れさせながら前に進む

兵が聞いたという声は今は一切しない
嫌な考えが閃の頭に浮かぶ

それを振り払うように最後の扉の鍵を回した

ダン！！！！

大きな音を立てて扉が開いた

あまりの強さに金具が取れ、扉が外れて倒れた

荒い呼吸を繰り返して閃は部屋中を見回した

その視線は絨毯の上に倒れている神楽でとまった

「か、神楽！！」

駆けだして急いで背中に手を回し抱き起こす
乱れた前髪を優しく払って呼びかける

「神楽・・・神楽・・・」

その呼びかけに反応するように神楽の瞼がピクリと動く瞬きを繰り返し、ゆっくりとその眼をしっかりと開けた

「神楽！！！！」

その嬉しさに閃は神楽を抱きしめる

「・・・せ・・・ん・・・」

耳に聞こえる神楽の声が生きていると深く感じられる

「ああ、俺だよ。神楽。神楽」

力強く抱きしめられ手、少しずつ神楽の意識が覚醒してくる

「・・・閃、閃・・・義母さんが・・・村が・・・」

握り返してくる神楽の手が震えていることが閃の心をズキリと痛む

「ああ、柳燕さんは、村は夜盗に襲われた・・・」

閃は嘘をついた

真実を知っているが話すわけにはいかなかった

こんなに弱っている神楽に真実を話せば自分の元から去ってしまうかもしれない

その恐怖が閃を嘘で固めた

「うつあああああ！！！！！」

閃にしがみついて泣く神楽を閃も強く抱きしめる
少しでも傷ついた神楽の心が安まるように何度も何度も頭を撫でた
神楽の鳴き声が止み嗚咽が漏れ始めた

「大丈夫か？今はゆっくり休め・・・」

膝と肩に手を回し、ゆっくりと持ち上げ寝台へと運ぶ
寝台に寝かせ、何か食べ物が飲み物を持ってこようと離れようとす
るが

閃の着物が引つ張られる
着物をしっかり掴んでいる神楽はイヤイヤと首を振っている

「神楽何か食べたくないか？喉も渴いているだろう？何か少し口に
含むも」

なだめるように声をかけるがそれでも頭を振り続けた

「わかった。そばにいる。今はゆっくり休んで、後で少し食べよう」

一緒に寝台に横になり胸の中に閉じこめる
ずっとこのまま閉じこめてしまいたい
誰にも会わず、俺だけに会って神楽を守っていききたい
誰一人として神楽を傷つけることは許さない

その覚悟を示すように神楽を強く強く抱きしめた

すれ違う思い

それから、閃は甲斐甲斐しく神樂の世話をを行った

朝は共に起き、楼閣の入り口に置かれる朝食御膳を閃自身が運び、朝食を共に食べ、閃は後ろ髪が引かれる思いで執務に向かう、だが、昼になるとどんなに執務がたて込んでいても、目処のいい所までは何が何でも終わらせて後宮にいる神樂の元に急ぐ

共に朝食を食べ終わるとまた閃は執務に戻るが、夜食も共に食べるそしてそのまま、夜を共に過ごす

そのあまりの甲斐甲斐しい世話に誰もが開いた口がふさがらなかった

また女にだらしのない王だよ・・・

はあ、あの王もすぐにダメになるだろうね・・・

未だに顔を見せない姫様ってどんな人だろねえ・・・

陰口をたたかれても、官吏達から忠告を受けても

「きちんと仕事はした。寵妃の元に行くだけだ・・・」

この言葉の通り、閃はきちんと仕事をす

中途半端な状態で仕事を投げ出すようなことはない

また少しずつではあるが閃の政策は着実に実を結んでいた

そのため、官吏達は強く言えなかった

王にして欲しいことはたくさんあるが、もし後宮に行く道を妨げるようなことがあれば、閃の冷気を真っ向から受けなければならぬその冷気は身も凍るような冷気である

呼吸のしかたをすら忘れるような冷たい視線

全身から噴き出すような冷や汗

ガタガタと体中が震える

王が通り過ぎててもその冷気は体にまとわりつき寝込むことになる者も多い

文官ならまだしも歴戦の武官までこのざまでは誰一人として文句は言えなかった

そんな事があっているとは知らない神楽は起き上がるようになり少しずつ食べたり、動くようになった

もちろん動ける場所は限られてくる

楼閣の一番上の部屋のみであった

1 回外に出ようとドアに手をかけたが鍵がかけられ出ることが出来なかった

少しぞつとした神楽は閃に頼み込んだ

だが、まだ体調が良くない、仕事が忙しいから案内が出来ないからなど色々な言い訳で外に出ることが有耶無耶にされた

外のことを知ることが出来るのは、部屋にある円い窓から見える景色だけだ

だが、これに黙っている神楽ではない

綺麗な衣服を脱ぎ捨て、乱雑ではあったが簡易の男性用の衣服を作り、腰までであった髪を大きめのお団子にまとめ、窓から抜け出した

赤い瓦に足を付け、身を乗り出した

見える風景に神楽は震撼した

楼閣の一番上から見える景色は

何処までも続く赤い瓦

青い空に全てを照らす太陽と雲

人は小さく見え、全ての大きさに息をのむ

ゆつくりと一歩一歩瓦の縁に移動する
縁から下を覗くと鎧を着た者たちが見える

音を立てないように瓦の上を歩き

下を覗き込む

下に兵がいないことを確認すると

瓦の縁に手を下の階の瓦に足を伸ばした

トンッと足が付いたことを確認すると縁から手を放し

下の階に移動する

1階1階降りるたびに周りを確認する

誰にも見られないように細心の注意を払った

地面に足が付くとすぐさま植木などに身を隠した

周りを確認するところは兵がいないのか、静かだ

誰もいないことを確認して近くの建物に小走りで向かった

運がいいのか分からないが近くの建物には誰一人としていない

あまりの静けさに神楽も不審に思ったが

周りを把握したくて全神経を使って周りの気配を感じた

楼閣の見える範囲でだいぶ回ったが楼閣の入り口を守る兵以外全く

と言っていいほど気配がない

ある程度見回ると神楽は楼閣へと戻った

そろそろ閃が部屋に来る時間帯だ

もしこれで部屋にいなかったら今度こそ鎖か何かで繋がれるかもしれない

急ぎ戻るといつもの空間音のない空間が広がる

ふわふわの布団が敷いてある寝台と色彩豊かな柄のテーブル

様々な調度品

色はあるが音がない

いや音がし始めた

ガチャガチャと下の階から鍵を回す音と足音と階段を上る音が聞こえる

神楽が心の中で数え出す

あと10、9、8、7、6、5、4、3、2、1扉の前

ガチャ

最後の扉が開いた

「ただいま！神楽！！」

満面の笑みで王族としてのふさわしい質素ではあるが質はいい着物を着た閃が現れた

閃は村にいたときより日に日に王らしくなってきた

「お帰り閃。」

その閃を変わず神楽は笑顔で迎える

閃は手に持っていた昼食を机に置くと神楽の手を引き、ふかふかのクッションが敷き詰められた長いすに神楽を導く

神楽を椅子に座らせると閃も座りゴロンと横になる

神楽の膝に頭を置き猫のように伸びーっと背を伸ばす

「う~~~~ん！！疲れた！！神楽疲れたよ！！」

疲れを見せない笑顔で疲れたと連呼する閃は神楽を促している

「ふふっ、お疲れ様」

そう言って神楽は閃の頭を撫でる

神楽と閃は身長差があまりにも大きいため

昔はよくしていた頭撫で撫でが神楽は出来なくなっている

それがつまらない閃はこうやって膝枕をねだり、神楽の太ももに置いた頭を撫でて貰う

こうするとどんな疲れさえ一瞬で取れてしまう

閃がどんなに神楽にこれを力説しても、神楽は絶対信用しない

ただどこうでもしないと神楽は閃に触れなくなってしまった

どこか一歩引いた状態で閃を見ていた

村にいた頃は全く態度が違う神楽に傷つきはしたものの閃は自分のせいで起きた村での出来事に強くは言えなかった

だからこうやって無理矢理にでも神楽に触れて欲しいためこうやって膝枕を要求する

「神楽、ありがとう・・・」

頭を撫でられていることに気をよくした閃はうららかな日差しと心地よい空気に睡魔が襲う

「寝てていいわよ・・・少ししたら起こすから・・・」

「でも・・・ご飯を・・・」

「大丈夫・・・待ってるから・・・起きるのを待ってますから・・・」

神楽の手が優しく閃の目を覆った

すると、閃は夢の中へと誘われていった

太ももにある愛しい重みと温もり

ゆっくりと胸元が上下する

村にいた頃でもモテていた閃が日を追うことにこの格好良さを増しているような気がする

小さい頃から閃を好きな鼻眞目関係なく、目に力強さが増し、威厳が増していった

何度神楽が閃に心奪われてきたことか・

惚れている相手だからこそ、何度も恋してきた

その度に自分の身が辛かった

自分は何も持っていない

何も閃にすることが出来ない

こうやって閃が頭を撫でる機会を与えてくれないと

閃は神楽に触れてくれない

村の頃は共に武術、学問を共に切磋琢磨してきて中で、触れ合うことがいつも当たり前だったのに、それがここにきて一切なくなつた

夜を共にするといつても、男女の営みがあるわけでは全くない

ただ夜食を食べ、眠くなつたら閃が神楽を包み込むようにして寝台に横になる

人の温もりがあると落ち着いて眠れる

一度閃が遅くなつて神楽が一人で寝ていた

その時神楽は悪夢に襲われた

村が焼かれる光景が広がり、神楽に縋り付いて助けを求める村人達助けたくても助けることが出来ない光景に悲鳴をあげた

その悲鳴を聞いて閃が駆け込んできた

ビッシヨリと汗を掻き尋常ではない荒い呼吸を繰り返す神楽は泣きながら閃にしがみついた

その日から閃は神楽を一人で眠らせないようにした

「ごめんなさい・・・閃・・・あなたに迷惑ばかりかけて・・・ごめんなさい・・・」

閃の頭を撫でながら神楽はポツリポツリと本音を漏らす
何も出来ない自分を守ってくれる閃に何かしたいけど何もすることが出来ない
だから、こうやって閃がして欲しいことを少しでもしよう
彼の疲れが取れるなら何でもしよう
ただ優しく閃の頭を撫でつける
眠りを妨げないように・・・

「ごめんなさい・・・」

神楽が泣いている
それだけで意識が浮上する
こうやって頭を撫でて貰って少し眠りにつくのは何度かある
その度に自分から触れることが出来ない神楽が触れてくれる
それだけで閃の心は救われた
自分のせいで神楽の家族を1度、いや2度奪っている

あの村の時から神楽に触れることはしなくなった
触る権利など俺には持っていないと思う
だからこうやって神楽から触ってくるようにし向けている
何度考えても俺ほど極悪な人間はいないだろう
神楽をこんな楼閣むすぼに閉じこめ神楽の自由の全てを奪っている
だがそれを文句一つ言わない神楽に俺はつけあがる
神楽を独占できる

これほど甘美な事実はない
俺の帰りを待ち、笑って迎え、こうやって触れてくれる
ずっと夢見てきた神楽との生活
手に入れることが出来ても満足感が足りない

何故俺の前で泣いてくれない

昔は俺の前では泣いてくれたのに、俺が眠っていないとお前は涙を流さない

その涙を拭うことは俺には出来ないのか!!

何度も目を開けて神楽の頬を濡らす涙を拭おうと思ったか

でも、それは出来ない

その涙を流させているのは・・・俺のせいだ・・・

泣かないでくれ・・・お前を守るから・・・お前を・・・絶対守るから・・・

・
お互いの思いを知らず知らず二人はすれ違う

私とあなたの距離

神楽は何度目かの脱走に成功し、城の廊下を柱に隠れながら進む

ここ何日かの楽しみは兵部尚書だ

ここでは多くの兵が武術の稽古に励んでいる

その場に紛れて神楽は武術を学んでいた

体を動かすことは嫌なことを考えなくてすむ

また、人と話す事で音のある世界を取り戻していた

だがここで神楽は思わぬ情報を得る

「オイ、聞いたか！またあの冷酷王が官吏を罷免したらしいぜ！」

「これで今月3人目だ！王座に就いてから20人以上罷免している
！」

「ひええ〜！恐ろしい恐ろしい！！」

休憩中に話している兵達の声が聞こえた

冷酷王？王って閃の事よね？何故冷酷王など？

「それってどういう事？何故王はそんなに罷免しているの？」

話している兵達の後ろから声をかけた

「オツ！お前新人の確か・・・」

「楽らくといます」

神楽はここで練習するため楽とういう偽名を使った

「ああそうだった、楽だったな！そうか新人なら知らないかもな！」

「教えといてやるぜ、新人君！もし王宮で王に会うようなことがあれば気をつけろ！今の王は・・・人を殺すのが好きらしい！！」

「なっ！！！！」

「ああ、多くの官吏が罷免されて、罷免された次の日には家は空っぽで、何処にもいないんだとよ！」

「王に殺されたらしいぜ！」

「そんなことを王がするはずはないのでは！！！」

「オイオイ、これは噂だぜ！それに、楼閣にいるのだって死人だつて話じゃないか！」

「死人？」

「だって誰にも顔を見せないんだろ？相当の不細工女か、死人だろっ？」

「ああ、いやな奴が王になつたぜ」

神楽は愕然とした

閃が外でのことを一切話さないの私のことで誤解を受けているとは知らなかった

そんな・・・また迷惑をかけている・・・私は・・・閃に何も出来ないの？
迷惑をかけることしかできないの？
頭の中でグルグルと自己嫌悪に陥っていく

「ああそういえば今度戦場に行くんだらう？」

「ああそうらしいな。王様自らの戦場だらう？」

「えっ！？」

「なんだ知らなかったのか？新人？今度戦があるんだよ。」

「隣国の王太子様自ら戦場に出てるらしいから、王自らが返り討ちにするらしいぜ？」

「だけだよ、知ってるか？」

「えっ、何だよ？」

「この間、ちょっと警護中だったんだけどよ・・・今度、王様の暗殺計画があるらしいぜ」

「なっ！お前それって！」

「この間の警護中に誰か分かんなかったがそう言う話がされてた」

神楽はそれからどうやって楼閣に戻ってきたか分からない
気がついたときは日が沈み、間もなくで閃が来る時間だ
閃が与えた服に袖を通し、ウエストを帯で締める

だが手に力が入らない
締めようとした帯が弱々しく床に落ちる

早く着替えなければ閃が部屋に来てしまうと思うのに、手がガタガ
タと震える

膝から崩れ落ちて着物の上に座り込んでしまう

頬を一筋の涙が伝う

何故何も出来ないの・・・その言葉だけが神楽の頭を駆けめぐる

「神楽?・・・神楽!!どうした?何があつた?こんな所に座り込
んで!!」

いつの間にかやってきた閃は座り込んで泣いている神楽に慌てて駆
け寄つた

傍に駆け寄つて神楽を見ると大きく開いた黒い眼から溢れ出す涙
乱れた衣服に一つの考えが浮かんだ

「ま・・・まさか・・・」

神楽の両肩に手を置き

「だつ、誰かに襲われたのか!!!」

そんなことがあるはずはない

そう思うが、俺がこの部屋にいない時間はあまりにも大きすぎる

それに、寵妃神楽は宮中一の噂的である

死人であつたり、最高の美姫であるという噂がいつも耳に入る

その噂を信じて誰かが神楽を襲つたのではないか!!

神楽の肩を掴む手に力が入る

「ついた」

小さく声を漏らす

その声に反応するように手の力が弱まる

「・・・違うの閃・・・ちょっと・・・村のこと思い出して・・・涙が出ただけ・・・着物は着替えている途中だったの・・・」

「あっ・・・そうだったのか・・・」

フウと溜息をついて閃はよくよく神楽を見た

吊帯長裙だけを着了た神楽は肩を丸見え裾がめくれ、太もも辺りまで見える

ゴクリと音がする

潤んだ瞳、ずっと惚れ続けた少女が女の色気を出している
知らず知らずに閃の手が神楽の頬に伸びた

「・・・閃？」

何も言わない閃を訝しげに思い声をかけた
ビクン！！！！

手が途中で止まる

神楽に触れてしまっ、自分から触れることは禁忌タブーとしているため自ら触るわけにはいけない

途中で止めた手を握りしめた

「夕飯にしよう・・・その前にきちんと着替えた方がいい。外にいるから終わったら声をかけてくれ」

すくっと立ち上がり扉から出て行ってしまった閃

「ダメなのね・・・閃・・・私では閃の役には立てない・・・」

その後二人は気まずい夕食をした
お互いに目を合わせることが出来ない
ただガチャガチャと皿の鳴る音だけが響く

「神楽、・・・話がある」

フウと息を吐いて閃が意を決したように話し出した
真剣みを帯びた声に神楽も真っ正面から閃を見た

「・・・言いづらいのだが・・・今度戦場に行ってくる」

ガッシャン

持っていた箸が落ち皿にぶつかる

席を立ち神楽の椅子の横に膝をついて神楽を少し仰ぎ見る形で見つめる

「・・・君をここにおいていくことは本意ではないが・・・君を戦場に連れて行くわけには「行く・・・」

閃の言葉を遮るように神楽が言葉を発する

「閃私も行く・・・傍にいと約束しました・・・一緒にいきます・・・」

「・・・神楽・・・ダメだ・・・戦場では君をずっと守ることは出来ない・・・」

「守る必要はない！！私は守らなくていい！！あなたを守るために
「ダメだということが分からないのか！！！」

ダンとテーブルを叩いた閃は勢いよく立ち上がり
神楽を見下した

その瞳は怒り、悲しみ、焦り様々な感情が入り交じった眼だった
見たことのない瞳に神楽は何も言えなくなった

「君は・・・私の傍にいればいいんだ・・・何処にも行かないでくれ
・寵妃として俺の傍にいればいい・・・」

静かになった神楽を閃は抱きしめる
抱きしめてくれる閃の腕が冷たく感じる
今まで近くにいた存在が遠くに感じる

なぜ・・・なぜなの・・・閃・・・あなたが・・・遠い・・・

その二日後閃は1万の軍を率いて城を出た
神楽は城の最奥の後宮の楼閣からそれを眺めていた

楼閣の一番上から見える世界は人がまるで米粒のように小さい
何重もの赤い堀の向こうに黒々と動く軍の姿
一人を確認することも難しい

その中に閃がいる
自分から離れていってしまった閃がいる
変わってしまった閃がいる
窓の欄干を掴み、外を見つめる

欄干の木がギシギシと音を立てる
神楽の手が強く握りしめ手の骨が浮き彫りになる

何故何も出来ない・・・何のために・・・何のためにここに私はいるの！！！！ただ守られる為だけに私はいるの・・・違う！！絶対に違う！！守ると決めたのよ！！絶対に守ると！！！！
外を見ていた目を部屋へと移す

部屋の一角には村から持ってきた道具がある

その中には閃の母の形見である

劇の女優として活躍していたときの小道具も混ざっていた

その中に薄気味の悪い真っ白な仮面がある

顔半分を覆う真っ白な仮面

白以外の色がなく、目の部分だけがくり抜かれ

眉すらも描いてない表情のない仮面

最初見たときは怖くて触れもしなかったが

今なら触れる

閃を守るため全ての感情を捨て去ろう

感情を無にしたただ一つ閃を守ることだけに命をかけよう

腰まであった髪を短刀で肩まで切り捨て、前髪をオールバックにし

て後頭部に集めてお団子にして糸で止める

仮面をつけ、仮面の米神あたりから伸びる紫の紐をお団子の下辺り

で結ぶ

吊帯長裙を脱ぎ捨て、脱走の時に使う服装に着替える

着替えが終わり、準備は出来た

そして、部屋をもう一度見渡した

「愛してるから・・・守ってみせる」

決意を新たに窓から外に飛び出した

戦う姿、まさに竜の如し(前書き)

拙いですが、戦闘シーンがあります。血は流れませんが、惨いシーンがたくさんあります。自身の責任でお読みください。

戦う姿、まさに竜の如し

戦場は都からすぐの場所であった

？国に一番近い隣国、紗荀国しじゆこくである

一番の隣国と言うこともあり長年にわたり？国からの支配を受けてきた

？国が傾いたことを知った紗荀国は積年の恨みのごとく？国に攻め入った

その怒濤の勢いはどの国よりも激しく、最初に？国から勝利を得たのもこの国である

その紗荀国の第一王太子がこの度王座に就くための国民へのアピールのため？国との戦に出てきた

今まで連勝のため紗荀国も余裕を持ったのだろう

だが、これ以上舐められるわけにも行かない？国としては朗報だったここで第一王太子を捕縛できたならば、紗荀国との和睦が出来るかもしれない

そのためにもこの戦には絶対に勝たなければいけない
両国の思いが様々に絡み合っていた

20メートル位ある大きな崖があり、その崖を伝うように流れ落ちる滝が作り出す川の対岸に両国は陣取り、お互いの動きを見張っていた

連日降り続いた雨によって川は濁りはしているものの、あまり増水してはいなかった

今も降り続く雨によってこの戦は長続きしそうだった

だが、それは両国にとっては不利であった

紗荀国は連勝によって勢いが付きすぎてなかなか戦が止められない状態であった

そろそろ止めるべきだという声を無視して国が疲弊しているにもかかわらず戦いをしていた

国民はからは不満の声が広がっていたため王太子の勝利をもって戦を少し中止しようと考えていた

？国にとっては度重なる連敗によって兵は疲弊しきっており、士気は低すぎる

王が前線まで着たというのに見つめる目は恨みが込められている

そして王自らが持つ神楽という悩みがあった

戦に行く前の彼女の言動があまりにもおかしかった

すぐさまにでも終わらせて帰りたいがこの状況下では無理だ

何度目かの作戦会議が終わり、本部が置かれているテントの幕を脱ける

空は濁った色を浮かべ、雨と雷を地へと叩き付ける

太陽が拝めないので時間の感覚が鈍るが夜の時間帯であろう

村にいる頃と比べて質の良い着物を多く着込んでいるが肌寒く感じるからそうであろう

よどんだ空気は？国の士気を象徴しているかのようだ

ピカツと雷が空を一瞬照らす

その後大きな音が地面を揺らす

その恐怖が兵士の士気をさらに低くさせている

早く終わらせなければ・・・焦りが閃の心を支配する

空を見つめこの同じ空の下にいる神楽のことを思う

だが、その思いは紗荀国の奇襲によって打ち消された

雨によりいつか川も増水する

増水してしまえばまた戦は長引いてしまう

これ以上長引かせるわけにはいかない紗萄国は今の？国の士気の低下ならすぐにも勝敗は付くと考え夜襲をかけてきた

いきなりの夜襲に？国の兵達はとうすることも出来ず

またこれ幸いと近くにある荷物を持って逃げ出す者が多い

どんなに隊長達が号令をかけようと一気に混乱した兵達はどんどんと後退していく

紗萄国の兵達は川幅20メートル、深さ腰ほどの川を武器を抱えて対岸目指して向かってくる

「陛下！！ここは危険にございます！いったん引きましょう！」

8将軍のうちの最長の将軍である朱の軍、紅凱こうがい聯れん将軍が馬を連れて閃の元にやってくる

「この雨で兵達は疲れ切っています。これ以上ここにいれば無駄に兵を減らすことになります。どうか、お引きください。」

閃は手のひらに爪が食い込むほど握りしめた

初戦でいい結果が残せなければ国民は王家にさらなる反感を持つてあろう

そうなれば、国は一気に傾いていくだろう

何としても初戦は勝ちたかった

だがこれ以上、犠牲を増やすわけにはいかない

「……全軍に撤退を命じよ」

その言葉を発し閃も馬に跨る

「全軍一時撤退！！！」

將軍の声に兵の後退速度は速まる
紗荀国の数名が対岸に渡り着いたときだった

ダーーン・・・ダーーン・・・
空気を振動させる音が響いた

その直後だった大きな雷が空を割った

「お！オイあれを見る！！！！！」

後退している？国の兵が滝が流れる崖を見上げて叫んだ

？国の兵達の目は一気に引きつけられた

崖の頂上で一頭の白い馬が前足を上げ嘶いている

後ろには雷が光り、馬の上に乗った人を不気味に映していた

馬の振り上げた足が地面に振り落とされた瞬間

崖が動き出した

いや、雨によつて軟らかくなった土が馬が与える衝撃に耐えきれなくなり、崩れだした

一度崩れだした崖は止まることを知らず、すぐ真下にいる河を渡るうとして腰まで水につかった身動きの出来ない紗荀国軍の兵達に襲いかかった

一瞬でのみ込まれる敵国の兵達

叫び声、木々の崩れる音

地面が全てを押し流す音

川から離れていたのです？国の兵達はのみ込まれずにすんだが、あまりの地響きに兵達は腰を抜き、馬に乗っていた者は馬の興奮を抑えられなかった者は振り落とされていた

「な、なんだこれは・・・」

閃は素直にそう呟いた

目の前の出来事が信じられなかった

数刻まで頭を悩ませていた兵達が一斉に土に飲まれていった

何が起きたのか誰も分からない

誰も動くことが出来ない

崖が崩れて数分も経たないうちに

地面がやっと落ち着いた

ダツダツダツダツダツダツダ・・・

馬の駆ける音がする

崩れた崖が急ではあるが斜面となり、崖の頂上にいた馬がその斜面を駆けている

そしてそのまま紗葡萄の呆然とした本陣まで一気に駆けていく

本陣まで土は流れ込みそこにたどり着くのはたやすかった

混乱した本陣は守る者もおらず

逃げまどうばかりであった

その中に一人上等なマントを纏い、傷一つ付いていない鎧を着けた

青年が腰を抜かして座り込んでいる

誰もその者を守ろうとはしていない

自分自身を守ろうと必死で、侵入者が入ってきているのにも気づか

ない

一気にその青年の元に馬を駆けさせ

「御身もらい受ける」

青年の腕を掴み引き上げて本陣から立ち去った

気づいた者もいたが気づいたときには？国側へと走り去っていた

川はすでになくなり、土が流れている

その上を一気に白い馬が駆けていく

その馬の背には二人の影がある

？国は近づいてくる馬に怯える

「陛下にお目通りを！！敵の大將をお連れした！！」

まるで雷のように通る声だ

？国の兵に全て伝わるような声だった

見ているものは怯えた

雷の雷光によって映し出される姿は不気味だ

真っ白な仮面が怪しく闇に浮かび、身なりはボロボロの衣服である

腰には剣を差しており、背には2メートルほどの棒が右肩から見えている

馬の背から降りたた不気味な存在は青年を右腕を捻り上げ背で押さええている

「歩きなさい・・・抵抗しなければ危害は加えません・・・」

「ひいひい」

青年は180cmはあるがそれより頭一つ分ほど小さい者に怯えて

いる

多くの？国の兵が呆然としている

仮面をつけた者が紗萄国の青年を前々へと押し出す

二人を導くように兵達が避ける

雨音と雷鳴、二人の歩く音と兵の避ける音が静寂の中響く

黒の軍馬に跨った閃王の前にたどり着くと

仮面を被った者は青年を引っ張るように雨にぬかるんだ土の上に座らせる

そして自分も片膝を付いて頭を下げた

「お初にお目にかかります。私名も無き者にございますが、陛下の軍の一兵として志願したく参上いたしました。」

閃は身も凍るような思いだった

この声は聞き間違うはずがない

もつとも愛しい人の声だ・・・神楽だ・・・

馬の綱を持つ手がギリリと音を立てる

名を呼びたいが、呼ぶわけにはいかない

この戦場に女がいるということがバレるならば彼女の身に何が起きるか分からない

守ると決めた者がこんな危険な場所にいる

なんとか冷静さを保ちながら

「・・・名はないというが、一体何者だ・・・」

震えてはいないが神楽は閃の声の違いを気づいていた

ごめんなさい・・・閃・・・私はこんな事でしかあなたを守れない・・・

「・・・産まれたときより、名など持ちません。生まれも育ちも山の中。一人で生きて参りました。この世に命をかけてもよい方を捜していました。我が御前にいる方こそ我が命をとってでも守るべき方だと思い、微力ながら戦いに参加させていただきました。」

神楽の嘘が閃を拒絶しているかのように聞こえてくる

「微力どころか、そなたのおかげでこの戦いは終わった。礼を言う。されど、そなたのような身元に分からぬものを軍には置くことは出来ない自分のあるべき場所へと帰れ。」

閃は何とかして神楽をこの場所から遠ざけたくてわざと冷たい態度をとる

凍るようなまなざしで神楽を見つめる

いつもの閃王を知っている臣下達は背筋が凍る思いだったがそんな冷たい視線を全く気にしないかのように

「はっ。心得ました。では次の戦場でお会いしましょう」

そう言って、連れてきた青年をそのままに置き去りにし、馬に跨った

「それでは、御免」

雷鳴が鳴り響く中、閃に背を向けて神楽は馬でかけた

呼び止めることもなく、その姿が小さくなるまで閃はその姿を見続けた

敵か味方が分からぬ存在

次の日雨が上がり、数日ぶりの太陽が空高く昇っている

そんな明るい中、？国の天幕の中は黒雲が立ちこめていた

仮面をつけていた者が連れてきた青年はやはり紗萄国第一王太子の
紗景泉しゃけいせんその人であった

？国としては棚からぼた餅のようなものだ

戦わずして敵国の王太子を手に入れ、紗萄国の兵は3分の1が土砂
で生き埋めになり、3分の1が逃げ出し、残りの3分の1が降伏した
それに比べ、？国の被害は皆無だった

喜ばしいことなのだが、あの仮面の人物は閃王以外誰知り得てはい
ない

あれが誰かも分からないのに、この勝利を受け入れていいものか臣
下達の中で話が分かれていた

「申し上げます。確かにあの仮面の者によつて我々は勝利を得まし
たが、誰とも分からぬものが我が軍の味方であったとなれば、また
いらぬ敵を作ることになります。」

「だが！！この国は疲弊しきつている！！少しでもいい話題があれ
ば国民は喜ぶ！！この勝利は我々？国の勝利だ！！」

「何を言うか！！あんな化け物のような者が味方など！！ありえは
しない！！」

「では、この王子をどうなさいます？今残っている兵の元に戻して
戦いを挑みますか？千人と万人の戦いなど目に見えて分かっている

でしょう!！」

閃は目の前で繰り広げられている話に嫌気がさしてきた
がやがやと騒ぎ立てる臣下達にイライラも募る

カチッ

刀を少し出してなおした瞬間に音がした
その音に誰もが反応した

その瞬間からその場が凍り付いた
誰もが王に視線を向けるとその雰囲気にも飲まれた

心の臓を掴まれた心地である
呼吸すら出来ないほど凍り付いた世界だ

「……うるさい……」

ポツリと発した言葉と同時に閃は目をつぶった

王の眼光が閉ざされると共に官吏達は呼吸を取り戻したが、
数分もせずにもた再度その黒き眼光が開いた
ゴクリと官吏達は生唾を飲む

「先の戦いは我が軍の勝利とする。王太子については紗萄国に対し
て使者を送れ。降伏、もしくは和睦を受け入れるなら王太子を帰す
と伝えておけ……」

その威圧感に誰もが道を開き口答えは許されなかった

「も、申し上げます!!」

その緊迫感は兵の一言で破られた

「な、何事だ!!軍議中だぞ!!」

その空気を払うように將軍達は声をあげた

「そ、それが・・・あの・・・」

「何をもちもたしている!!早く言わぬか!!」

「は、はい!昨日の仮面を付けた者が現れました!!」

ガタン

誰かが口を開く前に閃は立ち上がって天幕の入り口を目指した
閃が一步一步歩くたびに黒のマントが空を舞う

「あ!王よ!お待ちください!!」

声をかけた臣下もいたが閃の目は外しか見えていなかった
テントの幕を払いのけるように動かして閃は外へと出て行った

「全く嫌な奴が王になったものだ・・・」

「ああ・・・全くだ・・・」

中に残された臣下達は閃王に対する愚痴をこぼした

多くの臣下がその愚痴を聞きながら誰も注意する者はいない
未だ王に対する不信心は強く、王を傍観希望する者が多い

王に付くべきか、それともまた別の王に付くか
まだ決めかけている

あの豪雨が嘘かのように今日は晴天である
雲一つない空は何処までも青い空であった

雨を含んだ土はいつの間にか太陽によって乾き始めていた

「王！こゝ、こち、こちらです」

閃を先導する兵は震えていた

そんなことは咎めることはせず閃は捜していた

神楽が傍にいる・・・こんな所にいて欲しくない・・・でも・・・逢
いたい・・・ほんの少し逢えないだけでこんなに辛いとは・・・重症
だな・・・

兵が案内したのは陣の端の場所だった
そこには多くの兵も集まってみている

「あちらです」

兵が指さした方向は陣の端から100メートルほど離れた紗萄国の
本陣があった場所だった

昨日までは川がありもつと距離があったと思えたが、今は土石流に

のみ込まれた土が覆っているので近くに思える

「先ほどからあの場所に立たれて何かなさっています・・・」

確かに遠く離れた場所にいる神楽は本陣のあった場所で動き回っている

何をしているかまでは分からないが、何かを地面にさしている

数分もせずに動きを止めた神楽は膝立ちのようになり、また数分動かなかった

そして立ち上がると繋いでいた馬へと向かい、一度こちらの本陣を見つめてきた

・・・神楽・・・

閃は確かに神楽と目があったと思う

だが、その視線はすぐさま外され神楽は馬に跨って走り去ってしまった

「・・・お、おいアレって・・・」

神楽をおっていた視線が兵の一声で先ほどまで神楽のいた場所に向かう

「・・・っう・・・」

閃は息が詰まる思いだった

紗荀国の本陣だった場所に多くの墓標がたてられていた
そしてその前には多くの花が飾られていた

「アレって……どういう事だ……」

「何考えているんだ……」

兵から不安げな声上がる

もしかしたら味方かもしれないと思っていたのに敵国に墓を作り花を添えるなど？ 国への反逆行為である

「……引き続きあの仮面の者が現れたら報告をせよ……」

閃は自分への離反を意味するかもしれない神楽の行為から目を背けマントを翻して歩き出した

戦場を駆ける竜？（前書き）

流血シーンや残虐シーンがあります。自己責任でお読みください。動物に対して暴力行為がありますが、決して実際の動物にその様な行為をしないようお願いします。

戦場を駆ける竜？

紗萄国との戦いから3日後紗萄国は和睦を？国に求めた

？国はこれを認め、両国は休戦をすることとなった

だが、？国は休んではいられない

紗萄国との休戦決まったその次の日に、采駕^{さいがこく}国の侵略が報告された
その場所は二日もあれば着ける距離であった

この勢いのまま？駕国にも勝利を得たい？国はその場所に向かった

？国はそこで信じられない光景を目の当たりにした

ここには大きな町があった

巨大な円の堤防の中に町はある

その町に入る入り口は縦横に大きな道の四力所と小さい道の入り口
が四力所で計八力所だった

だがその入り口は全て封鎖され、中から叫び声上がる

その声と同時に獣の声も上がる

そして町から上がる黒煙からは焼ける匂いが広がる

？国は恐怖におののいた

采駕国は円状の町の入り口を封鎖し、中に虎を何匹も放り込み
そして火を放った

火と獣に逃げまどう人々は堤防を乗り越えようとしたが堤防を囲む
采駕軍の矢によって命を落としていた

これほど残虐行為が戦いで行われていたことはない
兵達はあまりの光景に嘔吐する者や神に祈り出す者まで出ていた

「何と・・・残虐な・・・」

「采駕国は何を考えているんだ・・・」

丘の上から見える光景は残虐だった

だがどうすることも出来ない

軍の規模はほぼ同等であろう

だが？国は連戦を強いられている、軍の疲弊は強い

？国が攻撃をするとなると一カ所からの攻撃となるだろう

そうなれば、必ずその周りを囲む采駕国から両脇からの攻撃を受ける事になる

「陛下、このままでは町一つ確実に滅びます。ですがこの町は貿易にとつては有数の都市です。このような場所を失えば？国にとつては大打撃となるでしょう。」

將軍達や臣下達の進言に閃自身も進撃する決意を固める

「お！おいアレ見てみるよ！！」

閃が進撃の合図を出すより前に兵から声が上がった

白き馬に跨った者がただ一直線に町へと駆ける

采駕国も応戦として矢を放つ

大量の矢が馬とその騎手を狙う

だが、騎手はおもいつきり馬の胴を蹴り上げ、ジャンプを馬に促す馬は騎手の思惑道理大きくジャンプする
その馬の背から騎手はさらにジャンプする
采駕国から放たれた矢は馬の全身に刺さる
馬は悲鳴をあげるが、騎手はすでに堤防の上に着地し、中へと飛び込む

堤防は5メートルほどの高さがある
中に入れば外から攻撃することは出来ない

閃達はその一連の動きをただ呆然と見ているしかなかった
その者の顔には白い仮面が付けられていた

神楽は中の状況を見て愕然とした
町の3分の1が火災そ損害を受けている
火の中から逃げ出る者もいれば、虎から逃げるために火の中に飛び込む者、地獄絵図が広がっていた

このままではいけない・・・何とかしなければ！！！！

「民よ！！風上の北門へ向かえ！！！！北門だ！！！！走れ！！！！」

神楽は大声で叫んだ

それに気づいた者は仮面を付けた者に怯えはした者の助けにくれるなら藁でも掴むように北門へと走り出した

「北門へ！！動ける者は北門へ向かえ！！！！」

一人一人走り出すと続くように多くの者が北門へと走り出した

「きゃーーーーー!!!!」

走りながら指示を出していた神楽は前方から悲鳴を聞いた
すぐさま手に持つ身の丈以上の棒を持つ手に力が入る

悲鳴の聞こえた場所にたどり着くと

体長2メートル以上ある虎が子供とその母親に襲いかかろうとして
いた

親子は壁に追い込まれ怖さで座り込んでいる

虎は舌なめずりをして襲いかかろうとしていたが、横面に棒が叩き
付けられ、その勢いは止まる

ぶつけられた棒に腹を立てた虎はぶつけた者を睨みつける

棒を前方に構えた神楽は虎の気迫にも負けじと虎をにらみ返す

「・・・その親子、動けるか？」

いきなりの問いかけに親子は完全に腰が抜けていて動けそうにない
火の手は多くの場所で上がっている

ここであまり時間を使わずにはいけない

握りしめる棒に力が入る

その動きを読み取った虎が先制攻撃を仕掛ける

一気に駆け寄り、右足の鋭い爪と牙が神楽目掛け襲いかかる

カッ!!

神楽は両目を見開いて棒を虎の空いている左顔に叩き付けた
バランスを崩した虎は横出しのように地面に倒れるが、再び足を付
いて立ち上がるうとした

だが、2、3歩歩くとボタンと倒れた

「ふう……」

口から泡を吹いている虎を動かないことを確認して神楽は息を吐いた

虎は神楽の攻撃で軽い脳震盪を起こし、歩行困難で倒れた
殺したわけではないので、時間が経てば動き出す

近場にあつた布きれを裂いて虎の前足と後ろ足を縛り口にも開かないようにグルグルに巻き付けた

「……動けますか？動けるなら北門に向かいなさい。壁伝いに歩いて進みなさい。虎が襲ってきたら、松明を向けて襲われないようにしなさい」

簡単にはあるがそこら辺に落ちている棒の先端に布を巻き付け油をつけ、火を付けた

赤々と燃える炎を震える母親に渡す

手渡すときに母親が行かないでというように神楽の手を握る

その力は強く神楽の手に母親の爪が突き刺さる

「しっかりしなさい！！母親でしょう！！この子供を守れるのはあなたしかいないの！！他にも助けを求めている人はいるの！！あなただけを守ることは出来ないの！！歩みなさい！！」

母親の目から止めどなく溢れていた涙は止まり、意志がともった

「行けますね？」

最後の神楽の問いに母親は大きく頷いた
その姿を見終えると神楽はまた駆けだした

「北門へ！！北門へ！！風上の北門へ向かえ！！」

神楽の声は大勢の耳に届いた
流されるように人々が北門へと向かう

その様子を見ながら、神楽は町の中央にある広場で振り返った
その広場から閃の率いる軍がいる丘が見える
ちようど太陽側の南門側ため長く見ることは出来ないがそこにいる
のは分かる

・・閃・・あなたなら分かるはず・・私があるにどうして欲しい
か・・みんなが助かるために・・動くべき時はもう間もなく！！
持つ棒に力こめ、神楽は駆けだした

戦場を駆ける竜？（後書き）

長かったので2部に分けます。

敵の国命変更しました。

戦場を駆ける竜？

閃達率いる軍は丘の上から状況を判断していた

丘見える光景は人の動きを上から見る事が出来る

人々は？国軍がいる南門には向かわずその逆である北門へと向かっている

「何をしておるのだ！！あの化け物は！！」

「あれでは人を救えぬではないか！！」

「やはり奴は敵なのでは？」

將軍達や官吏達から声上がる

閃はその光景が信じられなかった

人々の動きは確かに驚きはした

しかしそれは町の人の動きではない

町の塀を囲む采鷲国軍の兵の動きであった

塀の外の采鷲国の兵士達は中の様子を覗うことは出来ない

中から聞こえる声で判断しなくてはいけない

中から聞こえる声は

「北門へ！！風上の北門へ向かえ！！」

大声で叫ぶ神楽の声だった

倒すべき敵の？国の民が一カ所に集まる

これは好機と囲んでいた兵達が北門へと向かっている

他の門は最小限に兵を残し多くの兵士達が北門へと向かった

「攻撃を仕掛ける。向かうは北門以外の全ての門だ！！そして北門で左右から攻撃！南門からのものは内部から攻撃！！」

閃の声に將軍達はこれが好機であることに初めて気づいた
すぐさま馬に跨り、武器を持ち丘から駆けだした

北門に付いた神楽は丘にいる軍が動き出したことに気づいた
ホツとするのもつかの間、北門に集まっている大勢の民に叫んだ

「まもなくで？国軍がきます。みなさんを私一人では救えません。
みなさんの力を貸してください。」

北門へ案内した声の主を見る民の目は不信、怯え、恐怖に染まっている

「みなさんを守りたい！！だが、私だけではこの人数を守りきれない！！今こそ武器を持つときだ！！助かりたいなら、どうか聞いてくれ！！」

お互いに顔を見合わせ、決意し始める

「な、何をすればいい？」

「俺たちに何が出来る？」

生きようとする者達の決意に神楽は深く頷き

「いいですか！これからの指示に従ってください！！」

神楽の指示によって動き出した者達

・・・どうか・・・うまくいきますように・・・

「將軍！？国の民は北門に集まっているもよう。討つなら今が絶好のチャンスかと！！」

采鷲国はこの戦いの絶対的勝利を確信していた

ここに配備されている軍は紗萄国の戦いのためここにいないことを知っていた

それもこの町の民は一カ所に集まっているようだ

わざわざ敵に知らせながら動くなど、愚の骨頂である

最後のとどめを刺そうと多くの采鷲国の軍を北門へと向かわせる

多くの兵士達が北門に集まり

門を開けようと必死になる

大きな大木の丸太を力あわせて壁に打ち付ける

ドーン、ドーンと打ち付けるたび扉越しに怯える声が聞こえる

ニヤニヤとする笑い声がとまらない

中には女もいるだろう

手に入れた町の民は奴隷とすることが出来る

結婚していようが、何だろうが、女は戦争にきている男達の慰み者になるのが戦いの常だ

久々の女に采鷲国の士気は高まる

いっそう大きな音が鳴り響いた瞬間扉が音を立てて崩れた

扉が待ち内部に倒れたて見えた光景は

この町を二分する大きな真つ直ぐな道が見えた

そして北門へに向かつて駆けてくる自分たちが放り込んだ数体の虎

「な！！し閉めギャー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

先頭に立っていた者達は後ろから押される力に戻ることが出来ず虎の牙と刃に襲われる

次々に襲いかかる虎に兵達は為す術なく攻撃される

「退け！退くんだ！！虎がいるぞ！！」

何処からともなく声が上がった

それに反応して一斉に宛もなく兵達が逃げ出し始めた

混乱した兵達は仲間を押しつけ逃げようとする

誰もが逃げることで必死だった

ダダダダダダダダッ

大きな地鳴りがし始める

震える大地に足が取られる

「何だ何だ何だ！！！」

采薦国の兵達の恐怖がピークに達する

四方八方に兵達が逃げまどう

指揮を無くした兵達は誰の意見も聞かなくなる

最初に聞いた虎がいるという声が彼らを動かした

逃げまどつ彼らを出迎えたのは両脇から現れた？国の兵達であった

攻撃する間もなく采鷲は降伏することとなった

人を引きつける者

数刻後は采鷲国の完全降伏となった

？国側は勝利に沸いた

軍に数名の犠牲者のみで采鷲国との戦いに勝利
次から次に沸く勝利に陣中で祝賀会を開いた

「にしてもどうやって虎があんな場所に？」

「どうやって采鷲国はあんなに混乱したんだ？」

將軍達は町の有力者達を集めて酒を交わしていた
酔いが回り無礼講のようになり將軍達はふと思っただ疑問を口にした

「ははははっ。それは、あの仮面の方のおかげでございます。」

「はい。あの方のおかげで助かりました。」

「あの方は？国の兵の方ですか？」

町の者達は拝むような仕草で笑顔で話した

その答えに將軍達は顔を見合わせ、何とも表現しづらい顔をした

ガタン

一番上座に座っていた王が立ち上がった

その場にいた者達はすぐさま上座を向いて平伏した
王はカツカツと足音を立てて町の有力者に近づく

「その仮面のものは今どこにいる？」

いきなりこの国のトップに話しかけられ町の者は自分に話しかけられているとは全く思わず、ブルブルと震えていた

「聞こえておるのか・・・仮面の者は何処におるか知らぬのか？」

「は、は、は、え、ええっと・・・」

閃の圧倒的な覇気にうまくしゃべることが出来ない

一向にどもる有力者達に溜息をはき

「もうよい・・・自分で捜す・・・後は勝手にやっておれ・・・」

王はそれだけ言い残すとマントを翻して外へと出て行った

外に出ると所々に松明が夜を明るく照らし、月と星が空を支配していた

ふと目を向けると、一カ所に人だかりが出来ている

・・・あれは・・・治療場か？何故あのような場所が？・・・

閃の足が進んだ

そこに引きつけられるように閃の足が一歩一歩前が出る

「痛い！痛い！痛い！」

「痛いと感じられることは生きてることだ！良かったな！生きてるぞ！・・・」

「あはははは！確かにそうだ！！」

治療現場といえは戦いの最後の戦場といつてもいい
このような質素な場所で満足な治療が受けられるはずもなく、亡く
なる者が多かった

ここに運ばれると言うことはもう自分は助からない、生きて故郷に
は戻れない、その様な思いがこの場所は暗く、陰気な場所で笑い声
があがる場所ではない

この声は！！

閃はすぐさま治療現場に足を踏み入れた

治療にきていた者達は明らかに身につける者が違う存在に道を空けた
一歩一歩歩く王の纏う雰囲気のみ込まれた

「痛い言ってるだろ！」

「死ねば痛いとも感じない！生きてるからいいだろう！少しぐらい
我慢しろ！」

この言い争うは聞いたことがある

村にいた頃神楽が薬師として治療する患者との言い争いに似ている

中を見ると仮面の者はそこにいた

全身を血に染め、言い争いながら治療に励む姿

その治療室にいるのは兵士ばかりではない

町の子供達や女性達や老人達

「よし！これでいいよ！あまり無理に動かそうとするな！2 / 3日

はおとなしくしている。あとはこの苦い薬を飲んでおけばいいだろう。」

「苦いのかよ・・・」

「ガキじゃないんだ。少し苦いくらい我慢して飲め！」

またドツと笑いが出る

賑やかな雰囲気仮面の者から作り出されている

「あつ！陛下！！！」

閃に気づいた兵士の一人が声をあげ、慌てて礼をとった

それに続けとその場にいた者達は礼をとった

ただ一人仮面を被った神楽だけは立ったまま動こうとせず、閃を真っ直ぐに見つめてきた

「・・・何をしている？」

「治療中です。何かご用ですか？」

閃の瞳を真っ直ぐに受け止めた神楽は物怖じすることなく答えた

「・・・何故ここにいる・・・去るように命じたはずだが・・・」

抑揚のない声は閃王の威圧感を与える

ガタガタと震え出す兵士や町の者まで現れる

「質問があるのなら後で答えます。今は治療中です。邪魔ですので出て行ってください。それとも何ですか？手伝ってくれるんですか？その陰気な雰囲気で！！！」

ぎよつと多くの者が神楽を見つめた

この国の最高権力者にこのような無礼を働いてただで済むはずがないこの仮面の者がとつた行為は反逆罪で今すぐ斬られてもしかたがないことだ

誰も何も言わない時間が過ぎた

ただ閃王は仮面を付けた者をただひたすらに見つめ

「・・・ついてこい、話がある・・・」

「今は治療中だと申し上げたはずですけど。」

「王の命だとしてもか？」

「今すぐその言葉を取り消しなさい！！！」

いきなり仮面の者が勢いよく声を荒げた

「ふざけたことを抜かすな！！民あつての国で王であろう！その民を治療中だと言っている！あんたの民だ！その民の命を蔑ろにするないがしな！！！」

誰もが目が点になった

この者が言っているのは確かに正論のはずだが、誰に向かって言っている

確実にこの国のトップに向かってこの怪しき格好の者が無礼を働いている

誰もがこの仮面の人物は死に急いでいるのではと思った

「失言だった・・・」

だがその思いと裏腹に王がいきなり謝った
誰もが目をこれ以上ないほど大きく開けた

「ご無礼をお許してください。治療が終わりしだい覗きます。今はあなたの民を全力で救います。」

この時初めて仮面の人物は頭を下げた

閃は神楽の医術のすごさを知っていたからこそ

「頼んだぞ。」

「はい」

その返事を聞き終わるとマントを翻して自分の天幕へと足を向けた

王が去った治療室では

呼吸を取り戻した者達が少しずつ現状を把握しようとして動き出した

「あんだスゲーなあ〜！あの王様に対してスゲー物言い！」

「人であるなら正しいことが分かるだろう。あの方は王だ。私が認

めた王だ。アレだけ言ってもきちんと分かってくたさる。信じているから。」

「へえ、なんか、昔から知り合いみたいな言い方だな。」

「知り合いではない。ただ、この国を立て直してくれるのはあの方だと思っただけだから、信じているんだ。」

「あんたが言うと、なんか信じたくくなるなあ。」

「信じてやって欲しい。この国の民なら、この国の王を。さあ！みんな、手を動かして！早く行かないと私の首が跳んでしまう。」

「そりゃ大変だ！何か手伝えることはないかい？怪我はしているが、動けるから手伝うぜ！」

「俺も俺も！！！」

仮面の者は次々に指示を出してみんなを動かした

兵だけではない、町の者達が仮面の人物の指示に従っていた

最高の医師（前書き）

かなり残酷なシーンが入ります。亡くなるシーンもあります。読まない次が分かりづらくなると思います。自己責任でお願いします。

最高の医師

東の空から日が昇り始めた頃

閃は天幕の中でただひたすらに待ち人を待っていた

月が昇り始めた頃に来ると言っていたはずなのに、太陽が昇った

虎の毛皮に覆われたフワフワの椅子に座り上体を前に倒し剣で支えその剣に両手を重ね、入り口の幕が開くのを睨むように見ているが一向に誰かが入ってくる気配はない

握りしめた剣がギリリと音を立てた瞬間、閃は立ち上がり治療場へと足を進めた

これ以上神楽を放っておくことは出来ない

例え神楽がどんな罵声を浴びせようと、あの場所から神楽を連れ去ろうと決意して閃は荒々しく前に進む

誰もが閃王の恐ろしさに道を譲り、ガタガタと震えた、平伏することを忘れ身動きが出来なかった

鬼のような形相にアレなら鬼でも裸足で逃げ出すぞと、誰もが思った

治療場に来ると静まりかえっており、昨日まで痛い痛いと呼んでいた者が今はぐっすりと眠っている

その静けさに不信を抱きながら、辺りを見渡すが目当ての人物は見あたらない

また奥に一步踏み出そうとしたとき

「陛下。何かご用でしょうか？」

閃が振り返ると全身を真っ赤な血で染められた衣服を纏った髭を生やした老人が立っていた

「誰だ？」

「このような姿で申し訳ありません。この治療室の責任者の阿宗あそつと申します。」

膝をつき礼をとろうとする老人を手で制止

「よい。ここはそなた達の戦場。やっと治療たたくいが終わったのであろう。ここにおった仮面の人物は何処に行った？」

鬼のような形相の王から老人を敬う台詞が出てくるとは思ってもいなかった阿宗はにこやかな笑みを浮かべた

「あの者は大変素晴らしい医術を持っております。私ですらあの者の医術に驚かされました。ここで多くの者を救っておりますが、今はあちらで最後の仕事をしております。」

阿宗の示した場所は陣の端にある治療室よりさらに少し離れた場所にある天幕を指さしていた

「ですが、あそこはお見せするような場所ではございません。どうか、あの者が来るまでお待ちいただけませんかでしょうか？」

「あそこは何なのだ？王が行ってはいけぬ場所があるのか。」

低く怒気を含んだ言い方に先ほどまでの笑みを引つ込めた阿宗は困った表情をした

「ご気分を害する恐れがあります。それでもよろしいですね？」

だめ押しのように聞いてくる阿宗医師にしっかりと頷いた閃を阿宗医師は

「こちらです。どうぞ」

案内された場所は一気に周り温度が違つような気がする
暖かな日差しが寒気を感じる
周りに立ちこめる匂いは戦場では良くある匂い

死臭がたちこめる

阿宗医師が厚く閉められた天幕の入り口を捲るとその匂いはいつそ
う強くなつた

そこは目を背けたくなるような死体の山だつた
男、女、子供、老人関係なく多くの死体があつた

それもただの死体ではない
多くの者が、腹が切り裂かれていたり、頭が割れて中身が出ていた
り、手や足だけが落ちていたり地獄絵図とはまさにこのことだと思
える光景が広がっている

閃はこみ上げてくる者が我慢できず、吐き出した
吐瀉物の匂いがするがそれよりさらに強い死臭がする

「陛下大丈夫ですか？ご気分が優れないようでしたら、こちらに・
「よい・大丈夫だ」

閃を天幕から遠ざけようとしますが、それを閃は手で制する
荒い呼吸を無理矢理正常に戻す

大きく吸い込む吸気に死臭が混ざる

全身に、内部に、体の奥深くまでこの死臭が入り込むと思うと、身
震いする思いだが、ここに案内されたということはここに神楽がいる
彼女に会うまではここを離れるまではいけないその一心で閃は膝に
力を入れ天幕をめくって一步を踏み出した

彼女はすぐに見つかった

この場で動いている者などそんなにはいない

彼女は全身を真っ赤に染めた男性の傍に膝とついて寄り添っていた
男性はほとんど虫の息のような状態で、閃も一目で長くは保つまい
と思えた

そんな男性に神楽は話しかけていた

「そうか、そなたは南の出身か。あそこは温暖な気候と聞く。小麦
が採れると聞いていたのだが、そなたの故郷でもそうだったのか？」

「・・・ああ・・・秋に・・・なると・・・辺り・・・一面が・・・黄金色に
なる・・・。その先に・・・家があるんだ・・・。妻に・・・父ちゃん・
母ちゃん・俺の子供だって・・・いる・・・。あっ、笑ってやがる・
・待ってくれ・・・俺も・・・俺もそっちに・・・行くからよ・・・」

息も絶え絶えに話す男は血だらけの手を何も無い空中に伸ばし、彼
だけが見える家族を掴もうと宙を彷徨う
その手をゆっくり神楽は握りしめ

「そうか・笑っているか。ゆっくり進むんだ。彼らのもとに。大丈夫。迷わず行ける。何度も歩んだ道であろう。家族の元に返るんだ。」

「ああ・暖ったけえ・やっと帰ってこれた・。ありがとう・ありがとう・。」

握っていた手から力が抜ける

神楽はその手をお腹の上で組ませ

「安らかに眠りたまえ。御魂が迷わず故郷に帰れることを・・・」

正式な死者への礼儀を口にした

その場で目を伏せ神への祈りを捧げた後、立ち上がった

「この者もきちんと埋葬してくれ。」

「はい」

その場にいた兵達に指示を出した

「かの者は最高の医師です。戦場において死ぬことは、寂しいものです。故郷から離れ、家族に看取られることなく一人で痛い思いをしながら死んでゆく。これほど無念で悲しいことはあるでしょうか。そういった者達はものすごく悲愴な顔をして死んでいきます。ですが、かの者は彼らに光りを与えて笑みさえ浮かべて死んでゆく。まさに最高の医師です。」

自分の医術の未熟さに多くの者が救えず、死んでいった者達がいる
たびに未熟さを嘆いた
だがかの者は違う

最後まで人で生きさせ、人として死んでいくことを導いている
だから、笑みを浮かべる

医術が未熟でも、救えなくても人で死ねる
人として誇らしく死ねる。命の尊厳を教えてくださいか
の者に脱帽したと阿宗医師は自分より若い閃王に話した

「・・・わかった。かの者の仕事が終わりたい天幕に来させよ。
話があると伝えてくれ。」

「わかりました。伝えておきます。・・・陛下。差し出がましいで
すが、お願いがございます。かの者の医術は素晴らしく、？国には
必ず必要となる知識です。どうか、才知あるご決断をお願いします。」

老いた医師が年若い閃に頭を下げる

「そなたに言われずとも、分かっております。」

再度仮面の者を見つめ、閃は一つの決意をする
決意を胸に秘め、軍議を行う天幕に足を向ける

途中で警護をしている兵に

「すぐに軍議を行う。將軍達に集うように至急伝えよ。それと昨日
の町の者達にも集まるように伝えよ。すぐにだ。」

王の命令に兵は礼をとり、すぐさま伝えに走った

・・・これで、君を守ろう・・・神楽・・・君を守ってみせる・・・
閃が歩く大地が太陽がまぶしく照らし出す
日が昇り、やっと世界が動き出した

竜の誕生？

「よく集まってくれた。早朝だというのに町の者にも感謝する。」

集まった者達は王の第一声に度肝を抜かれた

あの王が感謝の言葉を口にした

平伏して閃の表情を覗うことは出来ないが、声音は穏やかだ

これは何かあると王の怖さを知る將軍達は誰もが思った

「さて、集まってもらったのには訳がある。仮面の者に対する処遇を決めるためだ。まず一つ聞く。町の者達よ。どうやってそなた達はこの戦いに勝利したかだ。あの時、虎が采駕国を襲っていなければ采駕は混乱することはなかったであろう。タイミング良くあのようなことが起こるものだろうか？」

確かに王の声は穏やかであるがどこか確信めいたものが含まれるだがその分かる者達はいない

「陛下。この件につきましては私から申し上げます。私、町の長をつとめております、主禪しゅぜんと申します。この度の戦では、仮面の者には多くの者が救われました。かの者は私たちを火から守るため風上に案内しました。そこには多くの者が集まりました。人が集まれば虎も集まります。あの時は、命を落とすのではないかと心底怯えましました。ですが5頭もの虎をかの者は一人で相手をし、私たちに守りました。」

「5頭もの虎を一人で相手にだと！！そんなの無理だ！」

「化け物か！」

將軍達からあり得ぬと声が上がる
それを閃は手で制止、先を促す

「それだけではありません。私たちに、家の扉の木板や窓板を外させ、火を持つように命じました。そして北門から通じる大通りから横に伸びる横道を私たちが固めるように言ったのです。そうすることで北門に続く大きな一直線の道が出来たのです。通りの中央に仮面の者が立ちはだかることによつて虎がそこから出ることを防ぎました。そしてどんどんと北門に追いやりました。そして私たちも仮面の者の後ろに回り込み火で北門へと虎を追い込みました。そこで扉が開いたのです。虎は仮面の者に勝つことが出来ず開いた扉に駆けだして行つたのです。そこで仮面の者が虎だ！逃げると叫び采駕国の混乱を引き起こしたのです」

だれもが、主禅の言葉が信じられなかった
ただ一人閃以外は・・

誰も口を開けず、黙り込んでいると

「失礼します。こちらでよろしかったでしょうか？」

幕を捲り上げ話の中心人物が入ってきた

その姿はやつと成人を迎えたかと言つような幼さの残る身長

顔は見えぬが老けているようには見えない

だが幼いというような感じはしない

大人と子供の間といった仮面の者

誰もが訝しげな視線を送る

「仕事は終わったのか？」

「ハイともイイエとも言いづらいです。治療は一段落を終えましたが、このあと包帯の付け替えや食事の配布ややるべき事は山積みですが、それではここに来るのが1週間以上先の話になると、阿宗医師に言われてきました。」

平伏もせず王と真つ向から対峙して話す仮面の者に誰もが興味惹かれた

「そうか・・・よく来てくれた。そなたには二度にわたる我が軍の勝利を導いてくれたことに対する褒美と待遇を考えていた。」

將軍達は無礼だと分かっている顔も上げて王を見た

「そなたを私の近衛兵隊長に命じる。」

静まりかえったテントの中で王の言葉だけが響く

王の近衛兵隊長といえばそれは軍の中で8つの將軍職と並び称される地位であった。

長年勤めた將軍でさえつくことは出来ず、強さ、知識、指導力多くの事を必要とされ、軍に入った者なら誰もがなりたいと憧れを持つポジション

それをこの一切の身元不明の者にその地位を与える
破格の昇格である

「なりません！！何をお考えですか！！このような者にそのような地位を与えるなど！！」

「そうです王！！確かにこの者によって勝利は得ましたが、このよ
うな者に与えるなど！！」

將軍達や官吏の者達が声を荒げる

「黙れ」

王の一言に誰もが口を閉じるしかなかった

静かになった空間で渦中の人物が口を開いた

「お断りします。」

ただ一言言い放つと仮面の人物は天幕から出ようと入り口に足を向けた

竜の誕生？（後書き）

長くなりましたので、二つに分けます。

多くの方にお気に入り登録に評価を頂き、大変幸せです！！

これからも頑張っていきますのでよろしくお願いします！！！！

竜の誕生？

「待て！これ以上の待遇を望むのか？」

王の呼び止めに仮面の者は足を止めた

「陛下。誰がそんなものを望んでいると言いました。私はあなたこそが王だから守りたいと言っただけ。地位とかそんなものに興味はない。別の方を付けてください。軍に入隊したいだけです。それがダメなら、単独で動きます。」

「そなたを軍にいれるわけにはいかない。だがその力を発揮しないのはもったいない。どうだろう。私の傍で力を使わぬか？」

「使いません。分からないのですか？ここには多くの臣下がいるのですよ。王を支える臣下の意見を蔑ろにして、私を近衛兵に？誰が私の命令を聞くのです？あなたが勝手に決めた近衛兵などに！」

まるで幼子を叱る母のような言い方に誰もがぽかんと口を開けて見入った

「ふはははははは！王に対してこの意気込みよう。まさに素晴らしい。王と対等に意見の言える存在。そなたに名をやるう。その強さまさに竜のごとき強さ。そなたは竜じゅう。竜將軍。近衛兵隊長として私を守って貰おう」

「何度言えばよろしいのですか！断ると」ならば采駕国の兵を治療するそなたは叛逆罪で捕らえてもよいのだな？」

「なっ！！」

「そなたが虎で傷ついた采鷲の兵を治療していると報告があった。この？国に対する反逆罪ではないか？」

「ふざけることを言うな！！」

王の冷たい瞳が見つめる中仮面の者は怒りを含んだ声で反撃した

「他国であれば治療は許さぬと！さっきまで争っていたから？敵だから？ふざけるな！！！！敵だからこそ、解り合う努力をせねばならない！憎しみ続けてはこの国の繁栄などありはしない！！」
今にも王に掴みかかりそうな怒気に誰もが怯んでいた

「戦いに負けた国の民を蔑んでどうする。同じ自国の民のように慈悲を与えねば火種となる。この？国は大国だ。それくらい大きな器がなければ端から崩れ落ちて言ってしまう。土台である民をしっかりと結びつけ、この国を繁栄させていかねばならないのに、あなたはこの国を繁栄させたくはないのか！！！」

パチパチパチ

息を荒げて話した仮面の者に閃は両手を叩いて賞賛した

「誠にこの国を深く愛し、守ろうとしている者の言葉だ。だからこそ、そなたに、いや、竜將軍にこの国を一任して欲しい。そなたが民のとの交流を深め、他国とも友好を深め、この国の繁栄に一役買っただけで欲しい。だからこそ、近衛兵隊長を任せるのだ。皆も異論はないな？」

王の見つめる瞳は異論は認めないという強い思いが込められていた

「……………」

「お待ちください、陛下。」

仮面の者、竜将軍が声をあげようとしたときそれを遮るように紅凱聯将軍こうがいれんが声を上げた

「陛下、確かにこの者は強うございます。しかしこの者に近衛兵隊長に命じれば兵が許すはありません。段階を踏まず、このような破格の昇格はお考え直しを」

軍最長の紅将軍が反論すると誰もが声を上げた

「そうです。近衛兵隊長は紅将軍がもつとも適任です！」

「このようなおかしな者にこの国の象徴である竜を名に与えるだけでも破格の恩賞だというのに……！」

「どうかお考え直しを……！」

平伏して顔を下げ者達に

「一つだけお聞きしたいことがあります。」

仮面の者から声が上がる

「なんだ？」

「もし……もし私が……ここで引き受けしましたら……他

国といえど治療を施すことを許していただけですか？」

「約束しよう。」

「・・・では、お引き受けいたします。」

その場が水が打ったように静かになった

仮面の者、いや今この時をもって竜將軍となった者は王の前で右腕を胸に当て、左手は地面につき左片膝をたてた状態で頭を垂れ、？

国の正式な軍ならではの最上級の礼をとった

閃は苦々しい思いで、竜將軍の礼を見ていた

だが、ポーカーフェイスの閃の表情の変化など微々たるものだ

それに気づく者など誰一人としていなかった

「では、竜將軍として近衛兵隊長に任じる」

「いえ、お待ちください。近衛兵に命じられる前に一つ、お願いが
ございます。」

「なんだ？」

「このままでは多くの兵や民に示しがつかないでしょう。そこで私
を試させて貰えないでしょうか？」

「試すどうやって？」

「武力、軍略、兵との友好など多くの点で私を試させてください。」

「そんなもの試すまでもない！！」

「そつだ！お前などに軍を任せられるものか！！」

このままでは軍の最高位が奪われると焦った將軍達が次々と声を上げた

「でしたら、私を打ち負かしたものが次の近衛兵隊長になればよろしい。」

「「「「えっ」「」「」

「私は自分の実力がどれほどかは知りません。ここにいる誰よりも弱いのかもしれません。されどこの国を守ろうという気持ちは誰にも負けません。武力、知識などで負けるようなことあれば、それは私以上にこの国を思うものだと思い、その方に近衛兵隊長をお譲りします。陛下それでよろしいでしょうか？」

「私がそなただと決めたのにか？」

凍てつくような目が將軍達を見つめる

「陛下。人が礼をとったり頭を下げようと思うのは、人の品格にあります。無理矢理頭ごなしに頭を下げさせても、反発を生むだけです。皆、人などです。私は無理矢理は嫌いです。皆に認めて貰ってこの地位を得たいと思います。大丈夫、陛下。私は負けません。信じてください。」

その言い方はどこか、村にいた頃の神楽と同じ言い方だった

卑怯だ・・・そんな言い方をしたら、認めざる得ないじゃないか・・・

握った拳が手に食い込み、血を滲ませる

「わかった、だが、必ず勝て。」

「心得ました。」

立ち上がり真っ向から閃を仮面越しに見える

閃が傷つき、苦しんでいる姿がありありと分かる

「……ごめんなさい……私はあなたを最後には利用してしまうの
ね……」

クルリ振り返った竜將軍は將軍達に

「では將軍方。腕に覚えがあるというのなら、どうぞいつでも勝負
をお受けします。」

大胆不敵に戦線布告を出した

竜の誕生？（後書き）

誤字脱字の報告、感想など心よりお待ちしております！！

多くの敵に多くの味方

それから一刻もしないうちにその噂は広まった

誰もが竜将軍に戦いを挑み、勝てば近衛兵隊長になれるという

この噂を聞きつけたものは、我先にと竜将軍のもとに急いだ
ほぼ？国軍の全体の人数が治療室の天幕の前に並んだ

「オイ！！ここに竜将軍って奴がいるんだろう！！」

「さっさと出しやがれ！！」

「そいつ倒してオレ様が近衛兵隊長だ！！」

天幕はそれほど大きくないため多くのものに押し合いへし合い競れ、
中央を支える柱や周りの柱がギシギシと音を立て、今にも倒れそうだ

バサッ

天幕がめくられ真っ白な仮面に血みどろの格好

あきらかに少年のような背格好の者が現れた

「あんたが「うるさい！！ここを何処だと思ってる！！ここでは
未だに治療たとかいが続いているんだ！！騒ぐんだったら別の所にいけ！！
！」

まるで雷が落ちたかのように大声に先頭に立っていた者達は耳をふ
さいだ

「戦いを挑む者は昼からにしな！！今は治療中だ！！」

圧倒的な覇気に誰も文句は言えず、オドオドしていると竜將軍はまた治療室に戻っていった

「よろしいのですか？竜將軍」

「嫌みですかそれは！！阿宗医師敬語などいりませんよ！！明らかに私はあなたより若いです！！！」

「イヤイヤ分かりませんよ。もしかしたら私の方が若いかもしれませんが。」

髭を生やして好々爺のような阿宗医師が少年のような竜將軍より年が若いなどあり得ないがどうこの阿宗医師は竜將軍をからかう癖があるようだ

だがそのからかいが竜將軍を穏やかにさせてくれる
変わらぬ態度に竜將軍はホツとする

「それよりよろしいのですか？王の傍にいませんか？」

「いいのです。王には許しを得ています。今はここにいる者達の治療が優先しなければいけません。」

「そう言っていただければ嬉しいのですねえ。猫の手も欲しいと思っていたのに竜の手がやってくるなんて。」

「このような無骨な手ですがよろしいですか？」

二人で顔を見合わせ笑いが起きる

「誠に王は良き方を將軍に迎えた。あの恐ろしさはいただけないが、人を見る目はあるようだ。」

「買い被りです。私はそんな凄い人間ではありません。」

「では何故、將軍などに？あなたが地位などに興味があるとは思いませんが？」

竜將軍はどこか儂げに口元に笑みを浮かべて

「昔・・両親が言ったんです・・。すでに他界してこの世にはいませんが、良き両親でした。両親から治療のしかた、薬草などを学びました。」

どこか遠くを見ながら話す竜將軍に阿宗医師は黙って聞き入った

「両親は多くの者を救おうと、山から下りて戦場に行きました。戦場では負けた？国軍の者達が傷を負っていた。しかし、勝利した敵国は、？国の民を奴隷のように扱い、死に至らしめる光景を見てきました。戦場で傷つかなくても、人として扱って貰えず奴隷として扱われ、死んでいく者が多かったです。いくら治療の知識があっても死んだ者を生き返らせることは出来ない。生きていればいいんだ。同じ土の上に立ち、帰りを待つ家族、友人その人には生きてきた歴史があり、人である。何処の国に生まれようと、人として生まれてきた以上、人として活かしたい。だからこそ治療をさせて貰えるなら將軍でも何でもしてやる。」

「やはり王は良き方を將軍にされた。」

今まで黙って聞いていた阿宗医師が口を開いた

「？何処がですか？」

「命の尊厳を知るものこそ、人の上に立つべきだ。あなたはよく、人を理解している。あなたが竜將軍としてやっていけるよう、微力ではありますが、私は竜將軍を応援させていただきます。」

「オレもオレも!!！」

「阿宗医師抜け駆けはダメツスよ!!！」

いつの間にか聞いていた治療を受けている者や医師達は竜將軍の治療に尊敬を抱いていた

「最初は胡散臭かったんだけど・・・すんげえ！怒って生きるようにいつてくれたからオレは今ここにいる!!アンタにはホント感謝してる!!！」

「オイオイアンタって!こちらは竜將軍様だぜ!そんなタメ口いいのかよ!!！」

「おつといけねえ!!えつと大変失礼いた・・・しま・・・した?」

「なんだよその片言は!!！」

「かまわない。好きに言え」

治療室は笑いが日が空高く昇るまで絶えなかった

この時竜將軍は気づいていなかった

この阿宗医師、別名白の將軍。歴とした將軍職に就いた武人である。だが、戦う場所は治療室という戦場だ。多くの者に慕われ、兵以外に民にも慕われている。その白の將軍が竜將軍に敬意を払った。これはかなりの後ろ盾だ

それは人伝いに伝わり多くの者に知れ渡った
阿宗医師が付くなら俺たちもと続くものが多くいた

竜の試練〜竜の武を見せつけよう？（前書き）

少しではありますが、流血表現があります。
自身の判断でお読みください。

竜の試練、竜の武を見せつけよう？

日が南天の空に高く昇ったとき閃王の使者が治療室にやってきた

「竜將軍。王のご命令です。広場にお越しください。」

使者に促されて、治療室を後にした竜將軍は陣の中央にある広場に向かった

そこは多くの兵が集まり円形の広場となっていた

上座には一段高くなった物見席で閃王や將軍達が椅子に座って成り行きを見守っている

「俺は見せ物か・・・」

ポツリと誰に呟くでもなく竜將軍から零れて声は誰の耳に届くことなく、風と共に消えた

カツカツカツ

音を立て歩き出し円形の広場の中央に立った竜將軍は頭を下げることもなく、ただ王を真っ直ぐに見つめた

「これより、近衛兵隊長に戦いを挑みたいという者の挑戦を受ける」

高見台から高々と宣言される声に、兵からの歓声上がる

「この戦いは殺すことは御法度である。戦意喪失、武器を破壊など、負けを認めて時点で終了とする。では、まず最初の挑戦者は・・・」

「俺だ！！！！！」

広場の周りを囲んでいる兵達を押しつけて叫んだ男
身の丈2メートルを超えるかというような巨体
手に持つ武器は一メートルを超える巨大な黒い棍棒
竜将軍と比べるとまさに大人と子供というような身長差

「俺は骸羅がいら！！俺様が将軍だ！！」

広場に降り立つとブンブンと棍棒を両手で回す
空気を切り裂く音に兵達は歓声を上げる

「では両者は広場の中央に・・・武器を構えよ。」

中央にたつた二人は真つ正面からにらみ合った
武器を構える骸羅と違い、竜将軍は手に持つ身の丈より長い棒を片
手に持つだけで構えようとしない

「オイオイ俺様に怖じ気づいたのか！！言いぜ今すぐ降参するなら、
恥をかく前に止めてやるぜ！！」

武器を竜将軍の前に構えて笑う骸羅

「ふう〜」

溜息をついた竜将軍は手に持っていた棒を地面に置いた

「そなた相手に武器を使うなど・・・もつたいない」

「な、な、何を！！！！！！今すぐ地面に叩き付けてやる！！！！」

激怒した骸羅は今すぐにも襲いかかるうとした

「ま、・・・もう言いよい！始め！！」

官吏の号令と共に駆けだした骸羅は真つ正面から棍棒を振り上げて
竜將軍に叩き付けようとした

その瞬間、竜將軍は駆けだし、骸羅の懐に飛び込んだ

骸羅の踏み込んだ足の逆足の足首を掴むとおもいつきり持ち上げた
骸羅の重心はすでに前に向かっており、また棍棒の振り下ろしの勢
いが重なり

顔面から地面へと倒れ込んだ

グキッ

重々しい音が響いた後

広場は一瞬で静かになった

骸羅の竜將軍によって持ち上げられた足はそのまま重力に負けて地
面へと倒れた

180度回転して倒れた骸羅は顔には土がつき、鼻や口からは血が
流れ、意識がない

竜將軍はすぐさま骸羅の傍に近寄り、首もとの脈をとった

「呼吸、脈正常。鼻が少し折れているか・・・」

グッキ！

骸羅の少し曲がった鼻を正常な位置に戻し

「だれか白の軍に連れて行け。今は意識を失っているが、すぐに起

きる。」

竜將軍の声に先ほどまで骸羅を押し立てていた者達がコソコソと現れて、引きずるように連れて行った

「次は誰が挑戦する!!」

竜將軍の声に兵達はお互いに顔を見合わせ、視線を彷徨させた

それもそうだ

骸羅といえど？国軍の中で兵士の中では群を抜くほどの乱暴者であった

その体格の良さから、軍功も上げるが軍で喧嘩などを日常茶飯事起こすため、問題児となっていた

だが強さは強かった

將軍達ですらその強さを認めていた

その骸羅が一瞬で、それも武器も持たない少年のような者に負けた

戦いを挑みたいが負けて恥をさらすことになることは避けたいとの足が進まない

「面倒だ！何人かいつぺんに相手しよう！挑戦者はいないのか!!」

誰も広場には行ってこようとしないことに焦れた竜將軍は兵士達に向かって叫んだ

「だったら俺は行くぞ!!」

「俺も俺も!!」

「一度に襲えば勝機がある！！」

一気に10人ほどの者達が広場になだれ込んできた

各々が持つ武器を振り上げ、襲いかかってきた

ある者は剣、ある者は槍、ある者は斧など武器は様々

竜將軍はすぐさま自分の棒を掴むと間合いを計りながら攻撃をした

狙う場所は武器を握る手を中心とした

的確に打ち付ける棒に誰もが武器を落とした

そして戦意を喪失させるため、顔のほんの触れるか触れないかの距離に棒を突きつけた

誰もが怯えて戦意を喪失させた

多くの者が広場になだれ込んできたが、今は誰も入ってこようとな
ない

広場は戦意を喪失した者達で溢れかえっていた

その数100、いや200人を越えているだろう

誰もが座り込み震えていた

その中でただ一人竜將軍が息一つ乱れた様子なく立っていた

服は少し破れはしているものの、外傷はない

「これで終わりか？」

戦う意志がある者が周りにいないことを確認して王の方を振り向こ
うとした

竜の試練、竜の武を見せつけよう？（後書き）

たくさんのお評価、お気に入り登録ありがとうございます！！
これを元に頑張っ書いていきます！！

竜の試練〜竜の武を見せつけよう？（前書き）

流血表現があります。自身の判断でお読みください。

竜の試練、竜の武を見せつけよう？

「ま・・待て！！お、俺が・・俺がいる！！」

震える声でブカブカの鎧を纏った少年が広場に走り込んできた
手に持つ剣はお世辞にもいいものとは言えない
剣は所々欠けており、手が震えているため剣も振るえている

「止めておけ。そんなに震えていたら攻撃する前に自分が怪我するぞ。」

「う、うるさい！！お、俺はな・・こ、近衛兵隊長になりたいんだ！！なって家族を助けるんだ！！お前を、た、倒すんだからな！」

少年の目は恐怖を映しているが、どこか秘めた思いを持っている

「戦うことがどういう事が分かっているのか？」

「な、なんだよ！こ、子供扱いするのかよ！わ、分かってるぜ！殺すんだろ！俺は怖くねえ！怖くねえぞ！！」

両手で剣を構え、ブルブルと震える少年に竜將軍は棒を構えることなく一歩一歩近づいた

「何だよ！何で近づくんだよ！！」

少年と竜將軍の距離が近づくに連れ少年が悲壮な声を上げる

「・・・・・・・・」

「うわあああ!!」

少年は目をつぶり持っていた剣を竜將軍目掛け振り下ろした

少年は振り下ろした剣が地面に付くわけでもなく、どこかで停止させられていることに気づいた

そして剣を伝って生暖かい何かが手に触れた

恐る恐る目を開けると目の前に竜將軍がいた

少年より少し高いぐらいの身長だが竜將軍から発せられる覇気に見上げなければいけないと感じさせる

竜將軍を見ると少年が振り下ろした剣を左手で握りしめている

肉が切れ、血が溢れ、その血が剣を伝って少年の手に触れている
ポタツ・・・ポタツ・・・

赤いしずくが地面に落ち斑点を作る

「ひいひい!!」

少年は剣を離して尻餅をついた

目の前で自分から人を傷つけたことのなかった少年は滴り落ちる赤いしずくが怖かった

「血が怖いか・・・少年よ。」

威圧感のある声と雰囲気、少年がガタガタと震えている
瞳からは絶望に映し出され、止めどなく涙が溢れていた

「俺は血が怖い。血はな、生きてる証であり流し続ければ死んでし

まう。血は生きることにとても関係がある。戦うことは血を流し、その者の生きることと奪うことだ。生半可な気持ちで剣を持ち、人を傷つけるな！」

語尾をきつく言い放ち竜將軍は剣を少年に返そうとした

「……だって……だって……こうでもしないと……俺の家族はどうなる……父ちゃんは前の戦いで死んだ……家に帰ったら働き手は俺だけだ……母ちゃんは体が弱いんだ……腹を空かせた妹たちや弟たちを守らないといけないんだ……じゃないと売られてしま……う……俺が……金稼がないといけないんだ!!俺が……うっ……」

ポロポロと涙を流しながら唇をかみしめる

「ならば、近衛兵にはいるか？俺の軍だ。誰一人として部下の兵はいない。」

「……へえ……」

涙と鼻水でぐしゃぐしゃの顔で竜將軍を見つめる

「何処の軍より厳しいが、俺が守ってやる。お前がもう剣を持つことのないように、家に帰って腹一杯飯が食えるような世にするため、手伝う気はないか？」

目線をあわせるように少年の傍に座り込み

「来る来ないは自分で決める。誰かに言われたから付いてくるんじゃない。自分自身で自分の道を見つける。」

「……つう、俺付いてきますす！！竜將軍に付いてきますす！！」

「交渉成立だ。これで俺も負けるわけにはいかなかったな。お前一人を養うために將軍を辞めるわけにはいかなかった。」

立ち上がって上座を見つめる

「他に戦う意志のある者はあるか！！戦う意志がなければ終わりだよいか！！」

威圧的な声に一兵卒達は下を向き、ガタガタと震え、視線を彷徨わせる

「ではこれに「待て。」

竜將軍の声を遮って上座から声がする

「なんだ、李將軍」

「陛下。私が竜將軍と戦わせてください。このような強者と戦うことなど滅多にない幸運。是非とも、一戦交えたいと思います。」

李將軍、別名橙の將軍。もとは海賊の長をしていたが仲間の裏切りにあい、投獄されて所を何代前かの王に許され將軍に付いた者である。

戦いを好み、強者と戦うことをいつも望んでいる

將軍についてはまだ若年だが船を動かせば右に出る者はいないほど者だ

日焼けした肌に少し縮れた髪の毛

口の周りを囲む口ひげが海賊らしい風貌である

「……構いませんよ。將軍と手合わせが出来るなど滅多にない幸運。こちらこそ是非にと申し上げたい。」

王の言葉を遮り竜將軍が答えを出す

「面白い!」

高見台からひらりと舞い降り、広場に着地した李將軍は背にあるマントをはぎ取り動きやすい格好になる

すぐさま李將軍の副官が將軍の愛用の武器である大刀を持ってくる刃が大きく三日月状に反りあがり、光りを浴びてキラリと光る

広場に中心までお互いにゆっくりと歩く

広場にいた一兵卒は気絶している者達は引きずられ、我先にと広場から逃げ出した

竜の試練〜竜の武を見せつけよう？（後書き）

評価やお気に入り登録ありがとうございます！！
嬉しすぎて、書くスピードが上がっております！！

めっちゃ頑張っていきます

竜の試練、竜の武を見せつけよう？

静かになった空間で二人の足音が響く

そしてピタリと二人の足が止まった

そこが二人の限界地点

そこから少しでも動くなればお互いの居合いの距離に入る

ピリリとした空気が広場全体を包む

重々しい空気がどれだけ続いただろう

ただ一滴の竜將軍の手から落ちた血が地面を跳ねた瞬間

二人は動いた

李將軍の跳躍は素晴らしかった

たった一度の跳躍で竜將軍の眼前に迫った

突き出される大刀を体を後ろに仰け反る事で避ける

そのままバク宙をして、振り上げた足で李將軍の顎を蹴り上げる

二度バク宙をして李將軍と距離を開ける

もろに食らった蹴りは口の中を切ったようで口角から血が滲む

プツと滲み出た血を吐き出した李將軍は笑みを浮かべる

「お前強いな。それでこそ倒しがいがある。だが怪我した奴と戦っても面白くない。その血どうにかならないか？」

棒を伝って落ちる血に李將軍は眉をひそめる

「これくらい大丈夫です。と言っても、ご心配のようなら、少しお待ちを」

棒を地面に突き刺し、血が流れている左手の袖を思いっきり破いて、手にグルグルと巻いた
結び目を作ると布の片方を口に含みもう片方を右手で引っ張るとれないことを確認すると棒を握る
布を巻いた分だけ握りづらくなっている

「どなたか剣を貸して貰えないだろうか？棒では戦いづらくなったので剣を貸して欲しい！」

だが誰も動こうとはしない

近衛兵隊長が言っているのだからこの場合すぐさまにでも剣を貸さなければいけないが、未だ信頼の無い近衛兵隊長である。だれが大切な武器を貸せようか

ましてや戦っている相手は將軍だ。李將軍に睨まれるようなことがあつては軍ではやっていけない
そんな思いがあつて誰も動こうとしない

ただ一人を除いて……

「では、私の剣を貸そう。剣を持って！」

高見台の中央に座りことの成り行きを必死になって思いとどめていた閃王が動いた

「早くせぬか！剣を持って！」

王が言う剣。それはもちろん王剣だ。この国で最も最上の剣と言われる宝剣を持ってこいと言われている

王以外扱うことを許されぬ剣。それを貸そうと言っている。

もってこいと言われた兵士は他の將軍達に助けを求めようとしたが、二度目の王の声に剣をとりに行った
とりに行っている間、広場は騒然とした

「オイオイ王に剣を借りるのかよ？傷つけられないじゃないかよ。」

「だったらあんたが使え。その代わりにあんたの剣を貸してくれ。」

「そりゃ、乗れねえ相談だ。これは愛剣だ。誰にも使わせねえ」

大刀を抱きしめる男など見ていて気持ちいいものではないが、竜將軍の口角があがる

「お！！あんた笑えるのか！？」

「俺も人間です。喜怒哀楽はあります」

「竜は人ではないはずだぞ？」

「人を化け物のように言わないで欲しい。俺は人だ」

「だったら、人らしく堂々と戦おうぜ！！」

ニヤリと笑う李將軍は人を引きつける魅力があった

恭しく王に差し出すと、王は柄の部分握りしめた

「竜將軍！！これを使え！」

竜將軍は高見台に近づき下から仰ぎ見る
閃は膝をつき王自ら剣を手渡した

「必ず勝て。良いな。」

渡す際に小声で竜將軍、神楽だけに聞こえる声でささやいた

竜將軍はしつかりと頷いて李將軍へと振り返った
柄を握り、鞘からスルリと刀を抜いた

それは見事な太刀だった

刃が光り、刃紋薄く浮かび上がり、峰は見事に反り返り宝剣と言っ
より妖刀と言った方がいいくらいなほど魅せる刀だ

二、三度素振りをすると嫌なほど手に馴染む

「おいおい、もういいかい？」

大刀を肩に当てて暇そうに立つ李將軍に向き直る

「待たせた。いざ勝負。」

鞘を地面に突き立て、右手だけで太刀を構える

おどけた雰囲気が一瞬で消えた

またピリリとした張り詰めた雰囲気になる

「はっ！！」

李將軍が先に動いた

また同じ突きを繰り返した

だが今度は後ろには逃げない
太刀の刃に当て突きの軌道を変えた
そして竜將軍は一步踏み出し、向かってくる李將軍の右頭部に思い
つきり左肘を打ち付けた
そのまま吹っ飛んだ李將軍は何とか受け身をとって立ち上がることに
する
だが一步を踏み出すたびに膝に力が入らない
ぐらりと倒れて地面に倒れ込む

「動くな。軽い脳震盪を起こしている。無理に動こうとすると、吐
き気に襲われる。休めば治る。動くな。」

いつの間にかそばに来た竜將軍は李將軍の脈をとって呟く

「ちっ。負けちまった・・・」

それだけ言って李將軍は意識を失った

「誰か、救護班を呼べ！！李將軍を休ませろ！！」

「將軍！！！！」

李將軍のマントを受け取った副官達が現れ、剣を抜いた

「將軍に何をした！！」

「離れる！！」

怒気がものすごく何も聞き入れようとしない副官達に、その場を任せ
竜將軍は立ち上がった

「待て！！李將軍に何をした！！返答次第ではただでは済まんさぞ
！！！」

「殺してやる！！！」

「やめないか！！李將軍はただ気絶しているだけだ！！！」

一触即発の雰囲気を破ったのは聞き慣れた声だ

「阿宗医師。」

「阿宗將軍！！こいつは！！！」

「將軍？」

「すまないねえ。竜將軍。君には言おうと思っていたのだが遅くな
ってしまった。これでも將軍なのだよ。」

好々爺のような笑みで笑いかけてくる阿宗將軍

「君たち、何をやっているんだい。李將軍は本気で戦ったのだよ。
堂々と戦ってそれにケチを付けるとは何事だ！勝者を貶すことは敗
者を侮辱することだ。それすらも分からないとは、それでも副官か
！！！」

あの温厚を人で表したような人物が声を張り上げた
誰もが啞然とした

「ということ、陛下。これ以上彼を、竜將軍を見せ物のように扱
うことをお止めください。この者は強い。將軍にも勝る力を持って

おります。ですが怪我をして、左手が使い物にならなくなってしま
うことを今すぐにも止めたい。竜將軍をお借りします。」

「誰か！！！！大変だ！！！！虎が！！！！」

阿宗医師が竜將軍の手を掴もうとした瞬間、遠くから叫び声が聞こ
えた

「陛下！！！！申し上げます！！と、虎が、町で捕らえた虎が脱走いた
しました！！！！」

「何！見張りはどうした！」

「それが見張り場にも兵はおりません！！何処に行ったのか分かり
ません！」

「もうよい！虎を撃ち取れ！」

王の号令と共に走り出した者がいた

人垣に走り出し、剣を地面に刺して途中にあつた自分の棒を掴む
人垣の一步手前で棒の先端を地面に突き立て、棒高跳びの要領で体
を宙に浮かせた

人の高さより高く飛んだ竜將軍は未だ固まっている兵の肩などに着
地して飛び石が代わりに人垣を跳んでいった
肩を使われた者は叫び声はあげる

「スマン！肩借りた！」

そう叫んで、人垣を抜け地面に着地した
そして叫び声と虎の唸り声が聞こえる方に走り出した

竜の試練〜竜の武を見せつけよう？（後書き）

感想、評価、お気に入り登録ありがとうございます。

これを元に頑張っていきます

感想、誤字脱字がございましたら、よろしくお願いします。

竜の試練〜竜の武を見せつけよう？

虎は3頭いた

この三頭は竜將軍が町で倒した虎だ
気絶された状態で見つかったため、牢に放り込まれただけだった

訳も分からず虎たちは閉じこめられたことに対して興奮し、暴れて
いた

これで牢の番人がきちんと見ていたなら良かっただろう
だが、広場の戦いが気になって番兵達はお互いに番を擦り付けあっ
て試合を見に来ていた

竜將軍が虎の場所にたどり着くと

3匹の虎を円状に取り囲んだ状態で、それ以上虎に近づくことが出
来ない

牙や爪が怖くて槍で牢の方へ追いやろうとするが、逃げ腰の状態で
は全く進展をみせない

「どけ」

声と同時に空から人、竜將軍が降ってきた
地面に着地すると持っていた棒を構えた

虎もいきなり現れた人に驚き、唸り声を上げる

「・・・怯えているな・・・」

持っていた棒を地面に突きつけると一歩一歩無防備に近づいていった

「オイオイ！止めるって！喰われるぞ！」

「危ねえって！！止めるって！！」

多くの者が引き留めようとしたが竜將軍の足は止まらない

ウーッと低い唸り声を上げる虎は竜將軍から微かに感じる血のお
いに本能的に怪我をした餌だという認識をもつ

舌なめずりをして襲いかかるタイミングを計っている
だがそれが出来ない

確かに竜將軍は無防備に近づいているように見えるが覇気が違う

一歩一歩近づくと竜將軍からは動物の本能から恐怖いや、畏怖を感じる
虎たちは状態を低くし唸ることしかできない

その距離がゼロになったとき竜將軍の手は虎の頭を捕らえた

虎は完全に降伏を示し、伏せの状態で怯えていた

「ふっ」

少し口元の口角があがると虎の頭を撫でた

それが気持ちいいのか虎はゴロゴロと喉を鳴らす

それを見ていた二頭の虎も近づいてきた

その二頭の頭を撫でる

二頭も借りてきた猫のようにおとなしくなり、ゴロゴロと喉を鳴らす

「お前達もついてくるか？来るなら歓迎するよ」

虎たちは答えるかのように鳴いた

「ようこそ、我が部隊へ！歓迎しよう。この虎たちは我が部隊で引き受ける。何人たりともこの子らを傷つけることは許さん！」

そう言つて竜將軍は歩き出した

その後を追従するように虎たちが続いた

陣の端に來ると竜將軍は歩むのを止めて虎たちに振り返つた

「すまない。陣にお前達がいたら、人が怖がる。すまないが、ここで我慢してくれ。」

來る途中に貫つた縄を虎たち一匹一匹の首に巻き付け端を地面に突き刺した棒に結びつけた

「日が沈む頃にまた來る。それまでここで大人しくしている。もし馬鹿なまねするような奴がいたら、脅かしてやれ！だが傷つけはするなよ！」

虎たちは竜將軍が言っている意味が分かるのか、一声鳴いた

竜の試練〜竜の武を見せつけよう？（後書き）

お気に入り登録200件突破ありがとうございます。
評価、感想もお待ちしております。

部下が出来ました

虎たちを置いて竜將軍は治療室と向かった

治療室の天幕を開けて真つ正面に立っていたのは
般若のような顔の阿宗医師がいた

「何やってるんですか!!!」

治療室に大きな雷が落ちた

「全くもう!!!何度ハラハラさせる気ですか!!!あなたのせいで寿命が縮みましたよ!!!私の寿命返してくださいよ!!!全くもう!!!」

プリプリ怒りながら竜將軍の左手の治療をする阿宗医師に不思議と
竜將軍は笑みを浮かべた

「なんだい気色悪い笑み浮かべて?」

竜將軍の口角があがっていることに気づいた阿宗医師はすねたような
な声を上げる

それをクスクスと副官である医師達が笑っている

「今までの無礼をお許してください。將軍とは知らず、多くの無礼を
いたしました。失礼した。」

「おやおや、王の前ではあれほど無礼なのに私の前では礼儀を示す

のですか？」

「礼をとるべき相手は自分で決めます。王よりあなたに礼を尽くすべきだと思ったからです。それまでです。」

「それでは私には礼を尽くすべき相手ではないと言つことか？」

第三者の声が響いた

声の方を振り向くと閃王が立っていた

「阿宗医師。竜將軍の手は？」

「大丈夫ですよ。すぐに、とはいきませんが、傷跡が残らないようにきれいに治療しましたよ。まったく王といい、竜將軍といい人のいうこと全く聞かないんだ！！全くもう、老人の大切な寿命を使うなんて、なんと優しくない奴らだ！！」

畏怖を放つ王や竜將軍にこれほどふざけた口調が言えるとは、さすが阿宗医師だ

「そうか。それはすまん。治療が終わったのなら用がある竜將軍。今すぐ付いてこい。」

「はい。阿宗医師、治療ありがとうございました。話が終わり次第また手伝いに来ます。」

「はいはい！無茶はしなさんな！」

天幕を出た二人は王の天幕に向かった陣の中央にあり、一番大きな天幕だ

天幕の中は床は大きな絨毯が敷いてあり、その上にまた動物の毛皮が敷いてある

上座には熊の毛皮の座椅子がありゆったりと王は座った
真つ正面から顔を合わせた二人は

「竜將軍・・・かぐ」

「陛下！それ以上はご容赦をお願いします」

閃の視線を避けるかのように竜將軍は礼をとった

「つく・・・」

平伏する竜將軍の姿が閃の心を苦しませた

「陛下。剣をありがとうございました。広場に置き忘れてしまいました
したが、「その剣はそなたに与える。私を守る剣としてそなたが持
つにふさわしい」

「陛下。私はまだ近衛兵隊長として認められてはいません。認めら
れたとき、その剣をお貸しください。あなたが剣を持つことの無い
ようにあなたを守ります。今はまだ持てません。」

礼をとる竜將軍に苦い思いを感じる

彼女の言うことは正しい。何のために神楽を近衛兵隊長にした。
守るためだった。近衛兵隊長なら王の傍にいつもいて、一番安全な
場所で目の届くところにいてくれる

なのに、神楽はいつも俺の思惑道理には動いてはくれない
彼女の行動は正しく、自分の行いが間違いのように感じる

「たぶんその虎だ。大丈夫。少しお茶目だがいい奴だったぞ。」

「お、俺まだ喰われたくない!!」

「大丈夫だ！先ずは実践だ！ついてこい！」

少年の手を掴んで進む竜將軍

王はその姿を見つめるしかない

例え誰が止めようと彼女はとまらないだろう

彼女のすることはいつも誰かのための行動

いつもの彼女であった欲しいから閃は神楽を止めるわけにはいけなかった

部下が出来ました（後書き）

多くの方に評価、お気に入り登録いただきました。
ありがとうございます！！

皆様の応援で頑張っ書いていきます！！

部下の初仕事

虎が置いてきた場所では多くの兵が遠巻きで見ている
珍しい虎が寝つ転がって大人しくしている

もしこいつらを生きたまま捕らえたらいい値で売れる
それも綱で繋がれた状態

絶好のチャンスなのだがやはり尻込みをしてしまう

「オイ、誰かいけよ！」

「お前が行けよ！お前が言い出したんだろ！」

「いけるわけ無いだろ！もし襲いかかってきたら一発でお陀仏だ！」

「だったら止めておけ」

明らかに違う声にギクリと振り返る

「その虎たちは近衛部隊だ。傷つけることは許さない。もしかして
訓練の申し出ならいつでもその虎と戦うがよい。今綱を外そう。」

「「「いいです！！！すいませんでした！！！」」」

虎に近づき綱に手を伸ばす竜將軍にそこにいた兵達は逃げ出した
残された竜將軍と翔大に虎たちが尻尾を振りながら近づく

「フフ可愛いのに。翔大。恐れるな。お前を傷つけるような奴らで
はない」

腰を抜かしている翔大に虎が口を開けた

「ひいいい」

目をつぶって喰われることを覚悟した翔大は半泣きだ
ペロッ

「ぎゃああ!!」

「目を開ける翔大。よく目を開ける!」

翔大が目を開けると確かに目の前に虎がいる
だが虎は翔大の頬を舐めるだけで一向にその牙を向けてこない

「見た目に惑わされるな。どんな姿をしていても心通わせれば、その者の考えを理解できる。その虎たちは翔大を傷つけはしない。」

「でも・・・」

「大丈夫だ。手を伸ばせ。大丈夫だ。」

竜將軍の辛抱強い呼びかけに翔大は手を伸ばして虎に触れた
ごわごわした毛並みが手に触れる
その手に身を擦り付ける虎から伝わる体温

「温かいだろう。そいつも生きている。血が通い、今を生きている。
虎だからと言って怯えるな。良いな?翔大」

ゴロゴロと鳴らす虎に生きている存在だと認識した翔大は大きく手

を動かして虎を撫でた

「餌などは俺が森に行つてとつてくる。時には翔大にもいつて貰うことがあるかもしれないが、良いな。大抵することはこいつらの毛並みを整えることと、虎たちに馬鹿をする奴らの監視。それと出来れば薬作りもある程度覚えて欲しい。」

「ハイ!!!俺、俺やります!!!」

「翔大が武器を持たないですむように、誰もが武器を持たない世界を目指すぞ。」

「ハイ!!!」

翔大は竜將軍について行くことを決意した
竜將軍について行けばそんな世界が出来るような気がする、いや出来る

竜將軍の考えは人だけではなく生きてる全ての者を平等に見る
誰もが平等な世界、そんな世界を翔大は見たくなった

部下の初仕事（後書き）

たくさんの評価や登録ありがとうございます！！

拍手も設置してみましたので、ご気軽に感想などよろしくお願いします！！

閃の思わぬ苦行

その後？国軍は一度城に戻る事となった

これ以上の連戦は軍の疲弊をきたすと竜將軍が進言したことが理由だ
閃王が率いる？国軍は大軍だ

居城に戻るにはこの軍を移動させるとなると2週間以上はかかる

城に戻るある日の夕方

朝と昼は虎達に王の護衛を任せ、治療に励む竜將軍が王の天幕にや
つてきた

日が沈む頃になると王の護衛に入るのが決まりとなっていた

いつもならある程度手の届くところで護衛をする竜將軍が一メートル以上離れた場所に立っている

虎は近づけるのに何故自分の傍に寄ってこない

眉間にしわの寄った閃は

「何故そばに来ない……。それでは護衛に意味がないだろ」

「……おう……ら……」

ポツリと呟いた竜將軍の声を閃は聞き逃さなかった

「ふっ……翔大！！水浴びの用意をしろ！！」

王の命令に外の虎と共にいた翔大に王は命令を発した

翔大はちょうど虎に餌をやっている途中であったがいきなりの命令に、駆けだして水浴びの用意をした

王の天幕に用意されたのは成人男性がゆったりと入れるような浴槽に並々と入ったお湯

寝台の前に置かれた浴槽の四方を囲むように衝立も用意された

「陛下用意が出来ました」

竜將軍が閃に声をかけると寝台から立ち上がって、竜將軍の方に近づいてくる

竜將軍はあることを気にして離れようとするが、閃の方が早かった伸びた手が竜將軍の腕を掴み、もう片方の手が仮面の紐を引っ張ってシュルリととけた

仮面が外れると戦場にふさわしくない幼げな表情の神樂が顔が見える

「神樂・・・入りたかったんだろう・・・風呂に」

「!!!!!!」

息をのむ思いだった。ポツリと呟いた言葉はきちんと閃の耳に届いていた

医師として衛生面に気をつけなければいけないが、女であることを隠している竜將軍である神樂は他の兵と一緒に水浴びをするわけにもいけない

兵に隠れて布で体を拭くことを出来るが、時間をかけるわけにもいかず、簡単にしか拭くことが出来ない

それゆえ体が臭うのではと思い、少し離れて閃の護衛をしていたそれに気づいた閃は浴槽の用意をした

とれた仮面を閃は顔に付け

「今は俺が竜將軍だ。お前が俺の守るべき王、閃王だ。気兼ねせず

にゆっくり入れ。」

「・・・閃。」

「早くしろ。お湯が冷めるだろう」

「ありがとう。」

衝立の後ろに走って向かった神楽を閃は仮面越しに見送った

唯一その場にいることを許された虎だけがキョトンと仮面を付けた

閃の傍によってきた

「今は俺が竜將軍だ。大人しくしているよ」

閃の言うことが分かったのか虎はガウッと鳴いて閃の傍で横たわった

186

閃は苦行を強いられていた

衝立越しに聞こえるパサリと落ちる衣の音、ポチャンと聞こえる水の跳ねる音

全ての音が閃の欲望に反応した

一応ではあるが閃も歴とした成人男性で、それなりの欲望も持ち合わせている

ましてや愛して止まない人の艶めかしい音
想像するなと言う方が問題だ

据え膳食らわねば何とやらだが、神楽の心を手に入れてからではなければ意味がない

もしここで神楽を奪えば確実に神楽は自分の元を去りかねない
その恐怖だけが閃を欲望に勝たせていた

「閃・・・その・・・ありがとう・・・」

衝立から顔を出した神楽の顔は湯に当たって真っ赤になっている

「・・・そうかそれなら良かった。俺も入るから・・・外にいてくれ」

「何を言っている！きちんと護衛をしないと！」

「た、頼むから少しだけ外にいてくれ」

神楽の顔を見れない閃はいそいそと衝立の裏へと逃げていった

神楽は手に残された仮面を顔に付けると衝立の前に陣取った

仮面を付けた以上竜將軍として職務を全うしなければいけない

竜將軍は閃が風呂から上がるまで護衛を全うした

それから城に帰り着くまで閃の苦行は続いた

閃の思わぬ苦行（後書き）

ここまでお読みくださりありがとうございますと申し上げます。

再戦！！

城まであと少しとなったある日のこと

竜將軍は翔大と共に虎の餌をやるため陣の中を歩いていた

「お！！！！いたいた！！竜將軍！！！！」

呼び止められる声に振り返ると副官をつれた李將軍が歩いてくる

「李將軍。」

「やっと見つけたぜ。つたく、治療室だと阿宗將軍に追い出されるし、夕方いくと王の天幕だし見つけるの大変だったんだぞ」

李將軍は何気なしに話しかけてくるがその周りの副官は竜將軍を睨みつけている

「あの後は大丈夫でしたか？」

「キサマ！！！！」

「ふざけるな！あのような無礼！」

あの戦いの後李將軍の治療を阿宗將軍に任せていたので、その後を知りたくて聞いてみたが、副官が噛み付いた
今にも飛びかかりそんな副官達を

「黙れ！」

李將軍の聲に副官達は後ろに下がったが手は劍に触れている

「ったく。すまねえな。部下は海賊上がりが多いんだ。血の気が多
くてな。すぐ喧嘩しちまう。まあ、俺もそうだけどな。」

カツカツカツと笑う李將軍

「それでよう。手治ったか？」

包帯に覆われた左手を見つめてくる

「傷はふさがった。開かないように包帯をしているだけだ。いつで
も戦えます。」

「そりゃあ良かった！再戦だ！まさか、劍術じゃなくて、体術でく
ると思つてなかったからな。あん時は油断したが次はやられはしな
い。」

「それを言うなら、あなたこそ、手を抜いたではありませんか。」

「なんのことだ？」

「あの時、手に怪我をしていたから同じ突きしか繰り出さなかつた
のでしょう？あなたほどの方が同じ相手に同じ技を最初に出すとは
思えない。手を抜いていたことは確実です。」

「確かに。あん時は手負いの奴を倒してもつまんねえからな。だが
なあの突きは自信があつたんだぞ。それを簡単に避けるとはなあ。
あんたは強い。だから倒しがいいがある。」

獲物を狙う猛禽類のような李將軍の覇気にブルブルと震える翔大を背に隠して

「では、手合わせをお願いしたい」

真つ向から竜將軍は受けて立った

「ああ！今からいいか？」

「結構です。」

「だったら、こつちだ！」

李將軍に連れられて、副官達と竜將軍と翔大は歩き出した

連れてこられた場所は陣から出た場所だった

雑草が生えた平らな場所で將軍二人は真つ向から向き合った

離れた場所で副官達と翔大、噂を聞きつけた野次馬達が周りを囲んでいた

「でつ、武器は棒でいいのか？」

「殺し合う試合をするわけではないから、これでいい」

棒を前に尽きだし構える竜將軍に応えるように李將軍も剣を構えた

ピリピリした緊張感が包む

お互いに間合いに入る一歩手前でお互いの動きを見つめる

見守る兵士が息をのんだ瞬間

「はっ」

お互いに動いた

竜將軍は剣の刃の部分避け柄の部分に棒の切っ先を向ける

それが分かっていたのか、李將軍は棒を斬りにかかった

それに気づくのが遅れた竜將軍の棒の切っ先は斜めに切り取られた
パサツと落ちた棒の切っ先が二人の間に落ちた

棒は半分以下の長さになり、50センチ程しかない

「負けを認めるか？」

ニヤリと笑う李將軍に副官達も歓声を上げる

勝利を確信しているのか、歓声が大きく上がる

「まだ早い。これでも武器だ。俺に負けを認めさせたいなら、地面に平伏させてみる」

「そう言うと思ったぜ！！」

笑みを浮かべ一気に間合いを詰めた李將軍は剣を振り上げた

それに応えるように竜將軍も懐に飛び込んだ

下から突き上げるように棒の切っ先を向けてくる

普通であれば上段と下段の刀が重なり合うところだが、竜將軍が持つのはただの木の棒

このままでは顔面に刀が当たってします

そのことが李將軍の手を鈍らせた

ガキイイイイン

金属の音が響く

「なっ!!」

「嘘だろ・・・」

ザワザワと野次馬達は見ているものが信じられなかった

李將軍の剣は竜將軍の仮面に当たっている

だが、李將軍の首には竜將軍の棒の切っ先が当てられている

少し刺さっているのか首には血が滲んでいる

「ふっ」

李將軍は笑って剣を退けた

それに合わせて竜將軍の棒も退く

「あははははは!! 負けだ負け!! 強いなあアンタ! 全く負けだ
ぜ」

豪快に笑って竜將軍の背をバシバシと叩く

「な! 李將軍!!」

「そんな! 今のは李將軍の」

「黙れ!! 俺が認めた!! 負けたことを認めただ!! 誰一人とし

て文句は言わせん！！」

不平を言う副官達を李將軍は一喝して、向き合った

「アンタホント強いな。まさか仮面で剣を受け止めるとは思わなかったぜ。それほどまで、命をかけられる存在か？」

「ああ。」

「分かった。だったら、俺はアンタを近衛兵隊長に認めるぜ。」

竜將軍に前に跪き、頭を垂れた

こうして、竜將軍はまた新たな地盤を手に入れた

この李將軍、アホのように見えるが凄腕の船長である

？国の水軍全てを管理する將軍であり、他国でも知れ渡っている

また、剣術の腕なら？国で5本の指にはいるほどの剣術使いである

彼に認められることは並大抵のことではない

彼が認めた以上彼の兵達は竜將軍に忠誠を誓うしかなかった

再戦！！（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

王の凱旋

王都にたどり着いた？ 国軍は王都での凱旋の行進は盛大に行われた
ほぼ全軍無事という状態で紗菊国との和睦、？ 駕国での勝利
国民は熱狂的に王を迎えた

そしてもう一つ国民の目を引いたのが虎に跨る仮面を付けた竜將軍
だった

二頭の虎を引き連れ、一番大きな虎に乗り王の傍を警護する姿は誰
の目にも驚きを与えた

また、人づてに戦いの話はすでに王都に伝わっていた

話は大きくなり、竜將軍を雷を自在に操る竜の化身や山すら動かす
ことの出来る神の化身やその手にかかればどんな病すら治すことが
出来るとまで言われ皆拜むような形で見ていた

王城につき協議の間に多くの平伏した官吏達が王と將軍達を迎えた
王が玉座に足を向けていると

「竜將軍ついて参れ」

普通であれば將軍達は官吏達と同じ下座に座るべきである
しかし王は新参者である竜將軍を上座へと呼んだ

「はっ」

王の一步後ろを歩き、王が玉座に座ると玉座の斜め後ろに立った

「陛下先ずはこの度の戦の勝利おめでとうございます。」

「「「おめでとうございます。」」」

三老の凱長官の声と同時に官吏達は一斉に伏礼し、祝いの言葉を述べた

「そしてそれが戦の勝利の祝い品がその者でしょうか？陛下？」

祝いの言葉に続いて凱長官が新参者に噛み付く

「そうだ。皆に言うておく！この者こそ我が軍を勝利に導いたものだ！私の近衛兵隊長に命じた。」

「初めまして。皆様。私はこの度近衛兵隊長の任を頂きました竜と申します。皆に異論があると思いますが、異論があるならどうぞお受けいたします。」

不敵に口角のあがる竜將軍に不敬だと多くの官吏達が声を上げた

「静まれ！！」

閃王が手を挙げると誰もが静かになった

「この者を近衛兵隊長に推したのは私だと言うことは皆忘れるではない」

「なっ！！陛下は我々を脅されるのですか！」

「脅しはしていない。真実を言ったまでだ。以上だ。」

王は玉座から立ち上がった

その瞬間から官吏達は言い返すことは出来ない

王が協議の間から出るまで頭を上げるわけにはいかない
あげれば不敬罪だ

苦々しい思いで官吏達や將軍達は平伏した

王が出口である扉に向かう中で歩みを止めて振り返った

「そつだ。竜將軍。君に逢わせたい人がいる。我の妻、神樂にだ」

王は言った一言は將軍だけでなく官吏達を震撼させた

「ついでにさ」

「陛下！！お待ちください！！無礼と承知で申し上げます！！それは我々に対する当てつけにございますか！！」

「当てつけではない。信頼に置ける者に我妻を逢わせることの何処が、当てつけとなる。お前達も信頼できる者達なら我が手の内をみせよう。竜將軍ついてこい。」

ただ主である王の命令の下竜將軍はついて行く

嫉妬と憎悪の眼差しが竜將軍に向けていた

翔大は怯えながら付いてくるが、虎と竜將軍は顔を前に向けしつかりと足取りで進む

恥じることは何一つとてない

奪えるものなら奪ってみる程の意気込みがなければ、負けるわけにはいかない

王が・・閃が信頼してくれる以上、その期待に応えたい

それだけが竜將軍の思いだった

後宮の扉の前で翔大と虎たちは入れずに、待つこととなり王と竜將軍は寵妃のいる後宮の最奥の楼閣を目指した

王の凱旋（後書き）

お読みいただきありがとうございます！！

帰ってきた二人だけの空間

楼閣の前では蒼の軍の兵が門番として立っていた

王の姿を見るやすぐさま伏礼をとり扉の前から退いた

伏礼する兵に声をかけることなく

王は懐から鍵を出し、入り口の錠へと差し込む

ガチガチと音を立てて鍵は周り

ギツイイ

鉄のすれる音がして扉が開いた

「行くぞ」

王の先導のまま続いてはいる人影に驚きはしたものの顔を上げるわけにはいかない

扉が閉まって

「なあ・・・今王の他に入っていたよなあ？」

「あり得ない何でまた？」

ただ呆然と閉じられたドアを兵達は見つめるしかなかった

王は階をあがることに歩くスピードが上がる

何かを急くような動きに竜將軍は何も言わずについて行く

最上階の最後の扉で立ち止まった閃は少し乱れた呼吸を落ち着かせるために大きく深呼吸をして最後の鍵を回した

ガチャリと音をたてて開いた扉を押し退け、すぐさま二人で入り込むと急いで閉めた

「ただいま・・・神楽」

扉を閉めたと同時に竜將軍を引き寄せ後頭部にある仮面の紐を引き、神楽に戻し抱きしめた

「神楽・・・神楽・・・神楽・・・」

懺悔のように呟く閃は神楽を力強く抱きしめる

神楽はその閃を抱きしめ返すことも出来ず、ゆっくりと閃が落ち着くまでその背中を優しく叩いた

どれほど時間が経っただろう

抱きしめるだけで動こうとしない閃に誰に見られている訳でもないが、さすがに羞恥心が芽生えてくる

剥がすに剥がされない愛しい人の体温だが、何せ戦帰りで毎日入浴できていたわけではない
匂いというものが気になる

「・・・その・・・閃・・・痛いよ・・・」

抱きしめる力が強いほど嬉しいが離れて欲しいために言った一言に閃は顔面を蒼白にさせて少し離れて神楽の全身を見つめる

「ど、どこか怪我したのか？傷があるのか？何故早く言わない！！」

すぐに治療を！！」

戦でどこか怪我をしたのではと閃は思い、すぐさま扉に駆け出そうとした

「ちよつと！大丈夫！怪我してはいないわ！！大丈夫だから！！」

すぐさま閃のマントを引っ張り歩みを止めさせることに成功した

「本当か！あつ！」

振り返った閃はマントを引っ張る手に包帯が巻かれているのに気づいた

動かなくなった閃が何かを見つめているのに気づいた神楽はその視線の先に自分の左手であることに気づき隠そうとしたが、閃の方が早かった

捕らえられた左手は閃の両手に握られ、ゆつくりと包帯がとられていく

ハラリと落ちた包帯の先にあったのは

閃の手よりは一回り小さな手に一筋の赤い線が出来ていた

「まだ瘡蓋がとれてないところがあるから、一応包帯をしているだけで、大丈夫だから！！包帯は用心の！！！！！！」

神楽はそれ以上何も言えなかった

閃が神楽の手の傷に口づけをしていたのだから……

「こんな傷を残して……。痛かっただろう……」

何度も何度も癒そうとするかのように傷口に口づけする
ピシリと固まった神楽は真っ赤になっただまその光景を見ているし
かなかつた

恥ずかしすぎて何も言えない

あまりに静かな時間が流れたためか、閃は神楽を見つめてきた
その神楽は顔を真っ赤にして固まっていた
その光景に自分が今何をしているのかを把握した閃は

「うーごめん!」

すぐさま手を離して少し離れた

離れてしまうとその口づけの熱が愛おしく思えてしまう

お互いに声が発せずまま、静かな時間が過ぎた

「その・・・神楽。これからは戦はないと思う。いや、戦はさせない。君がここから出る必要など「私は出ます。」

閃の言葉を遮って神楽は叫んだ

「神楽・・・」

「私は、・・・竜將軍に近衛兵隊長になったの。貴方を・・・閃を守るために私は・・・ここを出る!!」

「君は分かっている!!ここが一番安全なのだよ!!ここにいれば君は!!」「私に籠の鳥になれと言っ!!イヤよそんなの!!私は閃の傍にいた!!閃の傍なら戦場でもどんな危ない場所でも閃を守

つてみせる！何も知らずに誰かが死ぬのはイヤ……。義母さんのように何も出来ずに……。誰かが死ぬのはイヤ……」

神楽が零す涙に閃は冷静さを取り戻してきた

そうだった……。神楽は知らないところで柳燕さんが死んでしまった……。俺が傍にいないと、一人にされると思っているんだ……。ポロポロと涙をこぼす神楽はすでに大切な家族を2度も失い、夫である自分しか残されていない

閃は空いていた空間を埋め神楽を抱きしめた

「分かった……。分かったよ……。傍にいる……。俺の目の付く傍にいればいい……。守ってくれよ……。愛しい人……」

泣く神楽を抱きしめて優しく慰める

……。今はこのままでいい……。神楽が必要としてくれる……。それだけで十分だ……。もし……。神楽を傷つけるような者が現れるなら……。俺が排除すればいい……。俺が……。俺がお前を守ってみせる……。何に変えてもお前だけを守っていいこう……

やっと戻ってきた二人だけの空間でお互いの存在意義を抱き合って確かめ合っていた

帰ってきた二人だけの空間（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

たくさんのお評価やお気に入り登録ありがとうございます。

竜將軍VS三老？

王城ではそれは不思議なことが続いた

仮面を付けた少年と思わしき竜將軍が城中を駆け回っていた

色々な部署を訪ねては何をするわけでもなくただじいーっと見つめ半刻ほど立ったまま動かない

その傍では一匹の虎が欠伸して横になっている

誰か声をかけるべきなのかも知れないが虎が怖くて声がかけれないましてや何故この場所に来たのかも分からないのに声がかけれない

「あ・・・あの・・・」

下官である官吏が上司の命令で震えるお盆にお茶をのせ腰が退けた状態で話しかけてきた

ただ動くまでも仮面の奥で瞳だけが動いた

それに反応するかのように虎も立ち上がる

「ひいっ」

今すぐにも逃げ出しそうな下官に

「ありがとう。頂こう。」

すっと伸ばされた腕は零れて濡れている茶器を掴み

ゴクリと一口で飲み干し、またお盆に返した

「うまい茶であった。また寄らせて貰う。失礼する。いくぞ。」

一礼をして、扉へと歩みを進める竜將軍に官吏の誰もが

「……何しにきたんだ……？」

と呟いた

ガチャリ

「失礼します。」

王の執務室に許可も取らず入った竜將軍を迎えたのは
王と三老と呼ばれるこの国の王の次の権力者達と虎が出迎えた
王の傍にいた虎は立ち上がり竜將軍にすり寄ってくる。
猫のような仕草に竜將軍はその頭を撫でて

「警護ありがとう。翔大にご飯を買ってこい。」

竜將軍に言葉が分かるのか先ほどから付いてきていた虎と二匹で扉
から出て行った

二匹が出て行くのを確認してこちらを見つめてくる視線を真っ正面
から受け止めた

「これはこれは、ちょうど良いところにお見えになった。この案件
について近衛兵隊長様にご意見を頂こう」

三老の一人、張長官が書簡を抱えながら嫌な笑みを浮かべる

「その件については、先ほど言ったように「陛下。申し訳ありません

んが、それでは他の者達から反感を買います。」

「確かに、陛下の意見を一理あると思いますが、これ以上財務の負担はこの国の疲弊に繋がります。」

三老全員から猛反発を受けた王は苦い顔をしていた

「私で良ければお聞きしたい。どのような案件でしょうか？」

すぐさま陛下の傍に歩み寄る

竜將軍VS三老？（後書き）

お久しぶりの更新です。

ちょっと長くなりそうなので二つに分けます。

お読みいただきありがとうございます！……！

竜將軍VS三老？

「ではでは。この？国での失業率の高さについてです。戦が続いたため怪我をした者の多くが職に就けず、またそれが一家の大黒柱であるため一家の破綻に繋がっています。幼い子供が一家を養っている場合もあります。あなたの部下と同様な状態です。この問題についてはどうお考えでしょうか？」

難題と分かる質問を一気にまくし立てるように話し、礼をとって笑みを浮かべる顔を隠す

「竜將軍ともあるう方ならこの問題をすぐさま解決出来るでしょうね？」

それに続けとばかりに残り二人も言うてくる

その雰囲気は明らかに竜將軍を馬鹿にした態度であった
平民上がりのキサマにこのような問題が解けるものかと、恥をさらせとばかりに三老達は詰め寄った

手を顎に置き、数分考えを巡らせた竜將軍は口を開き、

「・・・確かにそれについては難しい問題です。・・・怪我をしている者達をお預かりしてもよろしいでしょうか？それと、出来れば学校を作っただけでいいでしょうか？」

「兵達をどうするつもりだ？ましてや学校など！その予算など何処から出るのだ！！」

「兵につきましては仕事を与えます。世の中には多くの仕事があり

ます。一人では出来ないのなら複数で力を合わせて一つのことをさせればよい。賃金は少し安くりますが、安定した賃金が入ればよいでしょう。それと学校につきましては、この国を根底から栄えさせるためには子供達を育てなければいけません。予算は考えがありません。」

「その子供達が働いているのだ。誰が学校に行かせるものか！」

「そつだ！ましてや何を教える！」

「子供の性分は学ぶことです。学校にきた者は少しの賃金を与えます。そして、成績優秀者には官吏への道を与えます。学ばせることは語学と算数を中心に学ばせます。その後には医療、薬学、経済などの方面を学ばせる。」

「話にならない。その様なことが誰が教える！それに官吏には貴族の子息がなる者と決まっておる。」

「そつだ。平民が官吏など、平民は農村で畑を耕しておればよいのだ」

「では、私は何なのでしょう。私も元は平民の出です。ですが、今は竜將軍として近衛兵隊長の地位にいます。ただ、機会を与えるだけですよ。伸びる伸びないはその者次第。」

「話にならない！！平民など我々の言うとおりに動いておればよいのだ！！キサマを竜將軍と認めた覚えはない！！」

立ち上がって竜將軍を指さした三老達に

「では何故！私にこの問題を出された！！竜將軍と声をかけた時点であなた方は私を近衛兵隊長、竜將軍と認めているではないか！！私がただ王の慈悲によってこの地位を得たと思うのか！！武力だけではなく、知略でもこの国を支えたい。そのためにこの地位に就いた以上この責任を果たさなければいけない！！あなた方がそうやって人を見下している限りこの国は変わらない！！根底から変えようと思わない限りこの国は衰退する！！才能ある者は活用する！！この国のために！！あなた方はそれをしないのか！！」

ダンつと机を叩いて一気にまくし立てた竜將軍の覇気は三老を黙らせた

明らかに竜將軍の物の考え方はここにいる三老とは違っていた
貴族である以上誰からも礼をとられることが当たり前
貴族である以上平民などただの使い勝手の良い駒と同じ

見下し、自分たちが使う駒のような物だと思っていたが、確かにここにいる竜將軍は平民からのし上がり王の信頼を得て近衛兵隊長という軍の中で最高の榮譽を持っている。

自分たちが見下すべき駒の存在が自分たち三老より遥かに大きな存在となりその存在は日を増すごとに大きくなっている

脅威とも言える存在に三老達も反感を覚えるが何故か、この国を思う竜將軍の姿が眩しく感じられた

昔自分たちもこの国を支えたくて官吏を目指していた
だが、多くの暗躍や裏工作に煌びやかな世界の裏を見てしまうとその希望はいつの間にか消え去っていた

忘れていた夢や希望を竜將軍は掲げてこの国の権力者には向かっている
いる

いやこの国と向き合っている

人ではなくこの？国という大きな大国を変えようと立ち向かっている

自分より若き者が国を思い、行動を起こりつつとっている

竜將軍VS三老？（後書き）

あれ？何故か長くなって3話に分かれました。

一応今度で三老との知恵勝負は終わります。

これである程度、竜將軍の地盤が出来てきます。

ここまでお読みいただき、ありがとうございます。
感想などございましたらよろしく願います。

竜將軍VS三老？

「・・・わかりました・・・。あなたがそこまで言うのならばやってみなさい。」

「凱長官！！何を！！！」

「張長官、燕長官。やらせてみようではないか。だが、一度だけだ。成果が出せないならば、すぐにでも貴方はこの城から出て行くって貰うことになります。よろしいですか？」

「はい。全力で当たります。機会を頂きありがとうございます。」
腰を90度に曲げて頭を下げる竜將軍に無謀だと思いが、忘れていた希望を見いだせるような気がした

「だが、凱長官。予算はどうする？」

「そつだ！そんな予算はこの国にはない！」

「あります。」

あたふたと異議を唱える張長官と燕長官に向き合いきっぱりと言った

「何処にあるというのだ！！」

「ここ数日各部署を巡っていました。あることがどうしても気にな

ったので・・・」

「何があつたのだ？竜將軍」

今まで忘れ去られた王の声に誰もが王に目を向けた

「陛下。証拠がなかつたのでお知らせするのが遅くなりました。神樂様のことです。」

「！！！！神樂だと！！何があつたというのだ竜將軍！」

声を荒げた王には怒気が含まれていた

「陛下。神樂様の衣装は城にあがつてから月に1着ほど王から送られてしていると聞きました。しかし、その予算が異常に高いのです。衣装代が神樂様の好まれる衣装の20着分以上あり、神樂様がお悩みになっていました。質素儉約を好かれる方なのに、悲しまれておりました。そこで何にそこまで費用が使われているのかを調べてみますと、明らかに衣装とは関係のない物を買われていたり、1着しか貰っていないはずなのに、10着分になっていたりなど、どうも戸部の者達は計算が苦手なようです。」

「戸部か！！あいつら！！」

「陛下も陛下です。例え寵妃様であろうと、今は儉約をすべき時。寵妃様の衣装は質素に控えるべきと思います。」

今にも戸部に殴り込みに行きそうな王を止めて、竜將軍は言い放つ

神楽の名に反応した王は竜將軍を見ながら自信無さそうに

「神楽がそう望んでいるのか……」

「はい陛下。」

「はあく。分かった。お前に神楽の衣装を見繕って欲しい。決めたらもってこい。」

溜息をつきゆっくりと椅子に座る王に三老達は呆然としたアレだけの怒気を見せつけられながら涼しげに王を止めた冷静さを取り戻させて、椅子にまで座らせた

「」「王の調教師だ！」「」

三老の誰もがそう思ってしまった

その後、戸部には監査が入り神楽の衣装代を横領していた者は捕らえられ、全額の返済と官吏としての地位剥奪に家も取りつぶされた

都では王の寵妃の金を盗んで王の逆鱗に触れたと噂を呼んだ王の寵妃への熱愛ぶりと寵妃の我が侷ぶりが王都では噂となった

竜將軍VS三老？（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

評価やお気に入り登録ありがとうございます！！

竜の試練〜竜の智を知らしめよう？

神楽の衣装代の削減により、竜將軍の計画道理に王都に学校が作られる事になった

学校を作るために集められた者達は戦争で怪我を負った者達が優先的に雇われた

王城に集められてその者達は最初は不平不満を言っていた。

賃金が普通の5分の3ほどにしか与えられないことや周りの者達の差別の目や人生の絶望など今まで国が助けてくれなかったのに今更何をするのだと、声をあげていた

かっかっかっかっかっ

石段を歩く音に誰もが振り返ると竜將軍が真っ直ぐに歩いてくる怪我をしている者達の前を歩き、中央でとまって振り返った

「おはよう諸君。今から君たちには仕事をして貰う。」

そこに集まった千人を超える者達に向かって竜將軍は声を張り上げた
ただ呆然と見つめていた者達だったが沸々と怒りがこみ上げてきて

「何が仕事だ!!!こんな賃金で働けるか!!!」

「そうだそうだ!!!ましてや俺には両腕がない!!!それでどうやって働けと!!!」

「俺は足が無い!!!何をしろって言うんだ!!!」

「こんな惨めな思いをさせるために俺たちを呼んだのかよ!!」

「ふざけるな!! 官吏様達が俺たちに何をやってくれた!! 戦いで傷ついてもそのまま放置!! どうやって生きていけと言っただ!!」

暴動のようになった者達をただ静かに竜將軍は見つめた

1カ所での発言はどんどん大きくなり一人また一人と大声を上げて怒りを露わにした

その声は地面を揺らし、空気を震わせた

竜將軍の傍にいる虎ですら2、3歩後退してしまっほどの覇気に竜將軍は笑みを浮かべた

その笑みに気づいた者達が声を荒げるのを止めた
皆も何だと何だと声を静めた

「聞けえええ!!!」

一喝する声にざわついていた広場は一瞬で静かになった

「よいか!! ここに集まりし者達よ!! 今までそなた達は多くの戦場で武功をあげてきただろう!! だが怪我により、多くのモノを失った。そなた達はこの国にとって宝だ。この国を支えた者達だ。出来ることならまた力を貸して欲しい!! 残されたそなた達の体でこの国の再建に力を貸してくれ!! 残された腕や足はただの飾りではなく使って欲しい! 残された頭はただ絶望だけを見つめないで欲しい!! 考えよ!! 残された体の一部を使って生きていくことを!! そして一人ではないことを!! 皆が力を合わせこの国を根底から変える場所を作っていこう!! 争いのない世界を目指し、子供達が武器

を持つことのない世界を目指すために、皆の力がある！！力を貸してくれ！！」

地響きのような衝撃であった

竜將軍が軍の最高トップが兵に向かって頭を下げた

周りから白い目で見られ世間から見向きもされなかった自分たちに真っ向から向き合って言葉を投げつけてくる竜將軍に誰一人として声が上げられなかった

「・・・將軍・・・竜將軍！！！！」

どこかで声が上がった

それに繋がるように拍手や將軍の名が飛び交う

まだ自分たちを必要としてくれる、働き場所がある

真っ向から向き合ってくれる竜將軍に誰もが必要とされる未来を見た

竜の試練〜竜の智を知らしめよう？（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

竜の試練〜竜の智を知らしめよう？

竜將軍がまず行ったことは土木知識のある者を集め監督者とした
そして、3人で一つの作業を行えるように流れを作った

三人で木を切ったり、煉瓦を作ったり慣れてくれば一人でもやらせてみる

一人で行う場合は、出来上がった物は検査され合格すれば賃金が上がる

それを目指して少しずつだが兵達の士気は上がっていた

「ここはこうでしょうか？」

「イヤそれはこうではない。あまり水をやりすぎると腐る可能性があるから、適度でよい」

王の執務室では王の執務台の隣に作られて竜將軍の机が作られた

そこでは王よりも断然に多い資料が乗せられているが、それは長く机の上に止まることはなく竜將軍が一目見るとすぐさま官吏達の手
に渡り持つて行かれる

竜將軍は学校作りだけではなく薬草作りにも力を入れた

これからまた戦が起きる可能性がある

薬草の不足は多くの犠牲を生むことになる

本当であれば戦がない方がいいに決まっているが、隣国の国家が不
穏な動きをしていた

いつ戦いが起きるか分からない状態であった

そのため薬草作りは急いで作られた

その甲斐あつて薬草の確保と医療の技術は高くなっていた
それがさらなる官吏達の関心をよんだ

日に日に竜將軍の元に来る書簡の量は増えていた

薬草や建物建築の書簡ではない

外交に関する書簡、経済対策に関する書簡、国の治安に対する書簡など分野は様々である

だがどの分野にも竜將軍はすぐさま指示を出し、すぐさま行動に移していたため少しづつであったが景気は向上していた

土木建築で働いている兵は王都でも白い目で見られることはなく、逆に丁重に扱われるようになった

それからさらに竜將軍の噂は王都中で広まった

あの冷徹の王を止めることが出来、行動力、医療の技術、誰隔てなく接する包容力にこの国を変える竜の化身として民の間で好感度が鰻登りのごとくあがっていた

竜の試練〜竜の智を知らしめよう？（後書き）

今回被災に会われた方にはお見舞い申し上げます。
一刻も早い復旧を願っております。

知らぬまの敵

そんな噂をよく思わない者達もいた

太陽が沈み闇が王都を包み込んだ

上級官吏達が住む住宅地で静まりかえったとある屋敷内部である部屋から光が漏れていた

真ん中に置かれた蝋燭が部屋を明るく照らす

「ちくしょ!!!何故俺があんな辺境の地に赴任なのだ!!!」

大柄の男が酒の入った器を投げ捨てながら声を荒げた
それを静観するように静かに酒に口を付ける

「あの化け物がきてから!!!イヤ違う!!!あの男が王座に就いてからだ!!!何故俺が!!!」

立ち上がった男はイライラしながら部屋の中を動き始めた

「.....落ち着け.....」

「落ち着けと!!!お前達はいいいよな!!!王宮に残れるのだからな!!!はん!お前達もどうせすぐさまどこかに飛ばされるのだろっとな!!!ざまあみろ」

狂ったようにわめき散らす男に静観していた男達は確かに思い当たる節があるため反論できない

「にしても.....何故化け物は王を手なずけたのだ?」

「はん！体でも使ったんだろう！！死体好みは稚児好みか！！ふざけた野郎だ！！」

「・・・しかし、この頃の王の動きが大人しすぎる・・・」

「確かに、今のところあの化け物が前面に出てきて王の動きが全く分からない。」

「あの王に何が出来る！！全てあの化け物が王の権限を奪うのだ！！そしたら俺たちのしてることは全て水の泡だ！！」

「確かに。あの化け物はある意味手強い。何とか懐柔したいが全く隙を見せない。ほとんど王の傍か白の將軍の傍だ。」

「全くだ。住まいもどこか分からない以上手だてがない。ましてや何度暗殺に失敗している。」

「5回だ。毒を含んだ茶を飲ませてもピンピンしてるし、暗殺者も向かわせたが返り討ちだ。それも今じゃ化け物の下で働いている。」

「はははは！！寝首をかかれるとはまさにこのことだな！！」

「少し黙ったらどうなんだ、？おごつ朱！！」

「黙れだと！！誰があの王を捜してきたと思う！！俺が見つけた俺が裏から王宮を乗っ取る予定だったのに！！ちくしょ！！」

「・・・今は時を待とう。あの化け物と王が離れたときこそ我々の反逆のチャンスだ！！」

「ああ何としても！！彼奴らを引きづり降ろす！！」

決意を新たに男達の話は進む

闇は全て隠し、増悪を膨らませる

王と竜將軍の知らぬ間に・・・

一時の別離？

その時はまさにすぐそこまでやって来ていた
次の日の朝議の間で早馬の情報が飛び込んできた

「申し上げます！！？ 駕国、憲国、源国の三カ国同盟軍が紗荀国に
攻撃を仕掛け、？ 国国境まで攻めてきております！！！ 紗荀国では
多くの死者や被害が出ております。？ 国の侵略も時間の問題です！
！」

息も絶え絶えに話す使者に朝議の間は騒然とした

「なんと言うことだ！！！ 三カ国同時攻撃だと！！！」

「一カ国でも大変だというのに、三カ国と戦えと……」

「そんな余力は？ 国にはないぞ……」

官吏達はお互いに顔を見合わせ戦いの勝ち目がないことに慌てふた
めく

王は玉座からただそれを見つめる

どうすべきなのか、すでに答えは出ている

最も己が出したくない答えがすでにある

ギリリと握った拳の骨が鳴る

その光景を見ていた竜將軍は王が出した答えが分かっていた

カツンと靴の鳴る音が響いた

官吏達がふと、王に目を向けると

王の前に跪き両手を合わせ頭を垂れる竜將軍がいた

「陛下。」命令を。その命令があれば全力を持ってその命に応えましょう。」

ざわついた中で竜將軍の声が響く
無表情な閃からは何の感情も読み取れはしないが、その心うちは激しかった

今のこの王都の状態はやつと回復に向かいだした状態だ

今から戦闘となると別の將軍に任せてもいいが、三カ国という大軍相手では？国軍全軍で当たらなければいけない

それほど軍の指揮を任せられる者は王もしくはそれに並ぶ人物でなければならぬ

だが、王はやつと回復し始めた状況を見放すことは出来ない

王の判決があることが多くあり、王が戦に行けばその採決がさらに遅くなる

ならば王に並ぶ存在・・・將軍達のトップに立つ者・・・

「竜將軍・・・」

「お任せください。」

ポツリと呟く言葉に竜將軍は安心させるように口角をあげて笑みを浮かべる

王は一度目をつぶり考える

今から言う言葉は身を裂かれるより辛い言葉だ・・・
大きく息を吐き出し、目を開け

「竜將軍。全軍を率いて敵軍の進行を阻止せよ。刃向かうような」とあれば、二度と攻め入られぬようにしてやれ。」

「王命のままに」

深く頭を下げた竜將軍は立ち上がり官吏達と將軍のいる方に目を向けた

「すぐさま、戦の準備を始めよ。出立は二日後の早朝。早馬を飛ばして敵の位置に軍の規模、向かう先を知らせよ！！副官達はすぐさま行動を！將軍達は集まってくれ！！」

歩き出した竜將軍に他の將軍達も続いた

ざわついた朝議の間を抜け出し戦の準備に取りかかった

一時の別離？

すぐさま動き出した軍に食料や医薬品に武器などさまざまな物が動き始めた

夜通しに竜將軍は準備に追われた

日が沈み一度は後宮に戻って王に会うべきかと思ったが、次々に舞い込む書簡や軍についての報告に時間がとられいつの間にか朝を迎えていた

朝になっても竜將軍に時間はなかった

学校建築の途中は全て作業している者達に任せ、治療中の患者に対しては城に残る阿宗医師の副官達に事細かな指示を出し、一日中駆け回っていた

夕方になって王から朝議の間に来るように伝達があった

竜將軍が慌てて向かうとそこにはすでに集まっていた將軍達や官吏達がいた

「ここまで来い」

王の声に玉座に向かう赤い絨毯の上を歩く

昨日ぶりにあった閃の表情はやつれたように思える

心がズキリと痛み、それでも前に出す足を止めずに歩く
王の前につくと膝をつき頭を垂れた

「そなたに全軍を任せる上でこれをそなたに与えたい。」

王の言葉と同時に官吏達が頭を垂れた状態で何かを運んできた

「先ずはこれを・・・」

ばさりと広げられた真っ赤な旗は黄金の竜が刺繍されていた
鮮やかな朱に浮かび上がる竜は剣を持っている

「それとこれも・・・」

次に差し出したのはこの間使った王の宝剣だった

「!?!」

「我が軍を任せる者にはそれにふさわしい物を渡しておく。何が何でも勝利しろ」

剣と旗を差し出す王に竜將軍は震える手で受け取り

「? 国に勝利を!?!」

その言葉と同時に深く頭を下げた

そのまま座を辞した竜將軍は旗を翔大に渡して後宮を目指した
王の傍にいて見てしまった

閃の真っ黒な瞳が孤独を映していた

寂しい、悲しいと叫び声を上げていた

一刻も早く閃の傍に行きたくて残っている仕事は全て終えて、後は
他の者でも任せられる仕事だったので全て押しつけてきた
早足から駆け足になりその後全力で走った

腰に差した宝剣がガチャガチャとなる

寵妃のいる楼閣では門番の兵はおらず入り口の扉が開いていた
すぐさま入り口に身を滑り込ませて、中から施錠する
階段を上っては鍵の開いた扉を開けて施錠を繰り返して
最後の扉を開けた

バンと静寂を破って扉を開いた大きな音がする

部屋の中は真っ暗でいつもであれば灯される蠟燭の灯りがない
だが人の気配がする

真っ暗な闇の中、人の気配のある方に足を向ける

手探りでゆっくりと前に進む

ヒヤリと後ろから人の気配を感じた瞬間視界がクリアになった
頭部の仮面の紐が外され、カツンと音を立て床に仮面が落ちた
振り返る間もなく後ろから閃が力強く抱きしめてきた

神楽の肩に頭を乗せ骨が軋むほど腹部に回った腕に力が入る

「・・・神楽・・・神楽・・・行かないでくれ・・・」

耳元で聞こえる泣きそうな声に腹部に回された腕を優しく振れる

「・・・閃・・・顔が見えないわ・・・顔を見せて・・・」

神楽の声が聞こえたのか腕の力が緩むと共に神楽の視界は180度
代わり閃の泣きそうな顔が見えた

抱きしめてくる手は神楽の顔を見た瞬間からまた強くなる

神楽も手を回して閃の背をゆっくりと叩く

「行かないでくれ・・・傍にいてくれ・・・」

「閃・・・それはダメだよ・・・。分かっているでしょう」

「分かりたくない！！何故神楽が行かないといけない！！イヤ、分かっているんだ！！だが・・・イヤ、国なんてどうでもいい！！神楽がいれば「それ以上言ってはダメよ」

閃の唇に指を当て言葉を遮る

それ以上は王としては言ってはいけない神楽は必死に止めた

「閃必ず帰ってきます。私が貴方との約束を破ったことがありますか？」

閃は一度考えて首を振る

いつどんな時でも神楽は閃の傍にいて傍にいたことが当たり前だった約束もずっと守ってきた

「だったら、私を信じて。貴方を守るためなら私は怖くない。」

「神楽！！」

閃の力強い抱擁を日が昇るまで受けた

神楽もこの時がずっと続いて欲しいと思った

だが、進むべき時間はきた

月が沈み逆の方角からうつすらと明るくなる

寝台に移動した二人は横になり抱き合っていた

「閃……行かないと……」

ビクンと反応する閃が置いて行かれる幼子の表情をしていた
最後にもう一度抱きしめた閃はゆっくりと立ち上がり

「先に行ってくれ……後で朝議の間に行く……」

「分かったわ。閃。大丈夫。戻ってきますから」

ボタンと閉めた最後に「神楽」と呟く閃の声が聞こえたような気が
した

一時の別離？

薄明かりの中、王城の中央門では大軍が整列していた
歩兵部隊に騎馬軍、弓部隊になど様々な部隊が列をなしていた
その部隊の戦闘には各部隊の旗がなびいていた
各部隊の色の旗は存在を見せつけるような威圧感がある

その中で異様に目立つのが竜將軍の真っ赤な布地に黄金の竜だ
バサリと風に揺れる旗は多くの者の目を引いた

「大丈夫か翔大？」

竜將軍が声をかけると翔大はヨロヨロとしながら旗を必死に支えている

任された旗は軍最高の軍旗

国旗とも同等の意味がある旗だ

持つ手が震えてしまう

十代の少年が持つには荷が重すぎるが、竜將軍はわざとその旗を任せた

「翔大。重いか？」

「い、いえ・・・はい」

「どっちだ？ふふつ、その旗は色んな意味で重いかもしれん。だがなあ、お前は武器を持つな。武器を持たずそれを持って俺の傍におればよい。守ってやる。安心してその旗が倒れることのないようにっ
っかり支えろ。」

「はい！！！」

しっかりと頷いた翔大を確認し

一度王城の正門の櫓にたつ王を見る

ただ見下ろす瞳はここからではよく確認できない

「行つてきます。閃」

誰にも聞こえない程度にポツリと呟き、ひらりと虎の背に乗る

連れて行く虎は2匹。一番体格のいい虎は王の傍にいるように何度も何度も言ってきた

「出立！！！」

竜將軍の声が薄暗い空の中響いた

ゆっくりと進む軍を王は櫓の上から見ていた

竜將軍である神樂が一度こちらを仰ぎ見た

仮面越しに神樂の様子は分からないが、離れていくことが身を裂かれるようだ

いつも傍にいて離れることがなかった二人が離れた

「うまいこといったなあ……」

「ああ。三カ国に情報を伝えただけでこうもよく動いてくれるとはな……」

「竜將軍様にはよくよく敵を足止めして貰いたいものだ・・・」

「ああ。我々のためにな・・・」

柱に陰に隠れて笑う声は二人には聞こえてはいなかった

一時の別離？（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

お気に入り登録、評価など嬉しく思います。

感想などございましたら一言お願いします。

奇策を用いて敵を討て!?

国境は王都から10日ほどの所であった
大軍でありながら強行軍で進んだ

仮面を付けているので無表情と思われがちの竜將軍だが内心ではかなり焦っていた。

王城で過ごす日々で何度となく暗殺者に襲われた

王都の廊下など場所は様々であった

食事にも毒を盛られることは何度もあった

だが、昔から毒は使い方によっては毒にも薬草にもなるとも教えられていたので勉強のためといって毒を少量ではあるが服用していたそれが功をそうしたのか食事に盛られた毒は竜將軍には一切効かなかった

(幸か不幸か分からないな……。早く戻らねば……。陛下に閃に刃が向けられるようなことがあってはいけない……)

握った拳に力を込めて眼前に迫る国境の山に目を向けた

この山は低いながらも森林がよく茂っているため迷いの森と言われるほどの日が地面に届かないほどの暗い森だ

「竜將軍。皆集まりました。」

翔大の声に森から目を反らして將軍達の集まる天幕に足を向けた

バサリと入り口の幕を退けると一斉に向けてくる瞳に真っ向から見合わせて、天幕の奥へと足を向ける

多くの將軍達がいるが若輩者である竜將軍が上座に座るなど苦々しい思いで目を向けるものが多い

「それで調べに行かせて者達の報告は？」

竜將軍の声と共に声をあげたのは紫の將軍、紫伯承^{しよへくせい}。將軍の中では中間管理職的な存在だ。彼は城にいるときに何度か竜將軍に刺客を向かわせていた。彼自身で向かったこともあつたが惨敗に終わった。

「はつ、偵察隊によれば、森中に日が差し込まず薄暗く、山の頂上辺りに三力国合同の陣を引いているようです。」

「敵の大将達は？」

「各国大将がいるようでその中で陣を仕切っているのは源国です。」

「源？確か・・・軍の規模はそれほど大きくはなかつたはずだが、何故この軍が指揮をしている？」

口到手を当てて台に置かれた大きな地図に目を向ける
和紙に描かれた地図には山や川が描かれ軍の規模を表す赤と青の模
型がある

「それは・・・どうもこの戦の仕掛け人は源国のようでした。紗荀国への攻撃は源国が始めに行い圧倒的な強さで勝つたとのこと。紗荀国の軍の位置や武器や食料庫が分かっていたかのような攻撃に紗荀国は為す術なく白旗を揚げたそうです。」

紫將軍の答えを聞きながら竜將軍は考えていた

(武器庫や食料庫などは国の重要な情報を他国が知ることが出来る
だろうか・・・あり得ない・・・。となると・・・情報を売った奴
がいる・・・それも？国の人間だ・・・それも高官レベルだ・・・
厄介なことになった・・・軍の規模はほぼ同数
長期戦になれば情報の漏れている？国が不利になる・・・

どうすべきか・・・)

奇策を用いて敵を討て!?(後書き)

奇策を用いて敵を討て!?

地図を見ながら浮かぶ考えは一つ

正に運を試される一手に決心が鈍ってしまっ

だが王城に残した閃が心配だ

地図から視線をあげて將軍達を見渡す

こちらを品定めするような視線や好奇の視線、心配する視線など様々だが真っ向から向き合った

「この戦い……火を使う」

「ふっ……」

「何か言いたげだな、呂將軍？」

竜將軍の発言に露骨に噴き出した変わり者で有名な黄の將軍、呂鐘元うげんが礼をとっている

「竜將軍。よろしいでしょうか？」

「発言を許可する。言いたいことがあるなら顔を上げてはっきり言え！腹芸は好かん。」

「それでは申し上げます。竜將軍は武芸に秀でているようですが、策略はもう少し慎重になさった方がよろしいですよ。」

「と……」

「はい。風は山から吹いてございます。もし火を使うようなことがあれば火は風下であるこちらに向かってきます。つまり我々の方입니다。お解りですか？」

最後に誇張をしたような言い方に明らかにこちらを馬鹿にしていたが、竜將軍はピクリとも動かなかった

「そのようなことそなたに言われぬとも分かっている。」

「なっ！！！！」

逆に竜將軍から馬鹿にしたような発言に呂將軍は顔をゆがませる

「李將軍！！そなた確か水軍なら天候を読むのがうまいと思うが、どうだ？」

「お、俺かよ！？」

呂將軍と竜將軍の真つ向からの対決にニヤニヤと見つめていた李將軍はいきなり意見を求められて驚きはしたものの

「うーん。確かに今は山側から風が吹いて天候は二、三日乾いた晴れ間が続くと思うぞ。だけどよ・・・」

「そなたは気づいているのだな。西側の空に浮かぶ雲は季節の変わり目の雲か？」

「おおおっ！？気づいてたのか？すつげえな！！あの雲を見分けられるなんてそこの水夫より天候読めるじゃねえかよ！！！」

「話を戻せ李將軍！それで風向きは変わるのか？」

「ああ。変わるぜ！保証する。山に向かって吹く風に変わる。」

「なっ！！」

「まさかそんな！？」

水夫以上に天候が読める人間は軍の中ではなかなかいない

李將軍は特に天候を読むことに優れている

その彼が認めたととなるとざわつく天幕内で確信を得た竜將軍は

「この戦い火を使う。されど森を燃やすわけではない。將軍達に告ぐ、これよりある物を兵達に採ってきてくるように命じてくれ。森なら必ずある物だ。」

ニヤリと口角をあげる竜將軍に歴戦の將軍達も背筋がヒヤリとする

この將軍は一体どれだけの知恵を持っているのか

幼げな風貌でこの迫力、誰もがその魅力に引きつけられた

奇策を用いて敵を討て!?

「これで良いだろうか?」

「足りないだろう。もっと積みよ!」

多くの兵達が森の手前で森から採ってきた木々の枝を積んでいた等間隔に置かれた枝の山は森を囲うかのように何十力所も設置されていた

少し離れた場所で竜將軍と李將軍は用意されている枝を見ながら旗の流れる向きを見ている

「李將軍。あとのくらいで風向きは変わりそうだ?」

「そこまでは分からねえよ。これは運任せだからなあ。」

「そうか。なら、軍のことを任せてよいか?」

「はあ〜????どういうことだよ!??」

「運任せなら、たぶんもう間もなくだ。風は変わる。その時に枝の山に火を付けよ。火が森に飛び移らないように十分気をつける。私は奇襲をかける。」

「奇襲つて!?!一人でかよ?」

「一人じゃない。部下を連れて行く。ついてくるよな?」

足元を見るとじやれるように虎がゴロゴロと鳴いている

「一匹は翔大の傍に置いておく。この子と行ってくる。短時間で戻るから任せるよ。」

「ちよつと待つて!!そんな役目俺にできかよ!!おれ元海賊だぞ?お偉いさん達から見たら罪人と同じだ!誰が俺の命令聞くんだ?」

「だからお前に任せる。私が命じた。お前に命じた。意味は分かるな?」

「!!!」

軍の最高責任者が軍の指示を任せたとすることはその者に信頼を寄せているという意思表示である

王の信頼厚い謎の竜将軍が会って間もない彼に信頼を示した

たとえば彼が軍の將軍職の中で最下位の位であつても最高位が信頼を寄せているとなると李將軍の地位は安定する

「任せたぞ」

ヒラリと虎に跨ると虎の脇腹を蹴った

それを合図に走り出す

李將軍は声をかける間もなくただ礼をとって見送った

それから間もなくのことだった

森から吹く風は止み、不気味な静けさが辺りを支配した

「あいつはこれを予期していたのか?」

「馬鹿な！気候を完璧に読むことなどあり得ぬ！！奴は化け物か！」

「ああ。正に竜の化身かもしれんな。」

將軍達は竜將軍がいない中、軍議をしていた

風が止んだことに將軍達は驚き、またこれから起きることをただ待つしかなかった

「も！！申し上げます！！風が！！風が変わりました！！」

天幕を払いのけて転がるように飛び込んだ伝達兵は顔を蒼白にしながら叫んだ

「竜將軍の命令だ！！火を付けよ！！森に飛び火せぬように気を付ける！！」

李將軍の合図と共に火の手が上がった

黒々とあがった煙は風に流され森の中へ侵入し始める

木々は生い茂り葉によって蓋がされた煙はどんどん山伝いの上っていく

地面を這う雲はどんどん進む

山の頂上を目指して上へ上へと這っていく

奇策を用いて敵を討て!?

「て! 敵襲!」

山の頂上に陣を構えていた三カ国は地を這う煙に慌てていた
櫓の上から? 国軍を見ると多くの火柱があがっている

「風向きは!! 風向きはどうなっている!!」

叫び声を上げる

ヒラヒラと舞う旗は先ほどとは逆を示唆している

「馬鹿な・・風向きが変わるなど!!」

右往左往する軍に声をあげて命令しても、足下にまとわりつく煙に
恐怖した兵達には聞こえない

神楽は顔の仮面を取り顔に土を付けて汚す

敵軍に知り合いはいないとはいえ、いつ何処で何があるか分からない
用心の為に顔に泥を塗って服も汚した

下向き加減で陣の中を駆けていた

目的の旗が掲げられている天幕を見つけるとスルリと後方に回り持
ってきていた刀で少し傷を付けて中の様子を覗う

中では跪いた兵士達が息も絶え絶えに豪華な衣装を纏った小太りな
男に現状を報告していた

「て、敵襲です!! 風向きが変わり奴らは火を使ったもようです!

！森中が煙で覆われています！！」

「兵達は混乱しています！！ご指示を早く！！」

「うづうづうーん！なんと云うことだ……に裏切られたか！！」

小太りが言った言葉に言葉を失った

（まさか……あいつが敵なのか？それでは……急いで戻らなければ！！）

信じられなかったが長居するわけにはいかなくて、勢いよく立ち上がって

「火の手が上がったぞ！！逃げる！！！」

大声を上げて陣の中を走り出した

その声につられるかのように敵の陣の兵達は我先にと逃げ出した

全軍が逃げるまでにそう時間はいらなかった

敵兵がいなくなり先ほどの天幕へと足を向ける

急いで逃げたためか残された書簡が散らばっていた

一つ一つ中身を確認して、先ほどのが会話が聞き間違えではなかったことを画然とした

源国の王の印と黒の將軍、げんいそうたく玄偉宗卓と三老の一人、えん燕官吏の印が押されていた

戦いは続く

？国陣の陣に戻るとすぐさま火を消して將軍達を集めた
天幕内は戦鬪の勝利で浮かれている兵とは違いピリリとした空気が
流れている

「まず皆に先の戦鬪での勝利を礼を言う。特に李將軍。よく軍を動かしてくれた。最適な状態での実行に私も動きやすかった。」

「はっ。ありがとうございます。」

竜將軍の声と同時に李將軍は礼の姿勢をとる

「三力国は国境を越えられず退避したようだが、何処まで下がった？」

「はっ。調べによりますと、紗荀国の城を乗っ取りそこに居城しているもようです。」

「ということは、再度攻め入る可能性があるということか・・・」

「このような子供じみた作戦に負けたと思つた奴らは怒り狂つて攻めはいる可能性があるでしょうね。」

「その可能性は高いだろう玄偉將軍。森は燃えずに残っているのだから。奴らにも騙されたと言つことが分かり逆にこちらを火攻めにする可能性もある。そこで一刻も早く奴らを討つ。」

竜將軍の作戦を子供じみた作戦と評した玄偉將軍は苦々しい目で

睨みつけていた

その睨みでさえあつさりとし流し竜將軍は次の作戦を持ち出した

「国境を越えると言うことですか？それでは紗萄国との国境を越えることになりませぬぞ！！」

「そうです！和平交渉で相手の国境を害をせぬようにという文章があります！！」

「確かに和睦ではいかなる理由があろうと国境を害さぬようにという書面がある。だがその紗萄国の国家的危機にさしかかっている。和睦している以上助ける必要がある。三力国から紗萄国を守るという名目があれば国境を越えても問題はないはずだ。」

異議を唱える將軍達を尻目に竜將軍は淡々と自分の答えを述べ始めた

「次の戦いは夜襲をかける。そこで紅將軍こうそなたの騎馬軍は森の中を全速力で駆けられるほど実力はあるか？」

真つ向から見つめたのは紅凱聯將軍こうがいれん。騎馬軍の將軍で將軍職の中で竜將軍が近衛兵隊長に就くまで次期近衛兵隊長といわれていた人物だ

「我が軍に駆けられぬ場所などありません。」

「その言葉を聞いて安堵した。今すぐ準備をしてくれ。それと降伏を求める文章を作成してくれ。交渉役として私が行く。追って他の指示は出す。一時期の休息の後準備をしておけ！！」

有無を言わずに号令を出し終わると自分の天幕へと足を向けた

戦いの準備

自分の天幕に戻ると翔大が虎たちに食事をさせていた

「あつ！将軍お帰りなさいませ。」

天幕をあげて戻ってきた竜将軍に近づき背中と羽織を脱がすのを手
伝って貰う

だいぶ従者として慣れたのか、私が欲しいものを迷いながらも差し
出してくるようになった

「翔大・・・次は確実に戦場の前線に私は行かなければ行けないだろ
う。お前には「ついて行きます!!」」

「翔大」

竜将軍の羽織を握りしめた翔大は震えながらも真っ向から見つめ返
してきた

「俺、さっきの戦いで竜将軍について行くことが出来ませんでした。
戦うことはイヤだけど・・・俺は・・・竜将軍の部下なんだ！何処ま
でもついて行きます!!しっかりと旗を持ちますから連れてってく
ださい!!」

90度に曲げられた礼に溜息を吐いた

「・・・分かった。だが、絶対に私のそばから離れるな。必ず守る

かな。」

「はい!!！」

満面の笑みを浮かべた翔大に苦々しく口角をあげて

「それより私の羽織を綺麗にしておいてくれよ。」

「えっ・・・あ！あああああ!!！」

力強く握りしめた羽織は無惨にもシワシワになっていた

それからもう間もなくで太陽が傾き空が赤くなり始める頃に騎馬軍の準備は整った

馬上に乗り整列した軍に対して竜將軍は

「そなた達は？国、いやいかなる国の猛者より馬術がうまいと聞く。」

「おう！その通りだ!!！」

兵の中には声をあげて賛同する者もいた
その声にニヤリと笑みを浮かべて

「そうか。では、そなた達には松明片手に敵陣に前方まで走って欲しい。敵陣に着いたら困って威嚇してやれ。あまり近づくなよ！敵の矢的になるかもしれないから！出立は今より一刻の後、戦闘開始は朝日が昇ると同時に攻め入る！ついてこれぬ者はすぐさま馬から下りている!!！」

誰一人として馬から下りないことを確認して

「健闘を祈る！！」

竜將軍の声に唸るような声で兵達は応えた

兵達に背を向けてこちらを試すように見ている紅將軍の傍へと歩みを進める

真つ向から対峙するにはいささか緊張もするが竜將軍自身この紅將軍には絶対的信頼を置いていた

閃が王にたつたとき傍で王を支えたのはこの男だった

「紅將軍、では私は和平交渉に行く。騎馬軍を任せたぞ。」

「お一人で行かれるのですか？」

「部下を連れて行く。単騎の方が動きやすいから、この方がよい。それと、敵軍は必ず降伏させる。それまで攻めはいるのは待ってくれ。太陽が昇るまでで良い。待ってくれ」

「必ずとはどれ程の保証がありますか？」

「我が名にかけて」

意志のあるはつきりとした声に歴戦の将である紅將軍でさえ息をのんだ

「分かりました。ご無事のご帰還お祈り申し上げます。」

「ああ。互いの無事を」

竜將軍は歩き出した

もう一つしなければいけないことがあった

今回の計画で最も重要となる作戦だ

(この計画が成功するかどうかはあやつの忠誠心と私の統率力が問題だ……。でも決めた以上やるしかない……。)

竜將軍は歩みを止めることなく歩兵部隊へと近づいた

「これはこれは竜將軍。もうお発ちになったのかと思っていましたよ。」

隻眼の將軍である黒の將軍玄偉將軍が残された右目で睨みつけてくる黒い羽織を纏い黒の甲冑を纏った姿は黒の將軍にふさわしい風貌だった

こちらを探るように淀んだ瞳は憎悪が含まれている
隠そつともしない感情に相当嫌われているのが分かる
されど、この戦勝つためには歩兵部隊の力が必要だ
意を決してその憎悪に真っ向から向き合った

「玄偉將軍に歩兵部隊の収集は出来ているか？」

「お望みの通り。」

指さされた方には軍の6割を占める歩兵部隊が列をなしていた

「兵の皆よく聞け!!今より騎馬軍が出撃の後、お前達には松明を持って一斉に山を駆け下りて貰う!!」

竜將軍の言葉にざわつきが起こり始めた

「夜の山を駆けるだと!!」

「そんな無茶な!!」

「危険じゃねえかよ!!」

夜の山といえば夜行性の猛禽類が目覚ます時間帯だ

ましてや歩兵部隊は一番下位の兵達からなるためほぼ平民や徴収された農民で構成されている

武人として育ってきたわけではない者達に考えなしとも思える命令に批難があがる

「確かに、夜の森は危険だ。されど皆には松明を与える。それを持って駆け下りて貰いたい。大軍で動けば、森の動物たちも襲っては来ないだろう。それに、敵情前の陣に早く付けた者から褒美を取らす!!制限人数は決めておらんから早く来た者には我が部隊の入隊も考えよう!!」

竜將軍の部隊

近衛兵隊の部隊

軍最高の部隊に軍最下位の自分たちがもしかしたら入れる夢のような話しに兵達は活気づいた

「皆の健闘を祈る!!」

竜將軍の声に兵達は怒濤の声をあげた

「よろしいのか、その様な嘘を並べて?」

「玄偉將軍。私は嘘はつかない。褒美のことは考える。私はただ一

つ勝利を信じて戦うまでだ。それはあなたも同じでしょう?」

仮面越しから見つめると玄偉將軍は苦虫を潰したかのように眉をひそめ、

「軍の用意がありますので失礼。」

そういつてさっさと自分の天幕へと去っていった

「失礼ですね!!玄偉將軍って!!竜將軍あれでよかったですか?」

翔大がシワを伸ばした羽織を抱えてボソリと呟いた

「私はまだ若輩者だ。睨まれることはよくある。されど、王が信頼して軍を任せて貰った以上私はそれに応える。例えどんなに暴言を吐かれようとも認めさせてやる。・・・それより、準備はよいか?いくぞ。」

「はい!!用意は万端です!!」

すり寄ってくる虎の頭を撫でてスルリと跨った

それに見習つように翔大もよじ登って虎の背に跨る

「はっ!」

竜將軍のかけ声と共に二頭の虎は主と従者を乗せて森の中を駆けていった

戦いの準備（後書き）

次の話からちよつと地震に似た表現のある話になります。
時期的にとても書いていて不安になってしまい書くスピードが落ちていました。

未だ震災の傷が癒えぬ今、不適切だと思い少し考えさせてください。
いずれは載せるつもりです。それまでお待ちください。
拙い文章に評価や感想をありがとうございます。

いざ虎穴の中に!!? (前書き)

今回の話しは少しではありますが揺れについての表現があり、この度の震災を思い出されて不快に思われる方がいるかもしれません。気分を害する恐れもありますので、すぐさま戻られることをお勧めします。一切の責任が持てませんのでよろしくお願いいたします。

いざ虎穴の中に!!？

竜將軍と翔大が森を駆け下りた頃にはすでに日は落ちていた
片手に松明を抱えて敵軍がいる城へと虎を走らせた

松明の火に敵軍の城の兵達は慌ただしく

「敵襲!!」

と叫んでいる

矢で威嚇されるもののスルリと避けて

「我ら？国からの使者である!!お目通りを願いたい!!和睦を求めに来た!!」

高らかに叫ぶ声に矢は飛んでくることはなく
ゆっくりと城門が開いた

「翔大、これより本気で覚悟を決める。」

ゴクリと息をのんで

「は・・・はい。」

震える声押し隠してしつかりとした声で応えた翔大に部下の成長
を嬉しく思う

「では行くぞ。はっ」

虎は声と同時に駆けだし開いた城門をスルリと潜った

城門を潜るとあからさまな好奇の目にさらされた

「オイオイあれ誰だ？」

「？国つて子供が兵隊さんなのかよ？」

「虎に乗るなんて一体どんな奴だ？」

「可愛いねえ！！俺たちの夜の相手をしてくれよ！！」

「そつだそつだ！！お偉いさんが終わつたら俺たちの相手してくれよ！！」

小柄な背丈で仮面を纏った竜將軍の格好はまるで將軍達の稚児のよ
うな存在と思つた敵軍の兵達はあからさまに侮蔑の言葉を投げかけた

「あいつら！！」

先ほどのおびえなどはなくして今にも飛び出しそんな翔大を押さえ

「翔大。旗を持って。」

「あつ！はい」

脇に抱えていた棒に巻き付けていた布をクルクルと捲り、竜將軍の
旗印を掲げるとその声は驚きの声に変わった

「なつ！？あれつて？」

「敵大将の旗印じゃ？」

「まさか？敵大将が殴り込み？？」

一触即発の空気を破るように

「道を空けよ！！！」

道が開いた先には高官らしい格好をした武官が部下を引き連れ歩んでくる

「？国の使者とはあなたのことですか？」

「はい。私？国は閃王の近衛兵隊隊長、竜と申します。」

その応えに兵達のざわつきは大きくなる

「静かに！！！」

「？国の使者よ。我らの將軍もあなたにお会いしたいとのこと、ついてこられよ」

囲まれていた人垣は分かれて道を造った

その道を迷うことなく歩き出した

翔大と虎達も習うように抱えた旗を倒さぬように竜將軍の一步後ろ歩んできた

通された場所は城の中枢部なのか大きな窓もなく閉鎖的な空間だただ通ってきた道は城を襲った後の血糊や傷が多くあり、死臭まで漂っていた

「使者をお連れいたしました」

道案内のものが上座に向かって声をあげると好奇心な視線が一斉に向かってくる

「ほうこれはこれは、このような稚児しか？国にはおらぬのか？」
「可愛らしい兵隊さんじゃ」

ニヤニヤと笑う敵軍の将達に嫌気がさすが冷静さを保ちつつ、真っ向から見つめ返した

「夜の来訪を許可いただきありがとうございます。私、？国は近衛兵隊長竜と申します。今回全軍の指揮を任されております。」

「「「なっ!?!」「」「」

「「「こんなガキが!?!」「」「」

あちらこちらから声が上がった

？国の近衛兵隊といえば軍の最高位だ。
それが目の前にいる

ここでこの者を討ち取れば、この戦は勝利と同じ意味をなす
だが、そんな奴をわざわざこの和平交渉に先陣切ってくるだろうか？
答えは否だ

あり得るはずがない。

ここはどうすべきかとここにいる誰もがお互いの顔を見合わせてど
ういう対応をとるかを牽制し合う

(どじやらこちらの思つとおりになっているようだ・・・)

お互いの顔を見合わせた時点で何とかかなりそうだと思えた

「今回参りました訳は、明白かと思いますが降伏を勧めるためです。無駄な血を流したくないため即刻の武力解除を願いました。」

優雅に礼の姿勢のまま言葉と同時に懐から和睦文書を差し出した

「なっ！！ふざけるではないぞ！！何故我々が降伏せねばならぬ！！」

「無駄な戦いが嫌ならそちらが降伏すればよいではないか！！」

「そうだ！！それにそなた一人で我々を脅せると思っていたのか！！！！」

ブルブルと怒りに震えながら叫び出す者

激昂して剣を持ち出す者

その様子を観戦する者

様々な思いで張り詰めた空気が包み込んでゆく

「静かに！！！！」

その空気を破ったのはやはり竜將軍だった

「みなさんは私が何もせずここにやって来たとお思いですか？
これでも一国の軍の将です。自分の意味をしつかりと理解しております。それ故にみなさんに降伏文書を渡す役目を受け持っただけです。それに・・・聞こえませんか？我が軍の足音が？」

仮面から見える口が鮮やかに弧を描く

ドキリと心臓が嫌な音を立てる

「あ、足音だと??」

ズーン……ズーン……

最初は聞き取れるかどうかの小さな音だった

音の出所を探ろうと不安げな声を出した男の傍にあったグラスの水が波紋を広げる

小さな波紋がどんと数を増やしてグラスを揺らし始める
カタカタカタからガタガタと音が大きくなる

独りでにガタガタと揺れて歩き出したコップはテーブルの端まで行き着くと自らテーブルが飛び降りた。

ガシャー——

音を立てて割れたコップは粉々に砕かれ、中の液体も飛び散った
壁の石がギシギシと鳴りだして、灯り火が揺れる

照らされた影が部屋全体に揺れる

揺れは大きくなりこの部屋にいるものの誰もが感じられた

窓もないのにドドドドドドドド部屋全体が揺れる

誰もが机の下に逃げたり、互いに支え合ったりその揺れに抵抗する

「大変です!!!!火が火が迫っています!!!!まるで竜だ!!!!竜が攻めてきます!!!!」

転がり込んでくる伝令兵に竜將軍は笑みを濃くする

「どついう事だ???」

「な、何が起きているというのだ???」

誰もが未だにとまらぬ揺れに顔面を蒼白にさせる

「まずは自分の目で確認したらどうですか？」

全てを知っているかのような竜將軍の声に将達は我先にと部屋から飛び出して外の様子を探りに出た

いざ虎穴の中に！！？厄介な男

「竜、竜將軍大変ですよ！！地震ですよ！！逃げないと！！」

敵兵達が我先にと扉から出て行った後

残された竜將軍と翔大と虎たちは壁から離れて部屋の中央部に待機していた

揺れが未だに収まらないことに翔大は膝に力が入らず倒れそうになつていた

それを何とか傍にいる虎が倒れないように支えていた

「將軍！！逃げないと！！地震ですよ！！」

ボソボソと喋りかけてくる翔大に

「大丈夫。想定内のことだ。翔大は堂々と立つておればよい。後はどうにでもなる。」

竜將軍は未だ残っている敵の将を見ていた

走り去った将達とは違い真っ向からこちらを見ている将は明らかに違っていた

（あの藤の花の紋章は……確か意国の家紋だったはず……王族関係者か？それとも……）

簡素ではあるが白い軍服を纏った20代後半の男だった

軍服には憲国家紋の藤の花が刺繍されている

自国の家紋が記されるとなると王族か相当の位のある者とされている
赤毛の混じった茶色い髪に、じつとこちらの見つめる目は紅の瞳

台に肘を置き口元手両手を交差しているので顔全体は分からないが
端正な顔立ちなのはよく分かる

ただ一切感情のこもらない視線に厄介だと思えた

「私の顔に何かついているだろうか？」

どちらも互いの顔を見ながら先に竜将軍が動いた

「何故仮面を？」

応えるかどうか分からなかったが上体を起こして姿勢を正した
男の声は静かに部屋の中に響いた

「人それぞれ隠したい物があるはずです。私の場合はそれが顔です。
それよりもお名前をお願いします。私はすでに名乗った」

「竜がか？本当の名ではないのだろうか？本当の名は？」

「王から頂いた名です。私にとってそれ以上の名はない。」

「ふううーん……………」

視線を外した男に会話は終わったかに思えた
静かになった空間で

「……………礼音^{れおん}」

地震で揺れる明かりとりの火を見ながら礼音と名乗った男は呟いた

「はっ?」

「だから名。名乗れと言ったから名乗った。」

「姓はないのですか?」

「何故?」

「胸元にある家紋は憲国ものでは?王族またはそれに近いものなのでは?」

「さすが……………でも教えない。お前が隠したように俺も隠す。」

オモチヤを見つけたように笑みを浮かべる礼音にやはり厄介だと思えた

竜將軍は誰に気づかれることもなく溜息を吐いた

いざ虎穴の中に!!?

部屋でそんな事が行われるとも知らず飛び出した敵将達が見たものは、揺れに興奮する兵達が右往左往に逃げ回り地獄絵図だった
だがそれより恐ろしかったのは声だった
大気を振動させる「うおおおおおおお」ッという声が轟いていた
息をのんだ将達は兵達を押しつけて城門の砦に向かった

「ひっ」

「何だあれは!?!」

将達が見たのは暗闇の中に浮かぶ火の竜の姿だった
ゆらゆらと揺れる火は一直線に暗闇の中に浮かび上がりこちらの陣
目指している

その長さは分らない

先ほどの森の陣からは一キロ以上離れている

その森は赤々と内側から燃え、まるで蜷局を巻いていた竜がその身を解いて地を這うかのようにこちらを目指している

その竜が慟哭をあげるかのように声は轟く

その声に兵達は泣き叫び我先にと逃げだそうとしている
だが城門を開ければ化け物が入ってくるかもしれないという恐怖に
味方内部で喧嘩が起きている

命令すべき将達も混乱し、逃げまどっている

圧倒的な勢力を見せつけられて腰を抜かしてしまった将達は我先に

と先ほどの部屋へと駆け戻った

話が終わっていた竜將軍は逃げ戻ってきた将達に優雅に礼をとった

「いかがでしたでしょうか？我が国の竜は？もし戦うというならば竜が敵になりました。降伏なさいませ。でなければ我が牙は、我が爪は全てを葬り去りましょう。」

笑みを浮かべて述べた

その笑みに恐怖を覚えた敵軍の将達はすぐさま頭を垂れた

「我が軍は・・・降伏いたします・・・」

「我らも降伏いたします・・・」

「降伏をお願いします。」

たった一夜にして3カ国は？国の和睦を受け入れた

すぐさま翔大が城外へと飛び出して？国軍にその旨を伝えて朝日が昇ると同時にこの戦いは幕を下ろした

狂った世界（前書き）

閃視点です

狂った世界

その頃の王城では氷河期に突入していた

王都は暖かな日差しのもと、竜將軍の行っていた政務が功をそうして
経済が上向きになってきていた
王都には笑顔が溢れるようになり、人としての温かな町となっ
てきた

それが王城の門を一度潜ると体感温度マイナス10 といえそうな
程寒々しい

その原因を作っているのがこの国の王、閃王だ

外よりさらにマイナス5 寒くなった朝議室ではどの文官も顔面を
蒼白にしていた

「これはどういう事だ？」

閃の一言にまたさらに5度下がりました

言われたものは唇は紫を通り越して黒くなり、歯をガチガチと鳴ら
している

「えっと・・・それにつきましては・・・その・・・えっと・・・」

「答えられぬか・・・。戸部は一体全体何の仕事をしているのだ
？このような莫大な予算の計算間違えを起こして？」

俺が抱えた書簡には先日戸部からあがった予算見積書であった

予算削減を目指していた竜將軍はいらぬ年間予定を削減し、ある程度の目安予算を打ち出してから戦いに出て行っていた
竜將軍の予算見積書と戸部の予算見積書は歴然とした額の差があった
あまりの大きさに王として異議を唱えたら冷や汗どころか脂汗を出しながら戸部の担当は困惑していた

「竜將軍が残した見積書はこの額の3分の2だったはず。いかなる計算をすれば竜將軍の額より多くなると言うのだ？教えて貰いたいものだ。」

「それはその・・・竜將軍は未だ・・・この国内部につきましては
まだよくご存じ無い点がございまして、地方に回すお金や年間予定で少し予算がダンツツツ

「ひいひいひい！！！！」

執務台を叩いた王の顔は冷笑を浮かべていた

（ふざけんな！！！！この肉団子！！神楽は戦いに行く前からずっとこの国について調べていた！！睡眠時間という名の俺との触れあい時間を削ってまで、色々と年間行事や地方での災害についての報告書を読んでた。唯一の俺の癒しの時間を削ってまで、俺のためにしてくれていたこと！！）

口元は笑みなのに目は全く笑っていない
蛇に睨まれた蛙のように脂汗を流す官吏に

「竜將軍はその様なことは知っていた。それを考慮しての金額だったぞ。もし自分の懐に入れていようなら容赦はせんぞ。もう一度考察せよ！！」

放り投げられた書簡はカツンと音を立てて床に落ちた

「か、かしこまりました・・・」

「はあ」

冷気を帯びた溜息が漏れる

ビクリと怯える官吏達はイライラする

神楽が戦いに出向いてから俺の中にいる獣が慟哭をあげて叫んでいる
神楽を求めて叫んでいる

全くと言っていいほど眠れず、食欲もない

時たま入る報告の書簡に神楽の字がある度に恋文を貰ったような嬉しさがこみ上げてくる

逢いたくて逢いたくて今すぐここを抜け出したいくなる

だが、神楽との約束がある

あいつが出した約束を違えるようなことがあってはいけない
神楽を信じるといった時点で、こういう事は分かっていた

世界が色を無くし、極彩色豊かな王城が白黒に見える

ただ目の前に放す官吏達は能面のような人形

ただひたすらに色を与えてくれる、世界に光りを与えてくれる人を
渴望する

ダーーン・・・

広間のドアが開いた

転がり込むように入ってきた伝令兵は

「陛下申し上げます！！竜將軍が率いる？国軍、三カ国を破りて降伏させたの事！！！！詳しいことはこちらを！！！！」

差し出した書簡を握った時点で色が生まれた
極彩色の宮殿に色が戻る

音が戻る

人の表情が戻る

神楽が戻る

バツと広げた書簡には流暢な文字で三カ国の同盟が成り立ったことと軍の損害状態と紗萄国の状態について書かれてあり、どうも何か雲行きがおかしい

さらに読み続けるとたった最後の一文に

「紗萄国の再興のために少し帰郷が遅れるので身辺にご注意なさいますように。」

書簡を持つ手が震えてくる

「ど、どういうことだ!?!?!」

雷のような怒声に誰もが息をのんだ

「何故竜將軍の帰郷が遅くなる!?!?!どういう訳だ!?!」

詰め寄るように伝令兵の首根っこを掴んだ

自分の方が身長が高いために伝令兵は吊された状態で揺さぶられる

「・・・あの・・・あの・・・」

「申さぬか!?!」

「陛下それではその者は申せませう。どうぞ落ち着いてください」

三老の凱長官の声にやっと青ざめている伝令兵が目に入った

「……報告を頼む……」

サツと首元を離すと何度か咳き込んだ伝令兵に少しやり過ぎたと罪悪感を持つ

「……は……い。竜將軍におかれましては同盟国である紗萄国の状況があまりにも悲惨であるために復旧作業に当たられるとのことです。一週間の作業でやれることをするとのことです。」

「……つう。わかった。」

玉座に座って周りを見回す

また色が失われた

極彩色が消え白と黒の世界が始まる

音もなくなり、世界に残されたような気がする

気が狂わんばかりに、叫び声を上げたい

逢いたい逢いたいと叫びたい

それを必死に押さえて

握りしめた手に力を入れて、人形達に言い放つ

「軍部はこの国のために命をかけて戦いに勝った。官吏は何をしておったと笑われること無いように命をかけてこの国のために働け。朝議はこれにて終わりとする。」

裾を翻して部屋から出て行く

誰もが自分を見つめる視線は畏怖だ

別にどうでも言い

どのような視線で見られても、何も感じない

俺に何かを与えるのは神楽、お前だけだ

早く戻ってこい

でなければ、俺は狂ってしまふ

いや、既に狂っている

神楽お前に狂っている

お前が俺の存在意義であり、この世界を作っている
俺の世界に色を音を取り戻してくれ……

敵国の王子

ゾクリと背中に寒気が走った

風邪でも引いたかと思っただが、今ここで休むわけにはいかない
天幕を開けて外に出れば采鷲国の傷ついた兵達が倒れている
数にして数百もの患者に持ってきた薬草も底をつき始めている

ましてや食料も底をついてきている

これだけの軍の規模で長い期間滞在すればそれだけ、金がかかる
だが、三力国が攻めたときに紗荀国はかなりの被害を受けている

まともな治療が受けられず、野ざらしに状態で奴隷のように扱われ
ていた

そこに入った？国はすぐさま紗荀国の解放を行い、傷ついた者達の
治療を始めた

いくら治療を行えど、患者の数は減ることはない
次から次へと来る患者に阿宗將軍の白の軍と連携して医療に当たっ
ていた

眠る暇など無いほど治療に明け暮れ、また外交面に対しても最前線
にたたねばならず、竜將軍の馬車馬のごとく働いていた
食事も運ばれているが食べる気は起きない
眠気も全く来ない

いつの間にか慣れてしまった閃との夜
艶も色もないただ純粹に互いに依存して互いを守ろうと眠る夜にな
れていた

その温もりがないと思うだけで、夜が寒くて眠れない

また悪夢を見そうで、村が焼けた匂い
両親が殺されたときのこと

戦いの中で死んでいった者達のこと
黒々とした何かが身を覆い尽くしそうで怖い

「ふう〜」

人知れず溜息をついてハツとした
バツと後ろに人の気配がして振り向けば人がいた

厄介だと思える奴が・・・

「何かようですか？・・・礼音殿下」

「おやバレたのか？」

暗闇から現れた飄々としたこの男、憊国が第二そご殿下宗礼れおん音

敵国の王子だ

それだけでも間を開けて距離を置きたいのに、こいつにどうも気に入られたようで、何をするにも近寄ってくる

「バレたも何もあなた方の兵が教えてくれましたよ。」

「そうか、もうちょっと遊んでいたかったが・・・」

笑みを浮かべるこの男、どっから見ても優男の王子様といった感じだが、時々みせる獲物を狙う目に厄介だと思える
今もその目で見つめてくる

何もかも見通すような目で見られると自分が女であることがバレる

のでは無いかと不安であるが、今のところ隠し通している

「用がないなら失礼する。」

ここは話しをおって逃げだそうとした矢先に

「食事でもいかがだろうか？」

「はっ？」

「食事に誘っているんですよ。？国の軍大将と仲良くして損はない。我らが友好のために、いかがですか？」

「その食料があるなら、兵に回してください。ただでさえあなた方が攻め入った紗萄国は危機的状态なのに、あなた方が田畑を荒らしたために食糧が不足している」

「……つまらないですね。」

「つまらなくて結構。友好は文書で頂いた。もし破るのなら武力で答えるのみです」

「ふうーん」

そういつて視線を外した礼音に礼をとってすぐさまその場を去った
去った後に

「面白い女の子を見つけました。可愛いですね」

礼音が口元に手を当てて見ていた

大量の部下が出来ました

日が昇り朝を迎えた

徹夜明けの朝日は目にいたい

仮面からは見えない隈もできていると思う

ここまで眠れないのは久しぶりだ

阿宗医師から眠るように何度も催促されているが天幕に戻っては薬作りしか行っていない

ふと外が騒がしいことに気づいた

天幕を捲ると多くの？国の兵がいた

「將軍よ！！俺たちいつになったらアンタの部下にして貰えるんだ
！！！」

「そつだそつだ！！あの時の約束はどうした！！！」

野次を飛ばす声に思い出した

「このあの時の約束か・・・」

「今更無効なんざ許されねえよ！！！」

「そつだそつだ！！近衛兵隊に入れてくれよ！！！」

その規模は千人以上いる

「約束は守ると言ったはずだ。だが今は静かにしろ！！まだ安静にしていなければいけない者達が大勢いる！！騒ぐな！！」

暴動の一步手間のような兵達のように、理解は出るが今は落ち着いて欲しかった

このような暴動は敵国にとっては？国の内乱のきっかけになる恐れがある

「だけだよ！！俺たちは何のためにやったと思っている！！」

「そうだ！！あんたが言ったから俺たちは！！」

「私を信じると言ったのなら最後まで信じなさい！！今日の昼に治療室の陣営まで来い！！そこで話す！！」

竜將軍の声に兵達は渋々といった感じで引いたが、蟠りが少し出来たかもしれない

だがやるべき事をしなければ・・・

昼過ぎまで敵味方無く治療を行った

最初は仮面を被った私に怯えて触れられるのも怖がったが、治療を行っていくうちに気軽に話しかけるようにまでなった

気軽にやりとりをしながら午前中いっぱい仕事を終えた

天幕を捲ると待つてましたとばかりに大勢の？国兵がいた

「昼まで待つたぞ！！」

「どうなっているんだ!!」

「俺たちを近衛兵隊に入れるんだろっな!!」

次々に飛び込んでくる声に

「分かった!!ここにいる全員を近衛兵隊で見よう。」

竜將軍の声と同時に

「やった!!!」「俺たちが最高兵だ!!!」

兵達の歓声が上がった

「ただし!!!よく聞け!!!」

竜將軍の声にピタリと止まった兵達は息をのんで見つめた

「我が命にはきちんと答えて貰う。どんな仕事であろうと、お前達にはきちんと仕事をしろ!!もし、他の者達への横暴などが我が耳に入ったときはそれなりの対処をする。お前達の先輩である虎たちはいつも腹を空かせているのでご飯にはちよっどよい。よいな!!理解した者だけ、翔大の所で名前などの報告をせよ。終わった者達はすぐさま仕事を与える。まず最初に言っておく。生半可な気持ちで我が部隊に入ればすぐさま痛い目を見るぞ。そこをきちんと理解しろ。俺は医者だが、死者は助けられんからな。」

威圧感の聲に浮かれていた兵達はどうするどうすると騒ぎ出した

確かに竜將軍の近衛兵隊に入れば将来は約束されている

されど、今までの將軍達とは違い戦闘では先陣を切ったり、虎達と

武術訓練をしたり、明らかに今まで達の將軍達とは違う

あの竜將軍は強いが、自分たちは弱い

もし戦闘で先陣なんて任されたら即やられてしまう
そんな恐怖があつて三分の二の兵隊は去つていった

残りの三分の一の300人ほどは我先にと翔大の所に押しかけて行
つた

残つた兵達は武には自信のある屈強な兵やガリガリな貧困層の最下
層にいそつな兵など色とりどりがいた

「まず残つた者達に一言。ようこそ我が部隊へ。心より感謝しよう。
これからは忙しくなるぞ。先ずはこれらを皆持て!!」

竜將軍が指さした方向には錆びている鍬や斧などの様々な農村器具
があつた

「あ……隊長……これは？」

一人ずつ訳が分からないといった感じで農村器具に手を伸ばす
勇気を出して聞いてきた兵士に竜將軍は笑つて

「では今から、田畑を耕すぞ!!」

「「「えっ!?!?!?!?!」」」

近衛兵隊は一瞬で固まつた

鍬を持って！！

兵隊を引き連れてやって来たのは荒らされた陣近くの紗葡萄国の田畑だった

兵達の足跡、馬の蹄後など田畑に植わっていた作物をなぎ倒して荒らされた田畑

「では、耕すぞ！！お前達100人はあつちで河からの水を引き入れる班。別班の100人は鍬をもって耕せ！！残りの100人は村人のための住居作り。以上！何か質問は！！！」

「ちよつと待てや！！！！という事や！！！」

人垣を押しつけてやって来た兵は見たことがある

「お前は確か……」

「俺は骸羅だ」

忘れた方も多いと思いますので一言

この骸羅は武術は優れているがオツムが少し駄目。？国きつての乱暴者として有名で一番最初に竜將軍と戦った人物だ
あれから何度も戦いを挑んでいるが尽く負けている
その度に何処を怪我していた、腹の状態が悪くなかったと
い訳を連ねていたが誰が見ても強さは明らかだった

「どうして俺様が土いじりなんかをしなければいけない！！！！そんな

もの歩兵部隊にやらせればいいじゃないか!!」

「そうだ!!そうだ!!」

賛同したかのようにあちらこちらから声上がる

「俺様は近衛兵達になつたんだ!!軍最高の兵士になつたんだ!!
こんな事をするために入ったわけではない!!」

「では辞める。」

冷え切つた声で言い放つ竜將軍に誰もが驚いた

「なっ!!!!」

「聞こえなかつたか。辞めろといったんだ。言ったはずだ、私の命令は絶対だと。もしそれを破りたいのなら、辞めてしまえ。我が軍には不要である。」

「そんな横暴な!!」

「何のために、俺たちが入つたと思う!!」

「何か勘違いしていないか、お前達?我が部隊に入れば、最高の榮譽が貰えると思つたか?だが最高の榮譽とは何だ?勲章をあげることか?戦いに勝つことか?違う!!我が部隊はそんなことを目的にはしていない。平和な世界を作るために率先して行く部隊だと考えている。最小限の戦をして、最小限の被害で押さえる。民が困っているのなら手助けを行う。それが我が部隊のあり方だ。それが理解できないのなら、元の場所に戻りなさい。」

そういつて鍬をもって歩き出した。
それに翔大も続き、虎たちも続いた。

互いに顔を見合わせた者達は渋々ながら鍬を手を取った。

もしこのまま元の部隊に戻れば、意気揚々と出て行ったのに戻ってきたと馬鹿にされるのが目に見えている。

ほんの少しのプライドがそれらを拒絶した

骸羅も仕方なしに鍬を手が付いていった

全ての者がとはいかなかったが多くの者が農村具に手を伸ばした
それをニコリと微笑んで竜將軍は見つめた

人との繋がり

数日間畑仕事を兵達に命じていた。

竜将軍も鍬を持ち働く姿に、誰もが馬鹿にしたような声をかけた

何人もの者達が近衛兵隊から出て行きもした

だが、残った者達の表情は日に日に変わっていった

とある日の夕方だった

自室の天幕で戻ると骸羅達や数名の兵達が尋ねたいことがあると言
つて天幕に来ていた

だが仕事もあつたために終わってからでも良いかと聞くと、素直に
頷く姿に自分の計画がうまくいっていることを示していた

すでに太陽は沈み、闇が広がっていた

天幕内にある蠟燭の火がゆらゆらと揺れて中にいる者達を照らす

「……それで用とは何だ？」

一向に話し出そうとしない骸羅達に促すと

躊躇いながらも口を開き始めた

「俺たちはどうしたらいい??」

「何がだ？」

「……敵国の者は敵じゃないのか？感謝されるなんて俺は知らない!!」

「そうだ！！嫌悪の眼差しで見られたり陰口を叩かれるのは当たり前なのに、感謝されるなんて俺たちは知らない！！」

骸羅達は兵の中でも乱暴者として疎外感を受けていたそれを誤魔化すように暴力をふるっていたのに、田畑を耕し、敵国の民のためにする仕事で紗萄国の民から感謝された。

敬うような、笑いかけてくる者達に、今までにない気持ちが生まれた感謝される気持ち、頭を強制ではなく自然に下げられたそれは彼らにとって衝撃だった

混乱した彼らは訳も分からなくなり助けを求めた

敵国の者は殺すことが当たり前だったのに、感謝されるなんて知らない。裏があるのではないかと疑心暗鬼すら浮かべる者達さえいた
「なるほど。人に怖くなったと。」

「違う！！怖い訳じゃない！！どうしたらいいのか分からない・・・」

「ではお前達はどう思った？下げられる頭に。感謝の言葉を聞くこと。」

竜將軍の声にシーンとなった場

「俺は・・・嬉しかった・・・必要とされているんだと思った・・・」

「ああおれもだ・・・」

「すんげえうれしんだ！！あんなに純粹に笑いかけてくれるなんて！！」

次々に上がる声に成長した部下達を嬉しく思う

「そうか。ならば良かった。」

「よかった???どういう事だ??」

「いつも言っているだろう。俺は戦いを終わらせるためにいる。だが支配で人を支配すれば、不満が生まれる。その不満がないように、人と人の繋がりを強くしたい。それには俺一人が動いても駄目なのだ。多くの者が協力して、成し遂げなければならぬ。」

「じゃ俺たち利用されているのか??」

「まあそうなるが、お前達なら必ずやると確信していた。人との繋がりを作れる逸材で、そして、お前達にも知って欲しかった。人とはこんなにも優しい者であり、感謝される喜びがどんなに嬉しいもんかを。どうだった?感謝されるって?」

「ハア〜何か騙された感じだ・・・」

「でも気分がいいだまし方だ!!さすが將軍だ!!」

「ああ確かにすんげえ俺たちの隊長だ!!」

「騙したことは申し訳なかった。だがこれからも働いて欲しい。いずれ戦いが終わり平和な世を作るために、協力してくれ。」

竜將軍は頭を下げた
自然と下げられた頭に

「止めてくれ世將軍！！俺たちはアンタの部下だ！！」

「あんたが使いたいように使ってくれ！！」

「俺たちは將軍に付いていきます！！！！」

骸羅達は照れたように応えてくれた

人の繋がりは大切なモノだ。大きな国になればなるほど根本となるのは人との繋がりとなる。繋がりが弱くなれば衰退を辿ることになる。閃の作る国を揺るがぬ確かなものにするために神楽は全てを利用して事を成し遂げる。いずれ去らねばならぬ身、閃の傍にはいられなくなる身なら閃の為に出来る最大限のことをしてみせよう。

覚悟を決める

一週間の予定だった滞在はいつの間にか一月もの時を要した。その間に軍の大半を国に帰国させたが竜將軍率いる近衛兵隊はそのまま残り、紗荀国の再建へと力を注いだ。

たった1ヶ月という短い時間であったが、王宮から、いや王から何度も帰るように何度も書簡で催促されたが、その度に

『未だに紗荀国の再建の見通したたず、このまま放り出せば紗荀国の民は死に絶えます。もうしばしお時間をください。？国のためにごさいます。ご理解ください。』
と行って返事を出した。

一切の感情を出さない文字で流麗に書き並べた文字を見ながら、何度となく溜息を吐く。

すでにこの文章を書いて何十通目になるだろうか。

閃の怒った顔が浮かぶが、医師として、また人として、困っているものを放り出すわけにはいかない。自分の中にある葛藤を押し込めて、再度書簡を出す。あと一週間、いや後数日でいい。時間が欲しい。そうすれば帰れる。

そうして何とか復興の目処がついた。これ以上は国同士の問題や紗荀国のための問題であるためにこれ以上の支援はいけない。

？国ばかりに頼られれば、？国も疲弊する。

これ以上？国に疲弊は与えられない。それに、紗荀国が自立して立てなければ意味がない。他国に頼りきった国は必ず滅びる。一本筋が入らなければ、倒れてしまう。

冷たいようだが、ここで突き放さなければいけない。

紗萄国の次代のためにもある。

そのことを紗萄国の王に伝えれば、

「よき部下を？国はお持ちだ。我が国の民を助けていただきありがとうございます。とうございました。王として感謝申し上げます。」

「いえ。永久の友好が続くことが我が願い。どうか、これからも？国と共に栄えましょう。」

何とか？国として面目も保たれ、一安心で王都に、いや閃の元に返ることが出来る。

気が緩んで湯浴みをして軽装のまままで天幕を出てしまった。

暗闇の中星がきらめく

満天の星空を仮面から覗く

天高く何処までも続くきらめきに目が奪われていた

「これはこれは竜將軍。」

バツと振り返った先にはこれまた嫌な男がいた。

「礼音殿下。こんな夜更けに何か用ですか？」

「これまた冷たい台詞だ。明日がお別れというのに、そんな言葉はつれないなあ。」

「そうですね、ではつれないままこのまま退散します。失礼します。これ以上顔を合わせることもないでしょう。」

「君は何故そんな格好を？」

退散しようと陣に足を向けると唐突に質問された

「仮面のことですか？」

「イヤ、その格好のことだよ」

「何処か問題でも？」

嫌な雰囲気が流れる。上から下まで舐めるように見つめてくる視線に身構えそうになるが、奴は一国の王子様だ。行動を一つ間違えれば戦争になりかねない。

「ふーん。？国は自分の身を偽って軍人になることが出来るのかい？」

「・・・言っている意味が分かりかねます。」

「なら簡潔に言う。君は女だ」

一瞬で風を切る音が聞こえたかと思うと、礼音の首筋には竜將軍の剣が添えられていた。

目にもとまらぬ抜刀で相手を威嚇する。

だが礼音は飄々として笑みを浮かべていた。

「やっぱり君は女なんだね。名前は？」

「侮辱罪で首を跳ばしますよ・・・」

「真実だ。君は女で、色んな意味で君も女を偽っているのだから侮辱罪になると思うよ。君の方が首が跳ぶよ。」

「二度と顔を見せるな。そして近寄るな。次は本気で斬ります。」

チャキンと剣を戻して今度は足を止めることなく歩みを続けた。

天幕に入りうかつだった自分を呪った。

ばれてしまった。女であることがばらされれば、この状況下は崩される。ほとんどの兵を帰しているの、攻められれば我が軍はすぐさま負けるだろう。いやその前に？国の兵達に殺されるのだろうか？まだ成すべきことも何も遂げていないのに！！
このまま逃げるか・

イヤそんなこと出来ない・

ここから逃げれば近衛兵隊は？

悶々としながらいつ飛び込んでくるか分からない状況下に神楽は覚悟を決めた。

軍にばれたならその時はこの身を滅ぼせばいい。私は誰にも名前を名乗っていない。

私が自害すれば、誰とも分からない。

いずれ閃の前から消えるつもりであった身なら少しでも閃の為に役立てて死んでいこう。

そして、朝を迎えた。

休息できる場所

だが、朝日が昇っても何も起こらなかった。
嵐の前の静けさかと緊張を張り詰めていたが、笑みを浮かべて応えてくる兵達に、裏があるとは思えなかった。

礼音殿下と陣の中であつたが、ただ笑みで別れの挨拶をするだけで何をすることはなかった。
兵を収集して出立した。

見送ってくる民に骸羅達は何度も振り返り、照れくさそうに笑う光景にほんの少し口角があがる。

一瞬であつたが気が抜けた瞬間であつた。

それから数日張り詰めていた。

いつ何が起きるとも分からない状況下で、王から伝令が来た。

伝令内容は竜將軍の凱旋パレードを行うとのことだった。

昼過ぎ頃に大通りを通つての凱旋をするため、將軍にふさわしい白の生地に金糸が使われている軍服に豪華な虎の鞍が送られてきた。
身につけて欲しいと囁し立てる兵達にしようがなく着てみると、少し痩せたために少しブカブカだったが、裾の長さなどは完璧だった。
鏡で見ると、少年とは言いづらい青年が立っていた。

白い仮面越しにそれを見ると何とも情けないようだが、せつかく頂いた物だ、凱旋ではこれを使おうと綺麗に折りたたんで、直した。

翌日晴れ渡つたその元、大通りではたくさんの花びらが舞った。

ピンクや白、真っ赤な花びらは風に吹かれて幻想的な光景。

そして鳴り響く陽気な音楽。

人々は通りの両サイドから声を張り上げて叫ぶ
英雄の帰還を祝う声を。

「竜將軍！！！！」

「キヤー——あれが竜將軍よ——！」

「「かっこいい！！！！」

「竜の化身のように強い方らしいぞ——！」

「それに医術などの面も卓越して敵国の民すら救った方らしいぞ——！」

「お優しい方なのね——！」

「こつち向いてくださいますし——！竜將軍——！」

黄色い声が広がる。

それに応えるかのように虎の上に乗った竜將軍がゆっくりと声のした方に振り返り手を振る。

「「「きゃ——————」

と女性達の叫び声が轟き、失神者まで出た。

恐るべし竜將軍と色んな意味で竜將軍の人気は鰻登りに昇っていった。

王城にたどり着くと、あちらこちらから殺気を感じる。

妬み、憎悪、嫌悪、媚び諂う視線など様々な視線が身に降りかかるが、気にせず歩き出した。

向かうは謁見の間。

今回の戦いの報告をせねばならない。

お借りした宝剣もお返ししなければならぬ。

気を引き締めて、胸を張って一步を踏み出した。

謁見の間は多くの官吏達や將軍達が集まっていた。

中央に玉座に繋がる赤い絨毯を境に右と左に分かれた軍人達と官吏達。

ゆっくりとしかし堂々と赤い絨毯の上を竜將軍を歩いた。

玉座に座る王に向かって。

玉座の前の階段の前で歩みを止めて膝をついて

「只今帰還いたしました。」

「……………」

誰もが凍り付いた。王が望んでいた竜將軍の帰還が報告されたとき王は喜んでいた。

しかし、今の王は一切の感情を出してはおらず、能面のようにただこちらを見ていた。

「……陛下。お借りしておりました宝剣をお返しいたします。コレがありました故にこの度の戦勝利を得られました。誠にこの剣と戦えたこと誇りに思います。」

「……………」

「陛下？」

あまりにもおかしい王の声に無礼と思ったものの竜將軍は顔を上げた。そして息をのんだ。

今までに見たことのない閃がそこにいた。やせ細り、目元には少し隈までできている。凶器じみた瞳は真つ正面から受ければ射殺されそうな程まで凶悪さまで持っていた。

「……陛下。では、この剣はお預かりしておきます。それと申し訳ありませんが、お願いがございます。」

「……何だ」

「休息が欲しいです。連戦が続き、さすがに疲れしました。一日で良いのです。休みをいただけませんか？」

「……3日間休みを与える。戦いの報告もその後でよい。しかし、祝いの宴は今夜行う。よいな。」

「はい。ありがとうございます。」

それだけ言つて王は退場した。

すぐさま竜將軍も退場したかったが三老達や官吏達に捕まってしまった。あーだこうだと話しかけられ、無礼にならない程度に話したが、足取りは違った。

振り切るようにその場から離れて、誰も見ていないところで後宮に潜り込み、すぐさま楼閣へと向かった。門番はいなかった。

すでに扉は開いており、入り込んで閉めた。

長い階段を駆けるように昇り、最上階へと着いた。

ギーーと扉が音を立てて開いている。

それに導かれるように仮面を外して、ゆっくりと扉に近づく。

未だ昼間という時間帯なのに、部屋の中は真っ暗。

窓は閉め切られ、光は差し込んでこない。

「・・・閃・・・」

ポツリと呟やいた言葉を返すように背中から抱きしめられた。腹部に回る腕。項にかかる息づかい。背中全体に伝わる閃の熱。

「・・・おか・・・り・・・」

「・・・えっ・・・」

「お帰り神楽・・・」

「う・・・っ・・・」

閃の声が耳元で囁かれて蓋をしていた想いがこみ上げてきた一気に爆発した。

「はうあッ・・・怖かったよ閃・・・いつ死ぬか分からなくて怖かった・・・うわぁ・・・」

溢れ出す涙が神楽の頬を濡らして閃の手へと落ちてくる。

分かっていた。未だ十代の少女が剣を持って戦場にそれも最前線に

立つことはどれ程の恐怖がこの細い肩に乗ったのか、考えられない。必死になって毎日を生きた神楽がやっと自分を出せる場所に戻ってきた。安堵できる安らかな空間へと戻ってきた。泣き出した神楽はほんの数分泣いていたと思っただら、足から力を無くした。どうやら意識を失ったようだった。

横抱きにして持ち上げると、異常なまでに軽い神楽にゾツとした。ほんの一ヶ月でここまでやせ細ることが出来るのかと言うほど神楽は軽かった。寝台の上に寝かせて、その横に潜り込む。やっと私も眠れる。

包み込む神楽の体は小さくそして暖かった。

二人して寝付いて、モゾリと腕の中で動く感触がする。

瞼をあげると、向き合うように寝転がり、胸元に神楽の頭がある。閃が起きたことに気づかない神楽は耳を真っ赤にしながら、ゆっくりとその胸元に手をいれて頬を近づける。

なにちよつと！？コレ可愛いんですけど！！俺は理性を試されているのだろうか？

ズッキュンと受けるその仕草に閃は必死になって理性を総動員させた。

背中に回した腕や手に力が入らないように頭の中で羊が1匹、羊が2匹とも数え始めた。

「閃・・・起きてるの？」

さすがの閃も心拍数までは抑えることが出来ず、耳を当てていた神楽には丸聞こえで、下から見上げるように神楽が見つめてくる。

「おはよう神楽。と言つても、夜だけど。もう間もなくで、宴が始まると思う。行かなければいけないな。・・・さぼるか?」

まるで昔に返つたような閃の顔にクスクスと笑つてしまう。

「ダメよ。閃。私が、ううん、竜将軍が行かないと。分かっているでしょう?」

寝台から身を起こして、横たわる閃を見つめてくる。

その視線は何処かもの悲しく、知らない笑みに見えてくる。

「神楽。いやだったらいつでも辞めて良いんだ。君を守ることはいつでも出来る。」

横たわつた状態で手を伸ばすと、その手を頬に当てながら

「閃それはダメ。もう竜将軍は歩き出した。この国になくてはならない人物に成長している。私はあなたを守るために私の出来ることをしたい。お願い分かつて。」

「・・・分かつた。それより宴に出かける準備をしよう。どうやら宴には他国の者達も来ているようだからな。」

「他国の者?」

「ああ。和平の使者という名目で今回の宴に出る予定だ。」

嫌な予感がする。もしかしたらあいつがいる可能性がする。ふっと浮かんだ考えにむっと眉に寄せて考え込んでしまった。

「どうかしたのか？」

心配げに聞いてくる閃に何でもないといった感じで無理に笑みを作ったが閃が訝しげに見つめているので、失敗に終わったようだ。

「何でもないの。大丈夫だから。それよりちょっと湯浴みがしたいわ。良いかな、閃？」

それは簡単に言えば部屋から出て行けと言っている。

だが無理に聞きだそうとすれば神楽はさらに口を閉じるだろう。

「はあく」と大きな溜息を吐いて閃は何も言わずに部屋から出て行った。

「……もしばれたら私は……」

ただポツリと零した言葉は誰にも聞こえることなく部屋の扉は閉じられた。

祝宴

王宮の一番大きな室にて宴は行われた。

勝利の宴と言っても質素で良いといったがやはり他国からの使者や情勢を知ろうとする間者などの配慮から豪華に行われた。

竜將軍の席は戦いの英雄と言うことで、王の席の隣という格別な席。もちろん竜將軍が座るその反対側の王の横の王妃の席は空白のままである。もちろん寵妃である神樂にも宴への参加が求められたが、王によって却下された。

乾杯の宴と共に先ずは紗萄国の使者が宴の真ん中に躍り出た。

「陛下！！お初にお目にかかります。紗萄国の宰相の李俊りしゅんと申します。」

恭しく頭を垂れた李俊は体格も大きいが、出っ張ったお腹でうまく拝礼が出来ていない。

「よく来られた。今日はゆるりとされよ。」

その返礼に王は玉座から見下ろすように応えた。

「この度は誠にありがとうございます。？国竜將軍のおかげで我が国の民は多くの者が生き延び、助かりし者が多くおります。正に竜のような英知溢れるお方でございます。」

一度は紗萄国を滅ぼしかけた竜將軍にこのように褒められたとて、

裏があるようで素直に喜べはしなかったが、他国との友好関係は狸と狐の化かし合い。相手に裏があるならこちらも裏で返すしかない。

「そうだな。竜將軍は正に竜だ。我が軍の牙は竜の牙と爪と思われの方がよいだろう。」

ニヤリと浮かぶ王はゾワリと凶器を含んでいる。ひんやりとした冷や汗を浮かべながら李俊は

「かしこまりました。我が王にもその様にお伝えします。」

すすつと立ち去る李俊に閃は傍にいる神楽に聞こえる程度に

「狸だな・・・」

と呟いていた。次に出てきたのは采駕国、意国、源国の3カ国の使者だった。

その中にいる若き一人の男は礼をしながらも竜將軍を見つめていた。その男は礼音だった。

それぞれ3カ国とも和睦の書状を手に持っており、ほぼ全面降伏の文章が書かれていた。

それぞれ使者が差し出す書状を目にしながら、閃はむかむかとした感情に囚われていた。

頭は垂れているがこっそりところらを見つめてくる者がいる。

それが王を見てみたいという若者の恐れを知らぬ好奇心ならまだよい。だが明らかにその使者の視線は王には向かわず竜將軍を見つめていた。

そして何より驚いたのが、その視線に気づいているはずの神楽が全く相手にしていない。

いかなる理由があるかと神楽は真つ向から相手と向き合う人間だ。だが今回はその視線から逃げている。

ならばそれはこの使者と神楽に何かがあったということを示している。

確かにその使者は他の国の使者と違って端正な顔立ちをしており、身のこなし、動作も問題はなく、溢れ出す気品は優雅さを持っていた。

そして俺より少し上だろうか、という年齢が不快感を強くする。

「そうか。和睦の件はコレにて受け入れよう。使者達よ今日はゆるりとされよ。」

本当であれば使者達の紹介がされるはずであったが、閃にとっては見ていたくもない相手だった。

すぐさま視界から消したくてあるまじき行為だったが、勝利国という？国が優位の立場から命令を出した。

？国が優位である以上、広場に居座るわけにはいかなくて、三力国の使者は躊躇いながらも、用意された席へと移動した。

すると本当に横にいたから分かるほどの神楽がホツと息を吐いたのを感じ、またムカムカとした思いが持ち上がる。

宴は続いた祝杯が何度となく挙げられては、竜將軍の武勇伝の話で盛り上がる。

「竜將軍は一人光りもない暗闇の中を駆けめぐり、敵陣に乗り込まれてあつという間に敵を山から引きづり下ろしたんだ」

「そうだそうだ！！あの手際の良さと強さと英知は正に竜の如し！！」

「そうだ！！そして暗闇に真っ赤な火の竜が現れた！！」

「あんなデカイ竜を俺は見たことねえ！」

「竜がいるとこんなざ誰も見たことはないよ！！だけどあれは正に竜だった！！」

酒も入って大きな声で叫びはしゃぐ兵達

だが誰も止めようとはせずに、夢物語のような竜將軍の武勇伝に官吏達は聞き耳を立てていた。

笑い声がこだまし、手を叩く声がしながらふと扉が開いた

「陛下！！申し上げます！！藍光国らんこうこくの使者がまいります！！」

それは驚きの一言だった。

藍光国それは今まだ他国と関わりを持つとしなかった国である。

しかし、7カ国のうちの1つの国家である。それなりの大きさと人口数を持つ国ではあった。

その藍光国が呼んでもいないが、何故に来た。

その場にいた誰もが一瞬で仕事の顔になった。

そして誰もが玉座に目を向けた。

王がどう動くか、ただそれを楽しむかのような視線もあったが閃は真っ向から受けて

「通せ」

と一言言った。

鳥かごの少女

通された藍光国の使者はひよろりと背の高いやせ形の男だが、年は30ほどの若さだろう。

身に纏う衣服は絹が使われ、それなりの地位のある者だと伺える。だがそれより気になるのはその男の後ろにある2メートル以上ある高さの物体に布が掛けられた物だ。

6人の兵達に運ばされてこの物体が何だと奇異的な視線が集まる。

「お初にお目にかかります。閃王陛下。我ら藍国の主より命を受けました宰相の楊華月ようかげつと申します。」

「遠いところからよう来られた。して藍光が我が国に何用だ？藍光国は他国との友好はなかったはずだが？」

ピリリとした空気が張り詰めた。

だがそんな空気も関係ないとばかりに藍光の使者は堂々としている。本当によく分からない空気を醸し出している。能面のような顔立ちが一切の感情を隠して、悪意があるわけも、好意があるわけでもない空気に神楽も腰にある剣に手が伸びた。いつでも閃の前に飛び出せるようにほんの僅かに腰を上げる。

華月はおもむろに手を懐に忍ばせた

武官達はピクリと反応したが、飛び出すような者はいなかった。

そしてその張り詰めた空気を解き放つように

「・・・我が藍光国は？国との友好を望みます。我が主からの書状にございます。」

華月は仰々しく書状を掲げた。

「な！！藍光国との友好だと！？」

「あり得ぬ！！あれほどまでに他国との干渉を嫌う国が！？」

「どづいうことだ？？」

華月の持ち込んだ爆弾発言に広間では騒がしくなる。

扇で隠しながら話し合っていた者達は隠すのも忘れて、大声で言い合っている。

「……竜將軍そなたはどう思う？」

その騒ぎの中で王の声はよく響いた。

しーんと静まりかえった中で多くの視線が竜將軍へと向かう。

「……陛下。まずは書状を見てみないことには何とも言えません。」

「そうか。書状をこちらに」

官吏が震えながら華月から書状を受け取り、王へと渡した。

書状を開いた閃は驚いた。

その内容は藍光国の完全敗亡ともとれる書状だった。

「ど、どづいうことだ？藍光が我が国の傘下にはいると書かれてあるがそなたの国は何を考えておる？」

「書状の通りにございます。」

眉一つ動かすことなく喋る華月に、竜將軍は王の傍に行き、書状に目を通す。

きちんと王の御名も御璽も入り、疑われるような場所はない。だが何故にという疑問が浮かぶ。藍光は国内に有数の資源を持つ国だ。鎖国状態でもやっていけるほどの国力を持つ国が何故？

「・・・はっ!?!まさか・・・」

竜將軍の出した小さな声に華月はピクリと初めて反応した。

「何かあるのか？竜將軍。」

「・・・憶測ですが、露国が動き出したのだと思います。」

「さすがに、竜將軍。万物を見渡す目をお持ちのようだ。」

「ではやはり、噂は本当だったのか？ならばこの書状の意味もよく分かる。」

書状を見つめながら呟く声に広間はざわつき始める。

露国は7カ国のうち最も軍事国家といつていい。

王はちよくちよく変わり、最も内乱が多く他国を侵略して利益を生んでいる国だ。だがそれ故に他国から総スカンをくらって、最も貧困な国でもあった。すでに国と言える状況でもなかった。

その露国がこの書状とどういう関係があるのか、閃は口を開いた。

「?どついつことだ?」

「陛下。お話しするか迷ったのですが、時期尚早と思ひ話してはお

りませんでした。露国に不穏な気配があります。先の戦いで露国の語源を使う民を多く治療してきました。それに・・・武器もです。

「！！！！！！」

「露国の大量虐殺が出来る武器が多く戦場にありました。そうですね？みなさん？」

竜將軍が向ける視線に源、采駕、憚国の者達は視線を反らした。

「紗萄国が3カ国とはいえ、数日で敗れるはずがないと思い、調べました。あれほどの武器を取りそろえると、露国以外あり得ません。露国が動いています。そして、おそらく藍光に侵略を始めたでしょう。」

「さすがにございます。竜將軍。我が国は露国に侵略を受けております。他国に応援を求めましたが、源、采駕、憚の国は一切の無視を決め込み、動きませんでした。」

冷えた目で他国の使者を見つめる目にやっと少しだけ感情が垣間見えた。だがそれも一瞬で伏せられた顔に、何を思うのかよく分からない。

「して、そちらにあるのは一体何だ？」

閃の声に誰もが陽月の後ろに隠された大きな物体に目がいく。先ほどから異様な雰囲気を出す物体に誰もが興味をそそられた。

「これは我が国の降伏の証。我が国最大の秘宝でございます。」

バサリと剥がされた布。

大きな布が剥がされて、露わになったのは巨大な鳥かご。太い湾曲した鉄のアーチが正に小さな鳥かごをそのまま大きくしたような状態であった。

そして中にいる鳥は少女だった。

真っ白な衣服を纏った神楽よりも少し幼い少女は鳥かごの片隅で震えるように膝を抱えて縮こまっていた。

衣服も白いがその肌も白かった。紫水晶のような瞳がフルフルと涙で揺れて、今にも泣き出しそうだが必死に噛んでいる唇で涙を抑えている。

「……な！！これは！！」

「我が藍光国^{しんくわく}第一王女紫翠様です。まだ王妃を娶られていないと聞き、是非とも我が藍光の王女を閃王の妻に・・・」

誰もがしまったと思えた。

閃は確かに正妃を娶ってはいない。それなりに話は上がった。上がったが、それは王を傀儡にしようと思つた者達だった。その後その者達は今この王宮にはいない。すべて悪事がばれて王宮から追放された。

それにこれといって閃は信頼度があまりなかったために、他国からの正妃にと娘を出されることもなかったが、今は違う。6カ国中4カ国と和平を結びまた新たに1カ国をうちに込めようとしている。これほどの大国を治める王が正妃がいない。どれ程のチャンスであるろう。確かに寵妃がいるが、ほとんど表舞台に出ることはない。ましてや、他国の王女が嫁いできたとなると一夜ぐらい共にせねばならない。だが、その一夜で良いのだ。既成事実さえあれば、例え誰

の子を孕んだとしても、男児を産みさえすれば聖母してこの国に降臨できる。

それを藍光は先の一手をしてきた。友好として差し出せば王として受け取らねば、戦を招くことになる。

静まりかえった空間で注目の人物は動かない。ただ静かに鳥かこの王女を見て、

「……斬り捨てて……国へ返せ……」

ただ一言静かな空間にその声が響いた。

竜に恋した少女

背筋をゾツとするほどの寒気が襲った。

「な!! 陛下!! どういう!! 藍光との和睦は」

「我が妃はただ一人、神楽だけだ。他の者を娶るつもりはない。見とつもない!! さつさとさがれ!! 失せ」

「それ以上は陛下ダメです!!」

閃の声を遮ったのは竜將軍だった。

「・・・竜將軍・・・どういつつもりだ・・・その女をすぐにこの城から」

「なりません!! 陛下落ち着いてください!!」

「落ち着いておれるか!! この者達は妃を愚弄したのだぞ!! 万死に値する!!」

「その様なことをなさつたと神楽様が知れば悲しまれます!!」

「・・・ではどうしろと!! こいつらを!!」

今にも斬り捨てそうなほどの怒気に鳥かごに入っている少女は声もなくただ溢れ出す涙を流していた。

「陛下。どうぞお待ちください。この姫のこと私にお任せください。我が客として私が請け負いますので、どうぞお考え直しを・・・」
ただ頭を下げる竜将軍に閃は舌打ちをして、

「和睦については考える。されど、その女を見る気もない！！次ぎ視界に入れば斬る！！失せる！！」

そう怒鳴りつけて強い酒をグイツと飲み込んだ。本当であれば今すぐにも斬りたいが無用な殺生を嫌う神楽がそれを阻止した以上強くもいえない。

官吏共が声を潜めて言い合っているのが見える。馬鹿馬鹿しくて何も言う気はない。

興ざめのように藍光の者達が目を反らすと、陽月は頭を下げて鳥かごを運ぶために兵達に視線を送った。

その視線に気づいた兵達が鳥かごの周りを固めて持ち上げようとする。

「止めよー！！」

「竜将軍何か??？」

退出しようとした陽月を呼び止めて、カツカツと宴の広場に出てきた竜将軍。軽装ではあるが、帯剣はしている。

「下ろせ」

「はあ?」

「今すぐ下ろしなさいー!!」

「はい!!」

蛇に睨まれたような声に兵達は鳥かごをゆっくりと下ろした。次に陽月へと目を移す。平伏してはいるが、ビクビクしている兵とは違い完璧な礼の姿勢をとっている。肝の据わった男に見えるが、本当に何を考えているのか分からない。

「陽月様だったか？この鳥かごを開けなさい。」

「ですが、陛下が・・・」

「人を人として扱わぬ国は私は嫌いだ!!鳥かごは人のいるべき場所ではない!!今すぐ出しなさい!!」

ふと上げた顔はニヤリと弧を描き、徐に懐から出した鍵で鳥かごの入り口を開ける。

ガチャンと大きな音が響いて、ギイツと金属特有の音が響く。

腰の高さほどしかない入り口にかがみ込み手を伸ばした。

「出てこられよ。そなたは我が客。我が客がこのような所ではおかしかろう?」

怯えたような目で陽月と竜將軍を相互に見た少女はゆっくりとした手つきで手を伸ばしてきた。

カタカタと震える手を辛抱強く待ちながら、差し伸べた手に手が届くと、しっかりと握った。

指先は氷のように冷たく、傷一つ無い滑らかな手。

切れに整えられた爪は桜の花びらのように薄いピンク色。

髪に付けられている飾りに気をつけながらゆっくりと入り口から出て、足が付いた瞬間気が抜けたのか、腰が抜けガクンと少女の体が倒れた。

それを支えるように竜將軍は腰に手を当てて

「すみません。この方が早い」

壊れそうな細腰と膝当たりに手を当てて抱え上げた。

フワリと羽ように軽い体を抱き上げると微かに香る柑橘系の甘い香り。

白い顔がリンゴのように真っ赤に変わっていく。怖がらせられないようにニコリと仮面から出ている口に笑みを浮かべると、真っ赤になる勢いが勢いづいた。

「陛下、お客様は私がおもてなしをいたします。これにて失礼します。」

姫を腕に抱えたまま宴の広場から歩き去った。

陽月もそれに習うように付き従った。

残された者達は

「どうやら竜が人に恋したようだ。」

「王の女をさらったぞ。これは面白いことになりそうだ。」

「だが、奴の元に大国の王女が嫁いだら・・・」

扇で隠しながら王に聞こえるように話し合う。これで竜將軍と王との間に不仲の状態ができれば自分が次が王の傍に行けるかもしれないという野望からコソコソと会話は続く。

「……宴は続けよ……」

王の声に鳴りやんでいた曲が始まり、踊り子達が踊り出す。

止まっていた時間が動き出すように談笑が始まり、お互いに酒を酌み交わしている。

それを見ながら閃の心は冷え切っていた。

竜の願い

「ココでよいだろうか？」

ゆっくりと中庭にある四阿の椅子に紫翠を腰掛けさせた。

怯えた目で見つめて、きゅっと服を掴まれたがその手をゆっくりと外して、石の机を挟んで反対側の席に竜將軍は腰を下ろした。

「陽月様も来られよ。姫だけでは心細いであろう？」

ひっそりと後ろに佇んでいる陽月に声をかけてみたが、紫翠のそばに来るだけで立ったままだ。

「すまぬが誰か料理をこちらにも運んで貰えないだろうか？私は飲まぬが、そなた達は飲むか？」

紫翠はフルフルと首を振り、

「私もいりませぬ。」

「そうか、では茶の用意を頼む。」

「はい。」

女官達に命じて、フウと溜息を吐き、腰にある剣を外して机に立てかける。

それに反応して陽月がピクリと動いたが、それ以上の動きはなかった。

「座られるがよい、陽月様。」

「……姫の許しがございません。それに私は……」

「すみませんが、姫様。この木偶の坊に座るように言って貰えませんか？こんな傍で立ってられて見られてるんじゃない、うまい飯もつまいと思えない、そうでしょ？」

「……ふふっふふっ」

自国の宰相を木偶の坊などと言われて、確かに立ったままで何を考えているか分からない男にはぴったりの言葉に紫翠から初めて笑みが飛び出した。

「……やっぱり女性は笑顔が素敵です。そのまま笑っていてください。」

竜將軍の声にぼつと頬を染めていく紫翠。
それを見つめながら陽月は

「木偶の坊ではありませんので座ります。これでよろしいか？」

「はいありがとうございます。それと王の無礼をお許しください。紫翠姫には怖い思いをさせてしまいました。王は良き方にございます。あの方に恐れを抱かないでください。王の傍へは私が何とかいたしましょう。」

「何かとは、どうやって？あの王の怒りよう寵妃様を溺愛されているのでは？」

「違います。王は思い違いをなされています。王はただ傍にいる存在が欲しかっただけです。ただ単に友のような存在が欲しかっただけで、それを愛情と勘違いされているのです。神楽様もそうお考えであります。」

「それでは・・・王に寵妃様への愛情はないと？」

「そうです。だから、神楽様に懐妊が無いのです。王は神楽様を抱きません。神楽様という存在を友としか見れぬからです。」

「何故そこまで詳しくご存じなのですか？」

「王の警護を任されております。夜も傍にお仕えしており、神楽様にもお会いしました。あの方はただの籠の鳥の方です。外に出ることを望まれています。それが許されずただ泣いておられるだけの弱い方です。何の後ろ盾も何の価値もない方だと嘆かれるだけの方です。」

「だが現在は王の寵愛を一身に受けている存在です。その方を押しつけて何故貴方が我が国の姫を押されるのですか？貴方に何ら利益はないと思えますか？」

探るような陽月の目にふつと笑みを浮かべて、

「私はいずれこの国を去ります。戦いが無くなれば私のような存在はいらないのです。その時に王を支える存在が傍にいて欲しいのです。後ろ盾もなにもない神楽様より、紫翠様のような方に王の傍に

いて欲しいのです。」

「・・・解せませんね。何の利益もなく去るのですか？近衛兵隊長になりながら戦いが終わって去るなどと・・・貴方の望みは一体何なのですか？」

「私はただ王が健やかにこの治世を治められればそれで良いのです。それ以上は望みはしない。・・・さあ食事にしましょう。おいしいご飯も冷めてしまう。」

この話は終わりと示すかのように用意された食事に竜將軍は手を伸ばす。

話を続けたい陽月と紫翠であったが喋る気はない竜將軍に合わせて料理へと手を伸ばし始めた。

その後互いの国の状況について話し合いながら、食事を進めた。時たま感じる紫翠の熱い眼差しに気づかないフリをし続けて。

竜の涙

あのあと何度も紫翠から送られる視線に困ったような笑みを浮かべては流していたが、食事が終わり席を辞し、藍光の者達の部屋を用意したあと、重い足を引きずって後宮へと向かった。

【怒っていらしゃるだろう・・・このような無断の行為に・・・】

どれだけ無謀な行いをしたか分かってはいたが、紫翠姫を見た瞬間にこの方だと思えた。王の傍に相応しい方だと。

楼閣の前にはいつものように兵が見張りをしており、その横を通り抜けながら上へ上へと向かう。どんなにゆっくり進もうと最後には部屋へと到着してゆっくりと最後の扉に手をかけた。

開いた扉の向こう側は人の気配もなく、閃はまだ戻ってないようだ。

湯浴みを済ませるか、衝立を用意して浴槽に水を入れる。

仮面を外して髪をまとめていた紐を引っ張るとハラリと髪の毛が落ちてくる。

切ったときは肩ぐらいの長さだったが、今はだいぶ伸びて鎖骨当たりまで伸びてきている。

フワリと舞う髪からは酒臭い匂いやタバコに匂いが混じっている。

不快感にガシャガシャと髪を掻くが一向に消えはしない。

替えの下着や服を用意して衝立にかけて、剣を外して立てかける。

一応何かあったときにすぐさま掴める距離に剣を置きながら浴槽に入る。

チャプンと水音をたてて、波紋が広がっていく。

それを見ながら用意していた布を取りだして水につけ、ハーブの匂い付きの石けんを擦りつけて泡立たせる。泡だった布で体を洗いだした。

そして目も背けなくなるような体中に走った傷跡に何度となく溜息を吐く。

神楽は決して剣の才や薬学の才があったわけではなかった。全てそうならなければならぬ運命によって努力というモノによって生まれてきたモノであった。

4歳の時に目の前で父と母を殺された。

やっと父から学び始めた薬草を試したが、全く何も出来ずに父と母を失った。

絶望をしたが、義母の柳燕によってまた新たに薬草の技術を学び始めた。

救えるかもしれない命があるなら救いたい。その技術を父から教わった。それを残していきたい。父が残したモノを無駄にはしていないと、必死になって勉強した。

そして、守るためには傷つけられる前に倒さなければいけないとも考えて、殺生をしない棒術で武を磨いた。

女は男に勝てないと言われたが、それを覆すための努力はやってきた。

力で勝てないなら技術で勝てばいい。

速さや技術で相手を負かし続けた。

だが、その代価として体中に傷を負った。

無数に走った薄いピンク色の傷。肉を歪ませ、抉れている部分もある。

手を見れば薬草が染みついて爪や指が緑色に変色している。

嫌な匂いも少しする。剣ダコや水などによって荒れた手。

思い出すは紫翠姫の白魚のようなスルリと伸びた指。

綺麗に手入れされ指はシミ一つなくすんなりと伸びいた。

また抱き上げたときにふんわりと臭った甘い果実のような香り。

柔らかな体躯が小刻みに震える姿に庇護欲がそそられる。

自分にはないモノがそこにあった。

雄々しい男のような自分と弱く女らしい紫翠

身分も体格も何もかもが違いすぎる憧れる存在がそこにあった。

いや決して今の自分が嫌いというわけではない。

望んで今の自分になった。閃を守ると決めたときからいくら傷つこうが、この国のためと思っていた。

だが、平和になったとき自分がいるだろうか？

竜と言われる牙がいるだろうか？

答えは簡単だ……いらぬ。不必要だ。

いずれは去ると決めた。安定するまで。閃が王としての地位を確立する目で傍で支え、そして誰かを娶るときに去っていく。

ズキンと胸の奥底から疼く痛み。

頬を伝う雫に気を取られてはいけない。

決めたのだ。これが私の愛し方。

閃を守ることが私の愛し方。

どれだけ傷つこうと、この傷一つ一つが閃への愛。

歪んだ愛情だと思うが、自分で決めた以上進む道は決まっている。

まだ和平を結んでいない露国を傘下に置いて、？国を第一国家とする。

閃の地位を安定させて、正当な王妃を・・娶らせる。今のところ藍光国の紫翠はその筆頭にあげられる。

愛する人が別の人を妻にする。それも自分がお膳立てするなど自虐的にも程がある。

しかし、これしかないのだ。

閃の国が？国が未来永劫続くことが私の望みであり、幸せなのだ。

溢れ出す涙や慟哭を両腕をかき抱いて押さえているが溢れる嗚咽だけは暗闇の中を響いていた。

竜の涙2 (前書き)

更新を遅れましたこと大変申し訳ありません。

竜の涙 2

薄い扉の向こうで声を抑えた泣き声でした。

微かな声は聞き取りにくいほど小さくか細い。

薄く開いたドアから中を覗けば、湯浴みが終わったのか薄い寝間着が体に張り付き、伸びた髪からポタポタと雫を垂らしていた。

その細い肩は小刻みに揺れ、必死になって声を押し殺していた。気づかぬふりをして、

「神楽！！戻っているか！！」

そう声をかければビクリと体を震わせ目元を拭いている。

それから数秒して扉に手をかけて中に入り込むと、何時もと同じように薄い笑みを浮かべて微笑む妻がいた。

「宴は終わったのですか？」

あれから勝手に宴を退出してしまっただが、戻る気はしなかった。

閃の警護をしたかったが、何より敵国のレオンに正体がばれている以上彼に不用意に近づきたくなかった。

「ああ。狸共と呑んでも面白くもない。そうそうに出てきた。」

頭に乗った冠や装具を外しながら疲れたと言わんばかりに神楽に甘えてくる。

昔からこうやって疲れを見せ甘える閃は変わってはいない。

その行動に笑みを浮かべながら閃の上着を預かりシワにならないように折り畳んでしまい、新しい寝間着と帯を持ってくる。着付けの

手伝いをしながら、息が掛かりそうなほどお互いを密着させる。最後の締めとばかりに腹側に留める帯を締める。ふとおでこに掛かる閃の吐息に気づかないふりをしながら一生懸命に手を動かしている。帯が締め終わり離れようとした瞬間、ギョツと抱きしめられた。目の前には閃の少し弛んだ寝間着の向こうに着やせした体が垣間見える。

ドクドクと全力疾走しているかのような鼓動音が聞こえる。それは自分の音なのかそれとも閃のものなのか分からない。

ただいきなりの行動に頭が混乱し、振り払うように閃の体を押し退けた。

スルリと離れた閃の体

ふと目が合う閃は悲しげな表情で見えてきた。

「・・・た、戯れは止めて閃。・・・もう疲れたの・・・休みたいの・・・」

その目を反らして、下を向きながら言い放つと

「・・・そうか・・・すまなかった。休むが良い。」

そういつて伸ばされた手にビクンと反応して、その手を避けて寝台に横になった。横向きになり閃に背を向けながら必死になって目をつぶった。

異常なまでに心臓が高鳴っている。音のない静寂の中ただ自分の心臓の音だけが大きく聞こえた。

だがその音も逆側の寝台が沈むギシツという音によってかき消された。

パサリと布団が捲られ、閃が寝台に入り込んでくるのが分かった。

「お休み神楽・・・」

そういつて背中に閃の熱を感じた。背中から抱きしめられ腹部に回された閃の大きな手。

耳元には正しい呼吸音が聞こえ閃が寝ていることが分かった。

神楽はゆっくりとその手に触れて、声もなく泣いた。

この温もりを他の誰かが知るかもしれないと思うだけで嫉妬の情念で身を焦がしそうになる。この暖かな腕の温もり、包み込む暖かさ。だが、その熱に愛しく思うと同時に離別を早くせねばと思う気持ちも強くなる。

この温もりを手放せなくなってしまうてはいけない。

あまりにも不釣り合いな自分。一刻も早くここから出て行くことを決めながら、今だけはこの温もりに抱かれていたい。

閃の温もりに包まれながら疲れからかすぐに意識は暗闇の中に落ちていった。

久しぶりの朝食

朝日が昇る前に目が覚めた。

昨日泣いたせいか、ぼんやりする頭で今日の事を考えた。

今日、明日と休みは貰っている。建設中の病院や学校の視察に土木場の視察。

兵達の様子に黒の將軍の様子も気になる。彼の背後を調べなければいけない。それに藍光国の姫のこともある。

休みが休みでなくなつたなあと考えながら腹部に回つた閃の手を外して寝台から起きる。

「うんっ」と閃が温もりを探すように手を動かすのを見て愛おしく思ったが、それを振り切り傍にあつた水桶で顔を洗う。ひんやりとした水は霞が掛かつた頭を一瞬で晴らした。

乾いたタオルで顔を拭いた後、いつものように仮面を被る。そして音をたてぬように扉から出て下の階へと移る。竜將軍のための部屋として用意されており、寝間着を脱ぎ、小振りではあるが女の証である胸を平らにするためにサラシを巻く。そしていつものように簡易の軍服を着て下へと降りていく。

門を開けるといつものように朝食が入つた箱が用意されており、平伏している兵に対して

「ありがとう。」

と礼を言つてまた扉を閉める。

朝食の入つた箱を持ちながらまた上へ上へと上がっていく。何時もと同じ行動なのに何処か違う。ふと考える昨日のことが心を引き留める。

昨日流した涙を聴い閃なら気づいたかもしれない。気づいて欲しいという気持ちと気づかないで欲しいという気持ち。葛藤する気持ちが足を鈍らせるが、最後の扉にたどり着くと吹っ切るように深呼吸をして部屋に入った。

まだ閃は目覚めていないようで、寝台が膨らんでいる。

朝の弱い閃の事思い出して出ている口の口角が少しだけあがる。

閃の為に朝食の用意をする。備え付けの机に箱を置き取り皿を並べお茶の用意をする。

お茶のいい匂いが部屋の中に充満し始めた頃寝台の上の住人が動き始めた。

最後の抵抗のようにモゾモゾと動く姿寝起きの悪い子供のようだ。

最後のあがきに終止符を打つため鉄格子のついた窓を開けた。朝日が昇り窓から入った光が寝台の住人に起きるように警告している。それでも閃は起き上がるうとはしない。布団を被り必死の抵抗を示している。

ヤレヤレと溜息を吐いて気合いを入れる

「閃起きて！朝ですよ！」

「あと・・・少しだ・・・け・・・」

モゴモゴと布団の中で抵抗を示す閃に

「ならご飯は一人で食べてくださいね。私は先に出ますので、さようなら」

「はい！起きますす！！今すぐ起きますす！！すぐご飯食べよう！！」

今まで寝ていたのが嘘のように飛び起き、配膳された机へと真っ直ぐにかけていく。

「閃。先ず顔を洗って。それからご飯にしましょう。」

「うー。まだ食べないでいてくれる？」

「ええ。待ってますから、早くしてください。」

バツとかけだし水の入った桶で乱雑にバシャバシャと顔を洗い、手近にあった手ぬぐいでグイグイと顔を拭いて、ものの5秒もかからずに戻ってきた。

水桶も手ぬぐいも散らかっているが、閃の犬のようにパタパタと尻尾を振っているような光景にクスリと笑った。

閃と真向かいの席に仮面を外しながら座り共に朝食を取った。久しぶりの朝食。久しぶりに味のある朝食だと思えた。

戦場では贅沢な食事などそうそうに食べれるものではない。

ましてや、閃と離ればなれの食事は全く味気なく食欲もなかった。

だがこうやって久しぶりの食事で互いに今日のことを話し合い、どうするかを決める。共に考えるべき案件があるなら休みといえど閃の執務室に出向くことを約束した。

何時も道理の1ヶ月前と同じ食事を風景にホツとした。閃が昨日のことを気にしていないことが、何より嬉しかった。問い詰めればギスギスした空気になるのは分かっていた。だからあえて言わない閃にホツと溜息を吐いた。

次世代のために

閃を見送るときに虎を一頭付けた。視察があるので閃の傍にはいられない。警護を虎に任せた。それを理解しているのか、虎もゴロゴロと喉を鳴らして閃に付いていった。

神楽も竜將軍としての休みをとるため、簡易の軍服に何時も道理の面を付けて、外へと出た。出兵のためとはいえ途中で投げ出したような状態だった土木現場が気になっていた。

いくつか門を越えると聞こえてくる男達の威勢のいい声。それは外に向かうにつれてどんどん大きくなる。

壁の向こうには1ヶ月前にはなかった建物が出来上がっていた。まさかとは思ったが、その建物へ向けて足を向けると大勢の怪我を負った兵士達が良い笑顔で仕事をしていた。すると、門近くにいた片腕のない男が

「あああ！！竜將軍！！！！」

とデカイ声をあげた。すると一斉に向けられる視線。蔽つい男達の視線に本当に仮面があつて良かったと思つた。ポーカーフェイスを保ちながら、

「おはよう」

と声をかけた。

「おかえりなさい！！竜將軍！！！！」

「おかえりなさい！！見てくれ俺たちが建てた物を！！」

「がはははは！！竜將軍どうだ俺たちも捨てたもんじゃないだろう！！！」

木材を持っていた奴らや道具箱を持っていた奴らそこら辺にいた兵士達が一斉に竜將軍の元に集まり、取り囲み一斉に話し出した。何を言われているのか分からなくなるほどあちらこちらから自慢する声や笑い声、迎える声に泣きたくなった。

1ヶ月前とは明らかに表情の違う者達で溢れていた。戦争で足がなくなり、腕がなくなり絶望を浮かべていた男達が良い笑顔で笑っている。そして「おかえり」といつて迎えてくれた。途中で投げ出すような形となり、心配していたがそれは杞憂に終わったようだ。

「ハイハイ、お前達。それじゃ竜將軍に何も見せられないじゃないか！ほらほら退いて！！退いて！！」

竜將軍の周りを囲んでいた男達にパンパンと手を叩きながら退けて進んでくる者がいた。

人垣が分かれて目に見えたのは白の將軍阿宗將軍がいた。

「阿宗醫師。おはようございます。」

「おはようございます。竜將軍。いやービックリしましたよ。たった1ヶ月でここまで出来るとは思っても見なかった。素晴らしい采配じゃ。」

ニコニコと笑う阿宗醫師に仮面から出ている口元の口角があがった。

「それよりも中を御覧ください。多くの子供達が来ておりますぞ。」

それに薬草も出来ております。」

「本当か！是非見てみたい！！」

阿宗医師に促されままたばかりの建物に入った。そこには部屋に溢れんばかりのボロボロの服を着た子供達が先生である官吏の役人に勢いよく質問をしていた。

先生である官吏も負けじと色々なことを教え、白熱するバトルのようで喧嘩腰の授業だ。

先生と目が合うとすぐさま平伏をしてきた。キョトンとした子供達が廊下にいる人物に目を向けた。

好奇心の塊の子供達の視線にドキリとしたが

「キヤーーーーー！！竜將軍だ！！」

「すげえーーーー！！本物見ちまった！！」

「本当に仮面付けてる！！！！」

「すげえ！！格好いい！！」

先ほどと変わらず今度は子供達に囲まれた。先生が必死になってとめようとしているが、好奇心の塊の子供達は目の現れた国の英雄に釘付けだった。

「フオフオフオ。竜は子供にも人気ですなあ。ここでは話もできんので別の場所に移りますかのう。」

さっさと逃げた阿宗医師が笑いながら指さす方向に歩こうとするが子供達が行く手を阻む。

「子供達よ、聞きなさい!!」

はつきりと言い放つと、子供達はびしつと背筋を伸ばして固まった。英雄の言葉を一区一言聞き逃せまいと静まりかえった。

「ここで多くのことを学がよい。お前達には多くの可能性を秘めている。次世代をになう子供達よ。大きくなれ！」

「「「「はい!!!!」」」」

大きく返された言葉に頷き返し、今度は歩き出した。握手を求められたりペタペタと触られたりしたが、怒らずにクシャクシャと頭を撫でてやった。

何とか建物内から逃げ出し、木陰にて阿宗医師と並んで立った。

「良き目をしておりますなあ。」

「ああそうだな。可能性を秘めた目だ。」

「違いますよ。あなたですよ。全く持って良い目をしております。」

「???そうか?」

「ええ。貴族官吏の中からまさか平民の子供達を教える先生を選んだとき、無理だと思えました。身分社会の強い中で貴族の物が平民、農民の子供達に教えられる者がいるとは思えなかった。それなのにあなたは見つけていた。これほど良い目をしている者はおりませんのう。まさに竜の目といったところですか?」

「ふつ、何を言うかと思えば。思い違いをなさっておられる。いと簡単なことですよ。たしかに今の官吏のほとんどが貴族ですが、その中でも身分はある。虐げられている者も中にはいるのです。経費削減のときに色々な部署を見に行つたときにそこでそのような者達と多くの人に出会つた。上司の過度の命令に屈服せず反発して頑張る者達を何人も見てきた。その反発精神を次世代の子供達にも養つて貰いたいと頼み込んだのですよ。最初は断られもしましたが、何度も何度も次世代のためだと頼み込んだら、なつてくれました。あとは子供と何処まで向き合えるかです。そこは一種の賭でしたが、私は運が良いようです。」

「こりやまた凄い発言だ！確かにあなたは運が良い！そしてこの国も。あなたとそして良き王が国をになう逸材になつてくれた。私たち老いばれは次世代である貴方たちに座を譲るべきなのでしょうかね？」

「そうならば、すぐにも子供達の先生としてこき使いますのでよろしく願います。」

「おやおやまだこの老体を鞭を打てと？人使いの荒い方じゃ。ならまだまだ現役じゃのう。」

「ハイ。よろしく願います。」

「どつちもどつちじゃ。」

ゆつたりとした時間を過ごしていた。戦いするときやその後の治療という戦いの中、忙しく動いていた時間がゆつくりと流れている。つかの間の平和がとても愛おしく、そして学ぶ子供達の声や生きる

喜びを知った男達の声が安らぎになった。

恋する姫の行動

「そうじゃ次は薬草を見に行くかのう？」

「ええ。」

阿宗医師に導かれながら薬草畑に向かおうとしたときだった

「あ、あの・・・りゅ、・・・竜將軍!！」

か細い声で呼ばれて振り返ると顔を真っ赤にした藍光国の姫紫翠姫とその後ろには陽月と侍女達がいた。

「これは紫翠姫、陽月様。おはようございます。」

「おは・・・おは・・・よう・・・いび・・・いび・・・」

「おはようございます。竜將軍。」

真っ白な肌がリンゴのように真っ赤に染まりながら必死になって挨拶する紫翠姫。

それと打って変わって能面のように表情が全くない陽月。

「こんな朝早くにどうされたのですか？何かございましたか？」

一応竜將軍の客人として受け入れた以上、接待をするのは竜將軍だ。不便な点でもあったただろうかと質問したら、首が取れるんじゃないかと思えるほど紫翠姫が首を横に振る。その時に頭の簪がシヤラシ

ヤラと音をたてている。

「紫翠姫。その様に首を振られれば首を痛めます。落ち着かれよ。」
そう教えると今度は縦に大きく頷きだした。

「陽月様。どうかしてください。これでは姫が首を痛めますよ。」
傍観している陽月に助けを求めると、能面の顔がニヤリと弧を描いた。

「姫落ち着きなさい。竜將軍の前ですよ。」

竜將軍という単語を聞いた姫はピタリと留まり今度は目が潤みだした。ギョツと握った手がスカートを掴み必死にその場に立っている。どうしたものかと竜將軍は隣の阿宗医師に目を向けるところからもニヤニヤと笑っている。

「阿宗医師？」

「いや、罪深い人ですね、竜將軍も。可愛らしい姫を射止めるとは。」

「意味が分かりかねます。それよりも申し訳ない。薬草畑はまた今度いきます。今は藍光を優先します。」

「・・・い、いえ！そんな必要はありません！お・・・お仕事を邪魔・邪魔しませんので・・・わ、私も行きとうございます！！」

初めての姫の意思表示だった。震えながら必死になって見上げてく

る少女に

「決して楽しい場所ではありませんよ。それでも良いのですか？」

「！！！！はい！！！」

「阿宗医師よろしいだろうか？」

「竜將軍が決められたこと、私は異議はありませんよ。」

「では、紫翠姫歩きますがよろしいですか？」

ふとヨロヨロと歩く紫翠姫に手を差し伸べてしまった。手と顔を相互に見比べられ、小さな手が乗った。

「お、お、お願いします！！！」

横でおもいつきり噴き出した阿宗將軍を片目で睨み、薬草畑へと足を向けた。

薬草畑は王城の外れにあった。

プーンと鼻を背けたくなるような独特の嫌な匂いがしてくる。

竜將軍や阿宗医師は慣れているが、慣れていないものにとっては呼吸するのも辛いほどの匂いだ。

扇で口と鼻を押さえて足取りが重くなる紫翠姫に

「ご気分が悪いならどうぞ休まれていた方が・・・」

「い！いえ！だ、大丈夫にございます！！！」

慌てたように歩き出す紫翠だが、フラフラと歩く姿に溜息もつきた

くなるが後ろにいる能面男がじつと見ているのでそれも出来ない。自国の姫を蔑ろにすれば何を言われるか分からない。しっかりと握りしめてくる彼女を突き放すことも出来ず、ゆっくりとした動作で寄り添うように歩く姿を多くの官吏達に目撃されることとなった。薬草畑も本当に畑だった。遠くの方で畑を耕す兵士が米粒のように見えるほどかなりの広さを持っている。目を避けることも出来ない場所はこの白き肌の王女にはきつい場所だろう。

「こちらへ。」

水まきの為の井戸の近くに設置された小さな休憩所に案内すると、紫翠姫を座らせた。

「ここなら日も当たりません。休憩されるが良い。私は少しだけ畑の中を見てきますので、申し訳ありませんがここで少しお待ちいただけませんか？」

「・・・あの・・・ついていつては・・・？」

「申し訳ありませんが、この畑の中には様々な薬草があります。使い方間違えば毒草となる物もたくさんあります。たくさんのお虫もいますし、そのような危険な場所に姫をお連れするわけにはいきません。ご理解いただけませんか？」

休憩所の椅子に座った紫翠に跪いた状態で問うと、姫の頬はさらに赤みを帯びた。

必死になって頷く姿に

「ありがとうございます。すぐ戻ります故、お待ちください。」

うつすらと笑みを浮かべ、畑へと足を向けた。その後ろではニヤニヤと笑う阿宗医師に変な目を向けたが、きつちりとここに目的を果たそうと考えを切り替えた。

畑はたくさんのお草に溢れかえっていた。成長も順調で、これだけの量があれば国民の為の分にも回せるほどの量があるだろう。

一通り畑を見て回ると、既に太陽が空高く上がっている。

そう言えば朝に閃と昼食を共に取るという約束をしていたことを思い出した。

そしてふと畑の傍にある休憩所に目をやると紫翠姫がこちらを熱心に見ていた。目が合うと扇で顔を隠したりして可愛い表情をされる。その動作があまりにも小動物のように愛らしいので手を振ってしまった。すると恐る恐るといった形で手を振り替えてくれた。優しい姫だなあと考えていると、

「国に春が来たと思ったたら竜將軍にも春到来ですか？」

と傍にいた阿宗医師から言われた。

「?どう意味ですか？」

「おやおや竜將軍は色恋には初心なのですか？」

「何を言うかと思えば、勘違いなされるな。紫翠様は客人です。もてなすのが私の役目です。それ以上でもそれ以下でもありません。」

「そうですね。それなら良いのですが。気をつけなされ恋は盲目。付ける薬などございませぬからな。」

意味深的な言葉に詰まりながらも、昼食を取るかと休憩所にいる紫翠姫の元に向かった。

「紫翠姫。お待たせして申し訳ありません。お暇だったでしょう？」

「いえ！その・・・あの・・・色々拝見できたので楽しゅうございました。」

「それは良かった。それよりお腹はすかれませんか？共に昼食はどうですか？陛下も出席されますのでいかがでしょうか？」

「・・・へい・・・か？それは閃王様のことですか・・・？」

「はい。昼食の約束をしておりますので、姫も一緒にいかがですか？」

姫の白い顔がさらに白さを増す。扇を持つ手が震えだしている。

「陛下のことを知る良い機会です。陛下が何かを言われるなら私が守りますので、よろしければどうですか？もちろん陽月様もどうぞ。和睦の件についても陛下に申し上げますので、助力をお願いしたい。」

姫一人では心細かろうと後ろに控えている陽月にも声をかける。

「姫が決めたことに従います。」

陽月の答えにピクリと震えた紫翠は涙を溜めた目で竜將軍を見上げてきた。

「大丈夫です。陛下はお優しき方ですよ。」

竜將軍の再度の誘いに

「……はい。お相伴になります。」

震える声を抑えて紫翠は答えた。

拷問の昼食（前書き）

閃視点になります。

拷問の昼食

閃は目の前の光景が信じられなかった。

今閃がいるのは執務室の隣の王専用の休憩室。

そこで神楽と夫婦水入らずの昼食を取ろうと約束し、朝から古狸たちと会議や仕事やり遂げたというのに、神楽は一人でこの部屋にやっつてこなかった。

「紫翠様、お味はどうですか？？国の味はお嫌いではありませんか？」

愛しい妻が男装をしてるだけで十分おかしいが、夫である自分を差し置いて別の女、それも俺の愛人候補でやって来た女の世話をしている。

視線で人を殺せるなら俺は確実にこの目の前にいる藍光の王女を八つ裂きにしているだろうが、その前にいる妻の神楽こと竜將軍が防波堤になり、その視線が和らいている。

というより、藍光の女は俺なんぞに目を向けずに神楽に熱視線を送っている。

傍に控えている藍光の宰相は何も言わずに木偶の坊のように立っているだけ。

何とか言えよ！！お前のとこの王女が落としに来たのは俺だろ！！なのに何で神楽に視線を送ってるんだよ！！馬鹿だろうお前の所の女は！！

どれだけ心の罵倒しようが、誰に聞こえるのでもなく煮えたぎるよくな想いが空気を重くする。

「陛下。昼食にそのような雰囲気を出さないでください。せつかくの料理がまずくなります。」

やっとこつちを向いたかと思えば何故俺が怒られなければならない！！

幼子をしかりつけるような竜將軍の叱咤に目を反らして反抗すればヤレヤレといった竜將軍の溜息が聞こえた。

誰も好きこのんでこのような態度を取っているのではない！！

俺が苛つくのはこのほかにも理由はあった。昨日から神楽の様子がおかしかった。

初めて俺の手を拒絶した。

イヤ確かに俺が急いだのがいけなかったのかもしれないが、色々に分かって欲しい。

恋求めた相手が1ヶ月ぶりに目の前にいる。

二人っきりの空間で風呂上がりの濡れた髪に、薄手の寝間着を羽織り濡れた目をして立っていれば、成人男性として不能なわけではないので色々な事情があるんだ。

つい、手を伸ばして抱きしめたとき神楽からふんわりと匂う甘い匂いに俺の理性なんてものは吹っ飛んでしまっかと思えた。

だがそれから先には進めなかった。

俺が抱きしめたことを「戯れ」と神楽は言った。信じられるだろうか？夫が妻を抱きしめることが戯れだと？

既に結婚して半年が過ぎ、契りは行っではないが、それなりに神楽へ愛情表現をしてきたつもりだ。それなのに戯れだと？

神楽には俺の愛情は一切伝わっていなかったのだと痛感した。

手を伸ばして触れようとした手を避けられたときは目の前が真っ暗になった。

俺をすり抜け寝台に横になり背を向ける妻に、俺は危機を感じた。

こんなに傍にいるのに妻の心が遠い。離れていきそうで、怖かった。だから抱きしめて眠った。これ以上離れていけないように。遠くに行ってしまうないように懐に入れて守れるように抱きしめて眠った。俺が眠ったふりをすると、妻が触れてくるのが分かった。そしてまた涙を流す。

俺はその涙をいつかぬぐえることが出来るのだろうか？

いつか妻は俺の前で堂々と泣いてくれることがあるだろうか？

愛しい存在をただ俺は抱きしめるしかなかった。

昨日のことを考えると頭が痛い。そして目の前の光景が信じられずに、あまり箸を付けずに早々に立ち去った。

妻に対して恋慕の気持ちを抱く者の様など見たくもない。

いや、妻を誰の目にも触れさせたくない。藍光の国の女の目玉をくり抜き八つ裂きにして国に送り返しても良い。戦になるのが構わない。

どれだけの人が犠牲になろうと構わなかった。

そんなどす黒い気持ち溢れてくる。

それを悟られまいと席を立った。

王女の想い？

私は藍光国第一王女紫翠。王家に生まれし者は国のため、民のために望まぬ結婚が迫られるのが世の常であることは理解しております。ですが、まさか私の嫁ぎ先が？国とは、あまりの非道に父を心から憎みました。

我が藍光国は他国との和睦などは行っておらず独立国家として成り立っております。他国と貿易をせずとも我が国は豊かな森に豊かな海があり、それは天然の防壁ともなり我が国は確固たる地盤のもと繁栄をしてきました。

しかし、近年隣国である露国の情勢が焦臭く、国境である森付近で事件が多発し、多くの犠牲者が出始めました。

すぐに我が国の軍が動きましたが、戦闘の場数が違いすぎて連戦の敗戦を強いられました。

王である父は源、焔や采駕の国々に助けを求めました。

交流がなくても、7カ国は昔から何処かの国の危機に遭遇せしときは他の国が助けるべしという暗黙の了解がありました。

それを父は頼りました。ですが、結果は一切の返答がなかったのです。

我が国は多大なる被害を受けました。

多くの村が襲われ、多くの男達が殺され、女達は奪われ残された子供や老人達はボロボロの状態でした。

ですが吉報がやってきたのです。我々の救済を無視した源、焔、采駕の3カ国が？国に倒されたという報告でした。

半年ほど前に新しい王が就いてからと言うもの？国は見る見るうちに成長を成し遂げています。あれほど疲弊していた大国がここまで持ち直すとは藍光始まって以来の最年少の宰相である陽月ですら予

想だにしていませんでした。

ですが、？国は立て直していましたが、連戦の戦闘を繰り返しているとも聞きました。

戦は命を奪うだけではなく、国自体を疲弊させ、国自体をダメにしてしまいます。

だから？国国王が非道としか思えません。

それなのに、いきなり父親から言われた言葉に呆然としました。

「？国国王閃王陛下の元に嫁げ」

王女として望まぬ結婚があるとは頭では分かっていたましたが、心は違いました。

何度泣き叫んで、止めるように求めましたが既に決定事項だと言われしました。

それも身分の低い寵妃以外は側室もおらず、正妻の座も空席のままだという。

そこに王家の娘が嫁に来るとは正妻に迎えるように無言の圧力をかけるようなものだ。

信じられなかった。実の娘にこのような非道が行えるのかと。

？国にはいるまで毎日泣き暮らした。

この命を捨て去ることも考えた。

だがそうなれば5つ下の妹にお鉢が回るかもしれないと思うと、捨てるに捨てられなかった。

？国に着いた日、その日は戦に行っていた軍の大將が勝って凱旋をする日だったようです。

大国だけあって都に真っ直ぐ一本通る大通りには両脇を多くの民が歓迎し、花吹雪が待って將軍の凱旋を喜んでいた。

戦をする人の凱旋を喜ぶなど考えられぬと、喜んでいる民の顔を嫌

悪の思いで見つめていた。

そして、凱旋の祝いに宴を開くこととなり、その時に私も献上されることとなった。

それも鳥かごに入って献上されるなど、ここまで来れば諦めもつく。心を壊し、何も見ず、何も聞かず、全てを塞げばいい。

そんな想いで私は鳥かごの中に入った。

黒い幕が張られ、外の様子を窺い知ることは出来ないが、持ち上げられていた籠が下ろされたのだ。宴の中央に下ろされたのだろう。

陽月のくぐもった声が聞こえる。

もう間もなくで幕が取り外され辱めを受けるのだらう。

ただ怖かった。

膝の上に置いた手がカタカタと震えている。握りしめすぎた手が白くなり、血の通わない死人のような手になっている。

バツと暗い闇から差し込む光。

そして真っ正面に見える玉座に座った氷のように冷たく狂気に満ちた目がこちらを見下ろしていた。

必死にふるえを押しさえようと唇を噛んだが、王の冷たい目は一向に変わらない。それよりさらに怒気や殺気やどす黒いものが向けられてくる。

呼吸すらうまくできない。のど元に冷たい刃を突きつけられたように一歩でも動けば殺されると感じた。

そして命じられた。

「殺せ」と。

王女の想い？

一瞬何を言われたのか分からなかったが、だがその言葉が私を解放すると思え安堵した。

この人を見なくてすむ。

この人の目に映らなくてすむ。

それはとてつもない喜びだと思えた。

だがその間に入った変わった人物。

顔の半分以上を真っ白な仮面で覆い。目元だけがくり抜かれ一切の感情が読み取れない。

青年と言うには若すぎるような背丈と声、だが少年と言うには落ち着きを払った行動

曖昧な人なのに何故だろう。目が離せない。

そして真っ向から王と向き合う強さに鼓動が高まった。

頭に周りの音も色も入ってこない。私の全ての五感が目の前に立つ仮面を付けた人に奪われてしまった。

惚けたように見ていると、その人が鳥かこの入り口を開けて私に向かつて手を伸ばしていた。

指先が少し緑色に変色し切り傷が多く見られる。

仮面から垣間見える瞳は優しげにこちらを見ている。

「出てこられよ。そなたは我が客。我が客がこのような所ではおかしからう？」

そう話しかけられ、ハツとした。

この人は私を人としてみている。

鳥かごに入れられ辱めを受けている私に手を伸ばしている。

混乱して傍にいる陽月に目を向けると彼からは一切の言葉はなかった。そしてもう一度仮面の人に目を向けると変わらずの優しげな目がこちらを見ていた。

するとすんなりと私の手は伸びて伸ばされた手に重なった。

大きな手だと思っていたのにそこまで大きくはなく、だがしっかりと手の皮が厚い手だった。

それにドキツとしてしまい転びそうになった私を仮面の方は助けてくださいました。

そして抱き上げて、歩き出されました。

このような無礼は極刑に値するものなのに宰相である陽月も、誰も咎めはしない。

それに怒るべき私が怒れないのだ。

胸が高鳴り、見つめていたいと思える。

それから四阿に連れられ食事をした。その時になって初めて彼が？国の軍の総大将竜将軍である事を知った。ただ呆然と聞きながら笑いを含めて言う言い方についてい私も笑ってしまった。

本当に自然に出た笑みに、体の力が抜けた。

カチンコチンに固まっていた頭がやっとな動き出した。

そして周りを見つめて初めて気づいた。私はこの竜将軍に恋をしている。

人として扱ってくださったこの方に思いを寄せている。

自覚すると想いはどんどん成長しました。部屋に案内された後、ほおっと竜将軍のことを考えておりました。

仮面越しに見える瞳に慈悲を感じ、物腰も柔らかく思い出すだけでも心臓を鷲掴みされたように鼓動が高鳴ります。

「姫よろしいでしょうか？」

「陽月。何用ですか？」

一緒に部屋に案内された陽月が音もなく近づいてきた。怒られるのでしょうかね。本当であれば？王陛下を虜にしなければいけないのに、逆に私が？国の將軍に惚れてしまうなんて、呆れているのでしょうか。

沈痛な面持ち陽月の言葉を待っていました。

「このまま竜將軍を落とさない。」

「ええ？」

「この国は王よりも今は竜將軍の方が人気があります。ましてや將軍という地位のみで他の身分も何もありません。こちらが王族である以上優位に婚礼が勧められます。奥方がいるとも聞きませんので、彼を落とせば確実に我が国藍光は安泰です。」

「・・・そうですね。私が竜將軍の妻に・・・」

あの方の傍に横に立てる。そう思うだけで顔が熱くなる。

「ええそうですね。陽月。私あの方の竜將軍の妻になりたい。竜將軍の妻になれるよう協力してちょうだい。」

「御意」

私は決意しました。竜將軍のそばに立てるように一步を踏み出そう。

王女の想い？

その一步は次の日から始まった。

朝早くに起きて、念入りに髪を整え、薄い化粧をして少しでも大人の女性に見えるように頑張りましたが、やはり鏡に映るのは何時もと変わらぬ私の顔。

それでも気合いを込めて、もう一度鏡を見て気合いを入れた。

「姫。竜將軍は今日はお休みのようですが、どうやら王城内に作られた施設の視察に行かれるようです。ここはお近づきになるチャンスです。参りましょう。」

珍しく長分を話す陽月に驚きはしたものの、コクンと頷き外へと足を向けた。

こんなに歩くのは久しぶりだったけど、きつくはなかった。

まるで羽が生えたかのように足が前々へと進んでいく。早くあの方に会いたいという気持ちが抑えられない。

「姫あちらに・・・」

陽月の指さす方向に竜將軍がいた。

スラリと伸びた身長。朝日の下でのあの白い仮面は異様だが、私には胸を高鳴らせる要員でしかない。

傍のご老人と何処かに向かおうとされているのを引き留めたくて

「あ、あの・・・りゅ、・・・竜將軍！！」

必死になって口を動かした。

渴いた口はうまくしたが回らず途切れ途切れにしか話せず恥ずかし

くて真っ赤になる。
そんな私を笑いもせず

「これは紫翠姫、陽月様。おはようございます。」

垣間見える瞳からまるで春の日射しのような暖かさを感じます。

「おは・・・おは・・・よう・・・じゃ・・・ございます・・・」

やっと紡げた言葉は幼子のようにで恥ずかしいが今の私はこれが精一杯。

「こんな朝早くにどうされたのですか？何かございましたか？」

閃王とは違い私たちを気遣ってくださるような言い方に、やはり心温まるモノがある。

何とか返事をしたいが視線が合うと鼓動が激しすぎて何を言えたいのか分からなくなって必死になって首を振ることしかできなかった。

そんな私を心配してくださり、ほんの少しだけ心に余裕が出来た。どうやこの阿宗医師という方と一緒に薬草畑に行こうとなされているようだ。

会ってすぐお別れとは寂しくて、かといってなんと伝えればいいのかも分からない。

ふと横にいる陽月に目を向けると視線が合い、そしてゆっくりと竜將軍と変えた。

「！！！」

そうだったわ！！私は竜將軍とお近づきにならないといけない。

ここで怯んでしまつてはいけない！！

「・・・い、いえ！そんな必要はありません！！お・・・お仕事を邪魔・邪魔しませんので・・・わ、私も行きとつございます！！」

出てきた言葉は本心だった。破れかぶれのような捨て身の戦法は竜將軍も陽月も驚いていたようだが竜將軍は笑つて許してくださいさつた。

薬草畑は本当にたくさんの薬草が生えていた。

色とりどりの花があるような光景ではない。天日干しされた薬草や黒い物体の手足のある動物みたいなモノ（すぐに目を反らしたのでよく分かりません。）そんなモノがたくさんある場所は何とも異臭を漂わせていた。

扇で仰げば仰ぐほど自分にまわりついているのではないかと思えるほど、臭い。

ゆっくり小さく呼吸を繰り返しているが、頭がクラクラしてくる。

それでも畑にいる竜將軍がたまにこちらに視線を投げかけてくださる度に、その視線を絶対に逃したくなくて一生懸命畑の傍で待っていた。

竜將軍はとても素晴らしい方でした。

たくさん兵やたくさん医師などに囲まれそのお姿が見えなくなることがありましたが、竜將軍はその人達を突き放すことなく丁寧に教え、指示しておりました。

薬草の知識から国の経済や救済について様々な問題が問われていても、突っぱねることなく何らかの答えを出して対応されていました。その知識の深さに藍光国の頭脳といわれている陽月ですら、

「なるほど」

と感嘆の声を上げるほどでした。

天高く太陽が昇ったときに、竜將軍がこちらに向かって来られた。

これだけ広い畑を動き回っても息一つ乱さない彼が格好良くて、流れるような動きに目が奪われていた。

そしてお昼を共にどうかといわれて嬉しかったのに、王も一緒だといわれたときに背筋が凍った。

思い出すのは昨日の冷え切った視線。

見られているということだけで、呼吸も鼓動も凍てつき生きることが拒否しそうになるほどの恐怖がある。

断りたかったが竜將軍が

「守る。」

と一言言ってくださり、頷いてしまった。

竜將軍は気づいているのだろうか？

先ほどからこちらに向ける視線が殺気立っているのに。

お昼の暖かな日射しが降り注いでいるのに極寒の寒さが全身を襲う。手に持つ箸がカタカタと震えて、うまく握めない。

顔を上げること呼吸をすることも出来ずにこのまま死んでしまうのかとも思えたが、

「陛下。昼食にそのような雰囲気を出さないでください。せつかくの料理がまずくなります。」

王を全く敬うことなく堂々と言った竜將軍にポカーンと見てしまった。

まるで幼子を叱るような叱責に王は何も言わずにさっさと席を立たれた

「あの……よろしかったのですか？」

怖々と竜將軍に尋ねると

「怖かったでしょう？でもあんな表現でしか自分を表現できない、あの方の可愛いところですよ全く……。だから怖がらないでくださいね。」

先ほどとは違う優しい声。

だけど何を言っているのか良く理解できない。

あの王が可愛い???

あの射殺すような視線が表現のしかた?

信じられないがそれを可愛いと言つてのけるこの方もまた化け物なんだと思えたが、やはり仮面から覗く瞳は何処までも優しかった。

出過ぎた行い

神楽は困っていた。

閃に紫翠姫のことを知って欲しくて昼食へと呼んだ。

紫翠姫は綺麗な少女だ。溢れ出るような品格に流れるような動作。

王のそばに立つ女性と思える。

先ほどの薬草畑での一面は可愛らしい場面ではあったが、これなら王も気に入ってくださるだろうと思ったのに、閃が不機嫌なオーラをこれ以上ないほど醸し出した。

紫翠姫は顔面蒼白で今にも倒れそうなほどな状態で、護衛に付けていた虎たちは本能から早々に逃げ出してしまっている。唯一この状況下で顔色が変わらないとしたら藍光の宰相陽月ぐらいだろう。額にはうつすらと冷や汗はかいてるものの、ひよろりと立った姿は何時もと変わらない。

これ以上は紫翠姫が可哀想だと、閃を怒るとふてくされた顔をして早々に席を立ってしまった。

姫を見ると何とか気力で頑張っている姿に本当に申し訳ないと想いながら、閃が立った席を見る。

減っていない料理

何も食べずにここまま午後の執務をするのだろうか？

何かしらこの料理を持っていきたいが、震えた姫をおいていくことも出来ない。

どうしようかと困っていると

「竜將軍これにて我らは失礼します。姫これ以上竜將軍にご迷惑をかけてはいけませんよ。」

天の助けと言わんばかりに陽月が口を開いた

垂れかかっていることに気づいた紫翠姫はすぐさま体を起こし、謝って部屋へと戻られた。まるで台風のような彼らにどっと疲れを感じたが、これで閃のもとにいけると残された料理を小振りの皿に盛り、閃のいる執務室に足を向けた。

閃はこちらに背を向けた状態で木簡を睨んでいた。

何をそんなに殺気だった目で木簡を見ているのかと思ったら、木簡は逆さを向いている。

仕事しておらずにストライキをしているようだ。

「陛下、木簡が逆さを向いております。」

神楽の声にやっと気づいたかのように慌てて木簡を正しい方に戻しながら

「これはその、新しい読み方を発見しよう」と・・・

「そうですか。ですが間違いがあるといけないので正しく読んでください。」

うつつと唸っている閃の前に料理を出した。

それと同時に閃のお腹からグッグーと音がした。

「食べ残しは勿体ないのでご協力いただけませんか？」

閃の機嫌を損ねないように下手に出ると

「しょうがないなあ」

と喋って箸を手を取っていた。

「陛下、紫翠姫はお嫌いですか？」

持ってきた料理が最後の一口になったときに竜將軍は口を開いた。

「・・・嫌いだ。」

最後の一口を放り込みまたブスツと頬を膨らました閃に

「何処がですか？良き方だと思えますが。王の傍に・・・」

「王の傍にだと！！私には最愛の妻がいる！！それ以上娶るつもりも、誰かを傍に置くつもりもない！！妻がおればよい！！」

「ですが、藍光の第一王女ですよ。国同士のためにも紫翠殿を・・・
「だったら藍光と戦をして滅ぼせばよい！！？国に仇なすというのなら武力を持って制圧する！！」

「陛下は変わってしまったわね。武力でしか国を押さえることが出来ないとおもっていらっしゃる。それでは国は疲弊します。友好的な方法で」

「友好的が方法があの子を妻にすることだというなら、俺は国を捨てる！！俺は妻が神楽がいるから国を守っているだけだ！！神楽の世界を守っているだけだ！！それ以外に俺がここで国を守る理由なんて有りはしない！！」

言い切った閃は全身で怒りを露わにしていたが、瞳だけは今にも泣きそうなほど弱っていた。

王の怒声が聞こえたのか外が慌ただしくなっている。神楽としてい

るわけにはいかずゆっくり息を吐き出すと竜將軍の仮面を被り

「申し訳ありませんでした。出過ぎたまねをしました。」

「はい」

そう言つて扉から出ようとする

「……竜將軍、あまりあの女に近づくな……」

風に乗つて閃の声が聞こえた気がした。

振り向いても閃は執務に向かいこちらには背を向けていた。
気のせいだと思ひ今度こそ扉から出て行つた。

出過ぎた行い（後書き）

19日に短編を「外伝 王の竜玉」の方でアップ予定です。そちらもお楽しみください。

互いの利害？

さてこれからどうしよう。視察も終わり閃との昼食もとった。といつてもかなり時間を費やしてしまい、日もだいぶ傾き始めている。

後やるべきことといえば先の戦いで分かった三老の一人燕長官と黒の將軍玄偉宗卓の敵との密約についてだ。これはまた難しい問題だ。

武官と文官は国を支えるという名目は同じだが常に対立する者同士確実に互いを忌み嫌い合った手いる。もしどちらか一方に偵察をしに行けばトカゲの尻尾のように切られるだろう。

それがあつてはダメだ！！？国の膿を一度に王の手によってだすことで国は変わる。

人が変わる。閃が英雄として名を上げることが出来る！！敵を利用しようとしているのはこちらと同じか。

自嘲めいた笑みを零して、武官は文官どちらを調べるかは大きな分かれ道だが竜將軍は、迷っていた。

「おやこれはこれは、麗しの竜將軍ではないですか？」

後ろからかけられた声に今日は厄日だと思えた。

振り返りたくもないがこちらに近づく足音。

いくら傘下におさめたとはいえ一国の王子を無視することは竜將軍にはすることは出来ずに、イヤイヤながらに振り返るといつもにもまして色気をまき散らす礼音王子がいた。

簡素な紺色一色の服装に見えるが、生地は絹から作られているのか光に当たると光沢が見える。

今神樂が着ているのは簡素な綿生地 of 服装。軍のトップである竜將軍が何とも嘆かわしい格好だが、いずれ去る身で豪華な衣装などは必要ない。そんな費用に充てるくらいなら薬草の肥料や王都で働く者の賃金を少しでも増やしたい。

故に公式の仕事以外は簡素な衣装を何時も身に纏っている神樂にとつては、礼音の着る服は質の違いを見せつけられて、嫌な気分になる。

「これは礼音王子。何用ですか？用がないなら失礼したいのだが。」

これ以上ないほどの嫌みを言いながらもそれを気にした様子はなく礼音は竜將軍の前で高位の婦人に対する礼をした。

「どういう意味です？返答次第で殿下を侮辱罪で処罰できますよ。」

「深い意味はありませんよ。ただ女性に対する礼をとっているだけです。あなたなら良くお解りのはずだが？」

何でも知っているような目が竜將軍を見つめてくるが、何ら思うことはない。

「それより、竜將軍は源国について何か探っておられるようですが、お力になれませんか？」

ニヤリと笑う礼音にヒヤリと嫌な汗が背筋を流れる。

確かに源国と黒の將軍と燕官吏の不正が見つかっている。その情報集めをしていたが隠密に行動している。なのに何故他国のそれも王子が知っている。

先ほどから変わらない礼音の様子に手合わせはしたことはないが強

いと感じる。他国を探っていたなど褒められたことではなく、どう言い逃れをしようかと沈黙を持って考えていると

「別に言い訳など無用ですよ。私も源国の焦臭い行動は知っていました。そこでたまたま貴方が探っているのが見えたので。互いの利害は一致してると思いますよ、どうですか？」

「利害とは？」

「源と眷国は隣国です。昔から因縁のある同士なのですよ。今回は同盟で一緒に戦をしましたが、隙があれば因縁つけて源国と戦っていたでしょう。まあ互いに貴方に負けましたが。」

互いの利害？（後書き）

一ヶ月ぶりぐらいの更新で申し訳ありません。

上半期の締めめの9月を何とか乗り越え執筆できました。

今月間に5〜10話ほど掲載予定です。

そのあとまたお休み期間をもらって執筆して怒濤の勢いで上げる予定です。

最後の締め当りは出来ているのにそれまでの道のりが長い！！

ここまで読んでいただきありがとうございます。

互いの利害？

「なるほど。礼音様にとって源国とは目の上のたんこぶ。排除したいもの。ここで私に源国と我が国の裏切り者の内通が見つかれば？ 国は源国を撃つ理由となる。憲国にとってはありがたい存在と云うことだな。」

笑みをたたえた礼音はさらに笑みを深めて、わざとらしく拍手をする。

「さすが、竜將軍。ご理解が早い。？ 国は膿の排出、我が国は源国の失脚。そして？ 国とさらなる友好が結べればさらに有益。互いの利害が一致していると思えますよ。」

拍手を白けた目で見ながら竜將軍は背を向けた。

「それはどうかな？」

「といたしますと？」

「確かに内通者は痛い存在だが、源国と戦う理由にはならない。私は陛下の敵となるものを倒すだけです。陛下を害するものを全て倒すのみです。貴方の手を借りずとも敵は倒します。また貴方が敵になるようなことがある場合、例え一国の王子であろうと容赦はしません。」

最後を強調づけながら背を向けて歩き出そうとしたが

「なら閃陛下の為ならどうですか？」

「何？」

足が止まった。

「色々な人が刺客を閃王陛下と竜將軍に向けて放っています。」

「知っている。すでに何名か倒してきちんと礼状と共に送ってきた相手に返した。」

「ええ。それは知っていますが、ですが刺客の中に露国の者はいましたか？」

「何故私が貴方に陛下の刺客について話さないといけない！」

何故自国のトップシークレットの話を他国の王子に話さなければならぬ。意味が分からないとばかりに大きな溜息を吐きながら怒気を含ませて言い放ったが

礼音は含んだ笑みを引っ込めて表情を改めた。ふざけた雰囲気ガラリと変わり真剣を交えるような張り詰める緊張感が礼音から放たれる。ビリビリと肌に感じる強さはとっさに剣に手が伸びそうになるが、理性が何とか止めた。周りに生き物の気配が消えたかのように静まりかえった空間で

「露国の刺客は気をつける。他国とは違う卑劣な強さを持っている。武こそが正義。武で成り立つ国だ。例えば貴方が強かろうと油断はするな。」

礼音の声が響いた。

「……露国について何か知っているのか？」

礼音の強さに圧倒されながら何とか返答できたが、弱腰な返答だ。

「知りたければ、部屋に来られよ。お話ししたいことがあります。」

仮面越しに礼音の表情を覗うが先ほどと変わらず真剣みを帯びている。

何を考えているのか分からない表情に舌打ちしたい気分だ。

だが、露国は乱戦が続きまともな情報が入ってこない。

暗殺や殺し合いが日常の露国で制圧が可能だろうか？

制圧するにはその国を知らなければただ上から押しつけただけの武力の制圧だ。

露国の情報は喉から手が出るほど欲しい。

そのために虎穴に入るのか？

「いかかかな竜將軍？」

しばらくして礼音が嫌な笑みを浮かべて返答を求めてきた。

「お願いしよう」

こちらも負けずに口角をあげて笑みを浮かべた。

ふんっ！良いだろう！

そちらが何を考えているか分からないが虎穴に入らずんば虎児を得ずだ！

私は陛下の竜だ！！虎だろうが何だろうが仇なすものを倒すだけだ！！

歩みを止めていた足を再度動かし、虎穴に飛び込みに行った。

互いの利害？

「借りている部屋ですがどうぞ。」

扉を開けて中へと促す礼音に

「失礼する」

一応の礼儀で断りを入れて扉を潜った。

やはり一国の王子に用意された部屋ということあってそれなりの調度品が配置されている。

されど何というか、生活感が全くない。

部屋に置いていたら邪魔だろうと思えるような剥製や古めかしい大きな壺の骨董品。

それが塵一つ落ちていない生活感の皆無の空間で何とも息苦しく感じる。

城仕えの者達が掃除しているのは分かっているが、何とも落ち着かない空間で閃ではない男と一つの空間にいるのはさらに落ち着かなくなる

それに気づかれないように

「早速だが露国のことをお聞きしたい」

平素を装いながら聞いてみた。

「まあまあ。そう焦らずに今お茶を入れます。どうぞ座ってお寛ぎください。」

何処からか茶器を出しながら茶を用意し始め、何とも肩すかしを食らう。

さつさと終わらせこの部屋から出たかったが、簡単に終わる話でもないなと思い直し勧められるままに席へと座った。

コトンと置かれた茶器からはスツとした香りが広がり、匂いに誘われるままに手を取ってコクリと一口口に含む。

意外と緊張していたのか渴いた口の中に広がった温かな茶は、緊張していた体に染み渡りほつと溜息をついた。

「疑われないのか？」

ほつと溜息をついた神楽を驚いた表情で見つめる礼音に

「何だ？毒でも入れたのですか？」

飲んだ感じではピリリとした刺激も嫌な匂いもなかった普通の茶だと思つて飲んだが毒で入れたのかと思つて残っている茶に視線を落とすと

「ぶつくくくくくく！！」

礼音が腹を抱えて笑い出した。

「一体何だ？」

「あはははは！！イヤイヤすみません。あはは。貴方は本当に飽きない方だ。普通敵国の出した者を何の躊躇いもなしに口に含んだり

はしませんよ。それなのに貴方は何の躊躇いもなく含んだ。そればかりが毒が入っていたのかと聞き返してきた！！これ以上面白い方はいませんよ！！」

目尻に涙を浮かべながら笑う礼音に本当に一国の王子かと疑いたくなつたが

まあ確かにそうだ。

敵国の者が出してきたものを私はためらいなく口にした。本当であれば毒味や何らかの対処をすべき所なのだろうが、私はそんなことが嫌いだ。

相手を信じるには誠心誠意こちらも答えなければ、相手は私を信じてください。それに毒ならいくらかの耐性が出来ているし怖いものもなかった。

虎穴の中にわざわざ入ったのだ、毒一つに怖がる理由なんて無い。

「失礼、竜將軍。貴方は本当に面白い方だ。本当に興味惹かれる存在だ。」

「そんなことより露国のことを」

「まあまあそういわずに先ずはお互いのことを知り合いましょう。

先ずはきちん自己紹介を。私は魯国第2王子、宗礼音そうれおん。兄が王位を継いだので私は気ままな將軍生活です。」

「・・・私は竜だ。それ以上それ以下の名はない。」

「おや？神楽という名ではないのですか？」

今ほど反応しなかった自分を褒めてやりたい。

その名が聞こえた瞬間、ドクンと心臓が高鳴った。

息を呑みそうになったが何時も道理の呼吸が出来た。
茶器を掴んだままの手は震えてもいない。

「……それは側室様の名です。私の名ではありません。」

「それでも貴方は神楽様でしょうか？」

礼音の瞳は何もかもを見通しているように淀みなく仮面越しに覗いてくる。

真つ向からその瞳を見返すことが何だかとても恐ろしいことのように思えて、震えそうになる手を必死に誤魔化して席から立ち上がるうとした。

だが、

「失礼。竜將軍でしたね。すいませんどうも私は人を不快にさせるのが得意のようなので」

ニコリと笑った表情は口角があがっているのに全く笑みには見えな
い。

胡散臭さが倍増している笑みに

「話し合いに来たのです。それ以上の話をする気はない。」

釘を刺した。

「ハイもちろん。それでは露国について話しましょうか？」

そう言って話し出した礼音に上から見下ろす形では失礼と思い、席に座り直してその話に耳を傾けた。

壊れだした齒車？

「はあ〜」

大きな溜息を吐きながら寝間着から軍服へと着替える。
慣れた手つきで小振りな胸にサラシを巻き付け、苦しくない程度に結ぶ。

また一日が始まると思うと何とも気が重い。

あれから一月もの時間がたった。

たった一月かと思われるかもしれないがその中身は何とも濃いモノとなっている。

この一ヶ月で大きく変わったことは5つある。

先ず一つ目、政に再度参加するようになり、三老達や他の官吏の者達と毎日対立しては激しい舌戦を繰り広げている。

古狸の親父達はのらりくらりと

「検討の上ご報告を」

「過去の資料を読み返した後返答を」

など使い古された返答で何度ぶち切れたか定かではないが、それでも何とか権利を得て法を動かし国が少しずつ上向きに上がっていった。

また三老から無理難題を押しつけられることはあったが、根気強く応戦したところ凱長官に手直しはされたものの8割方案件を通して貰えた。

少しずつだが着実に竜将軍が認められてきているのを感じられた。

二つ目は医療方面だ。

各国との友好条件として竜將軍が提示したのは物資の流通だけではなく医療の知識の共有を必須条件として出した。薬草の使い方や新しい薬の対策など王族専用の医師だけでなく民間療法の医師にも話し合いの場に呼んで会議をするなど違った一面で国同士を友好を深めていった。

特に竜將軍の医療の技術は群を抜いており、他国の医師が弟子になりたいと乗り込んでくるほどのものであった。

快くそれを受け入れたもの日に日にその数は増えていくので、短期の人数募集で勉強会をするといった形になり、それを自国に持ち帰り皆に教えるようにという形になった。

壊れだした齒車？

三つめは近衛兵隊だ。

一気にふくれあがった近衛兵隊の部下達は王都に戻り次第何らかの仕事を与えることになったが、他の部署から放り出されたような学もなく力のみのような男達が多い。与えられる仕事が少ない、何をさえようかと悩んでいると意外なところから答えが出た。ある日翔大から

「あの・・將軍・・す、少しだお休みをいただけじゃないでしょうか？ほんの数日で良いのです！！お願いします！！」

土下座の勢いで頭を下げられる。

「どうかしたのか？」

荒くれ者に虐められてイヤになったのだろうかと慌てて聞くとクリツとした瞳に涙を浮かべて

「うつ・・！！俺の・・俺の家の方で・・山火事があったみたいで俺の妹が・・・売りに出されちまう！！！！」

ウーンと声を上げて泣き出した翔大に竜將軍も驚いた。

貧困で家族を奉仕に出す親がいると言いが、翔大の妹となるとまだ10にも満たしていない幼子かもしれない。

家族のために戦いに出てきた翔大が必死に守ろうとしている家族に

何とかしてやりたいという想いからだった。

近衛兵隊の半数を翔大の村に復興隊として派遣した。

最初は何をして良いのか、手探りの状態だったが意外と活躍したのが骸羅だった。

翔大を復興部隊の大將にすると侮る者も多かった。それをカバーしたのは骸羅だった。

骸羅は兄貴気質で、翔大が皆の前で必死になって指示を出しているのを無視している者や侮っている者に対してには大きな拳骨を下し、翔大のサポートをしつかりこなして、隊からも一目置かれる存在へと変わっていった。

そして何より彼らはとても変わった。

戦いの中でしか自分の存在を認めて貰えないと思っていた者達が、復興支援した村で涙ながらの感謝を受け、照れくさそうに帰ってきた。最初は嫌がっていた奴らも時が経つにつれ率先して復興支援に向かっている。

私が指示をしなくても動き出した存在に頼もしく思え、またそれを必死にまとめようとする翔大もまた大きくなっている。

翔大の家族には竜將軍の名で礼状を書き、彼が頑張っていることを認めた。彼の家族が健やかに生活できるように多くはないが、餞別を渡した。

泣いて喜んだ彼はこれは「家宝だ！」と言って宝箱に仕舞ってしまったことは後に彼の母親から聞いた話だ。

壊れだした齒車？

4つめは何と言っているのか分からないが外交面の変化だ。

外交と言っているのか分からないが、藍光の紫翠姫と憲国の礼音は未だこの城に留まっている。

引き留めているわけでもなく、彼らが居座っているわけでもない。だが一国の姫と王子だ。

無下に扱うことも出来ずにその接待を竜將軍である私が行っている。

だが、どちらも難攻不落の城のように攻略は難しい。

藍光との和睦はとても魅力的で紫翠姫を無下には扱うことも出来ずに「お会いしたい」という書簡が来れば無理に時間を作ってご機嫌伺いするしかない。

王妃へと望んでいる今、王のことを知ってもらおうと話をするが、何故か姫は私のことばかりを聞いてくる。

暑苦しいほどの熱視線を送ってくるが、まさかなツと思って気づかないフリをするがいつの間にかいなくなる藍光の侍女や陽月に舌打ちがしたくなる。

一応男としているのに何故に姫と二人っきりの空間を作るのだ。

というか、姫どうか体を押しつけないでください！！

腕に押しつけられる柔らかな感触は男じゃなくてもヤバイです！！

不自然じゃない動きで姫との空間を空けながら何とかその感触から逃げ出した。

としか、何故に出されたお茶に痺れ薬や媚薬などのヤバイものが混じっているのだろうか。

媚薬の時は本当にやばかった。

部屋をすぐさま飛び出して、後宮へと逃げ帰った。そして頭から冷水を被って、火照る体をさまして部屋に鍵をかけて閉じこもった。

後から来た閃に開けるように怒鳴られたが、今彼を見たら自分から飛びかかり、思いを打ち明けてしまいそうで、必死になって言い訳をして何とか彼をなだめた。

それ以来藍光から出されるものには口にしないように決めた。

それなのに次はお香ときた。淫靡な香りを嗅がされたときはすぐさま部屋の窓や扉を開けて換気した。

全く藍光が何を考えているのか分からないが、閃の王妃に相応しいか少し疑問に思ってしまう。

それでもやはり藍光との交友関係のために竜將軍の客人である以上私をもてなさなければならぬ。

外交関係でもう一つ問題は礼音だ。

露国についての話し合いは？国の古狸より厄介だ。

いざ話し出そうとすると

「お茶でもどうですか？」

「国からおいしい果実を送ってきたんです。いかがですか？」

最初は物珍しい菓子や茶で興味を惹こうとしていたが、さすがに二度目に剣を抜いたことが功をそうしたのか、次からは国に伝わる秘伝の治療法の書簡を取りだした。

これはさすがに私も押し黙った。

それは何十巻もある薬草図鑑で医師や薬草を扱う商人や薬師なら喉

から手が出る程欲しい一品だ。

これでも医師の端くれ。

それを目の前に出されたとき、しびしび長々と礼音と茶をするしかない。

茶をするといつても私がただ、書簡を読みそれをただ礼音が眺めるという無駄な時間である。

ある時も持ち帰って読みたいということ頼んでみたが

「一国の国宝を貴方に貸し出すことは出来ませんよ。それなりの対価がいただけるなら別ですが。」

「対価には何を望む？出来る限りは考慮する。」

ニヤリと嫌な笑みを浮かべて礼音がスルリと手を伸ばしてくる。

頬に触れるか触れないかの距離で手が止まると

「愛しい人の顔が見たい」

「！！！！！」

ザツと後ろに下がるが、礼音の手が腕を掴んで距離が取ることが出来なかった。

「選ぶのは貴方ですよ。・・・神楽様」

パァーンと高い音が響いて赤く頬を腫らしたやはりうつすらと笑っていた。

掴まれた腕とは逆の手で礼音の頬を打ってしまった。

一瞬手を見つめて悩んだが

「・・・戯れは止める！！今日はこれにて失礼する！！」

身を翻して後宮まで去った。

高鳴る胸がイヤだった。

閃とは昔からの付き合いで女扱いなど受けたことがない。

（これを知ったら閃は泣きそうだが・・・）

それなのに礼音の前では女である自分が出てしまう。

嫌な寒気がブルリと震えを誘う。

それを誤魔化すように腕をさすり、考えないようにしている。

本当に外交って難しい。

壊れだした歯車？

5つめは本当に大きく変わってしまった。

私と閃との関係だ。

本当にこの一ヶ月寝る間を惜しんで仕事に明け暮れた。

文字通り寝る間を惜しんでだ。

仮面で顔が隠れていて本当に良かったとここまで思ったことはない。

仮面を取ったときの私の顔は最悪だ。

両目の下に黒々と出来た隈はここ最近の睡眠不足を象徴している。

仮面のせいで誰も気づいてはいないようだ。

唯一顔を合わす閃にはばれそうなのだが、ばれてはいない。

何故なら後宮では夜を過ごしていないからだ。

執務室では警護や会議などには竜將軍として毎日顔を合わせているが、寵妃神楽としては顔を合わせてはいない。

後宮に一応毎日に行っている。風呂と着替えのために。

それ以外の食事や仮眠は執務室で取っている。

それに対して閃は何も言っていない。

イヤ言えないのだと思う。

私と閃の関係が壊れたのは彼の一言だった。

ある日のことだった。その頃はまだきちんと後宮に戻っていた。

礼音の部屋で露国のことで日付の変わる時間帯まで討論していた。

のらりくらりと話をする礼音に何度部屋を退室しようとしたか分からないが、最終的にはいつい話話が白熱したのも事実だ。

話が終わり早足に後宮へと急ぎ戻ってきた。

真っ暗闇の中楼閣の一番上から零れる光は閃が戻っていることを示しており、遅くなったことを申し訳にと思いつながら足を速めた。

部屋の扉を開けて、一番最初に目に入ったのは机の上に置かれた冷め切った夕ご飯。

一口も口が付けられた様子はなく、綺麗にもられたままの状態。忘れたようにお腹がクウーと鳴いた。

待たせてしまったと罪悪感を感じながら、部屋を一回り見渡すと椅子に座りこちらに背を向けて座る閃がいた。

「閃遅く」

「今まで何処にいた？」

静寂を破るような低い声がする。氷のように冷たい声にヒヤリとした物を感じる。

「せ、閃？あの、その、ちょっと意国の」

「意国だと！！あの男のもとにいたのか！！」

ダンと椅子の手置きの部分に閃が拳をぶつけた。あまりの音に

「閃！何をするの？手は大丈夫！？」

近づいてその手が無事かを確認するため手を取った。

閃の手は強く握られていたのか爪が刺さり、血が滲んでいた。

「ちょ！閃！？！？」

手を握って閃の顔を見て固まってしまった。

無表情で閃が私を見ていた。

仮面越しに初めて見るその顔に恐ろしくなり、閃の手を放してしま
った。

閃の手は重力によって下に落ちるはずが、私の後頭部へと向かい一
瞬影がよぎると一気にクリアな視界へとなる。

もぎ取られた仮面は床で何度か跳ねてコロコロと転がった。

拾いに行くべき所なのだが、それ許さないとばかりに閃の手が頬へ
と伸びてゆっくりと輪郭をなぞり始めた。

男性の手にしては細い指が唇の形をなぞる。

甘い愛撫のような仕草に動くことが出来ない。

身動きも考えることも息をすることも忘れてその動作に囚われる。

そして閃の目が如実に語るのは欲望だった。

あるのは明らかかな男が女を求める情欲そのものが閃の目に宿ってい
る。

ゴクンと息を呑むと同時に首筋を閃が撫でていく。

甘い痺れが背筋をかけて、膝から力が抜けて倒れそうだ。

ゆっくりとしかし確実に降りていく手が服の裾に沿って中へと侵入
してこようとしている。

逃げたいのに閃の瞳に吸い込まれて体が囚われている。

イヤ違う。

私が望んでいるのだ。

閃に抱かれたいと。

誰のものにもしたくない。自分だけのものにしたい。

この体を奪って欲しいと望んでいるのだ。

その欲望に理性が負けて体を縛る。

ジリジリと蝋燭の燃える音が大きく響く。

動いているものが閃の手だけだと思えた瞬間パチンと蠟燭の日に近づきすぎた虫の焼ける音が響いた。

その音に理性が戻ってきた。

バツと閃の手を払いのけて身を守るように両手を交差させる。

閃の瞳から目を反らして高鳴る鼓動を一生懸命落ち着かせる。

全力疾走したかのような疲労感の後、閃との間に出来た空間を見つめる。

開いた空間は底知れぬ溝があるように感じられた。

「……神楽……それが答えか？」

静まりかえった空間で閃が囁いた。

本当に小さな声だったが静まりかえった空間では大きく響いた。

閃が何を求めているのか分かっている。

だが、それを私が答えてはいけない。

境界線を引かなくてはいけない。

どんなに愛していても、私は彼に何も出来ない。

閃は王なのだ。この国の王なのだ。

私とは本当であれば関わり合うことのない運命で偶然に出会ってしまった、間違っただけの夫婦になった間柄なのだ。

ここで間違えてはいけない。

間違えてはいけないのだ。

伏せていた顔を上げて閃と目を合わせる。

悲しみを帯びた瞳は何処までも暗く、淀んでいた。

ゆっくりと笑みを浮かべて、

「……閃、これが私の答えだよ……」

そう言った。

私は笑みをきちんと浮かべていたと思う。
ただ頬を伝う熱いものは一体何だったのかは分からない。

壊れだした歯車？（後書き）

あと2、3話掲載して2週間ほど休止します。
ここまでお読みくださりありがとうございます。

壊れだした齒車？

夕食もすっかり冷めてしまい、おいしそうな匂いも消えた。
一神楽と顔を合わせなくなつて一体どれ程立つただろうか。
後宮にやつてきても姿のない妻に心が凍りそつだ。

あの日の夜のことはやつてしまつたとどれだけ後悔してもしたりない。

妻が竜將軍として政に参加だしたことは本当に心強い。

というより、俺の心に余裕が出来た。

俺の目の範囲に、手の届く範囲に四六時中妻がいるのは嬉しいものだ。

だが、それも数日で消え去つた。

友好の条約は結んだに長期にわたつて居座る藍光の紫翠と憇国の礼音によつて妻との時間を奪われた。

妻は「これからの？ 国のため、閃の為にするのだからお願い。」
滅多にないというか絶対しないお願いをこんな所で使われたらイヤだと言えるはずもなく、許してきた。

だが、この頃の礼音の動きは度を超えている。

明らかに竜將軍の正体に気づいて妻に触れているのを目撃した。

共に歩いている姿を見ただけでも腸が煮えくり返りそつになつたのに、よろけてしまった妻の肩をあいつは抱いたのだ。

あの細くしなやかな神楽の肩を！！！！

そして明らかに俺が見ているのに気づいており、鼻で俺を笑つた。

怒りが爆発してすぐさま斬り殺しに行きたかつた。

その笑つた顔のまま宙に舞わせてやりたかつた。

しかし俺に衝撃だったのはそれだけではなかった。
酷かったのが男の行為を神楽が咎めなかったことだ。

俺には頼まなければ触れもしない神楽が事故ではあったが触れた男に咎めない。

ましてや認めたかのような態度に頭に昇った血が急降下して目眩がしてくる。

見えているはずの距離に妻がいるのに、果てしなく遠いところに妻がいつてしまったように見える。

離れていくことが怖い。

一人になる怖さが襲ってくる。

傍にいるはずの妻が今は別の男のそばに立っている。

離れていくことが怖くて神楽の本心が知りたかった。

俺はあの夜問い詰めようと思って後宮へと向かった。

後宮は王だけの花が存在する贅を極めたはずの存在なのに灯されていない楼閣の上が廃墟のように寒々しい光景に見える。

まだ仕事が終わってなかったかと一人愚痴りながら、先に夕食の準備でもしながら待つかと、用意された食事を机に並べ神楽の帰りを待っていた。

一体どういうことだ！！確かに神楽には仕事を回してはいるが今日はそこまで大きな仕事はなかったはず！！

なのに何故にこんなに遅い！！

すでに月が空高く昇り、日付が変わった頃階段を上る音が響く。

神楽の足音だ。

溢れ出す怒気と戻ってきた安堵感が交差する。

怒気を押さえるために椅子に座り込み、彼女が部屋に入ってくるのを待った。

ギーッと音がしてゆっくりと戸が開いていく。
しばらくして俺に気づいた神楽が声をかけてきた。

「閃遅く」

「今まで何処にいた？」

やはり俺はかなり怒っているようだ。俺と神楽しかない空間は静寂に包まれ俺の怒気をありありと彼女に伝えていた。

「せ、閃？あの、その、ちょっと憲国の」

「憲国だと！！あの男のもとにいたのか！！」

その言葉が神楽の唇から紡がれた瞬間目の前が真っ赤に染まる。
自分の中で何かが音をたてて切れ、振り下ろした手が手置きに当たり大きな音をたてた。

あまりの大きさに慌てたように神楽が近づき

「閃！何をするの？手は大丈夫！？」

無事かを確認するため手を取った。

だが、俺はそれよりも神楽の顔が信じられなかった。

この楼閣に戻れば一番に外す仮面が外されていない。

神楽の素顔を隠すその真っ白な仮面が異常なまでに俺と神楽の境界線のように存在していた。

壊れだした齒車？

目の部分だけくり抜かれた部分から薄暗く神楽の瞳が見える。それがとてつもなく遠く、俺を映していないようで全身が冷や水をかけられたように感情が消えていった。

俺の手を取っていたはずの神楽の手が離れていくのが分かって、すぐさま俺は彼女の竜將軍の仮面を取った。

そこには愛しの妻がいて、何処かおびえを含み、征服欲を掻きたてられて押し込んでいたはずのパンドラの箱が開いてしまった。

パンドラの箱から飛び出た欲が勢いよく飛び出して掻きたてられる。彼女が欲しい。

彼女の全てが欲しくなってしまった。

自分の意志とは違う本能が欲に掻きたてられて神楽の唇を触れる。

瑞々しい唇は柔らかく、奪いたくなる。

ゆっくりとした手つきで手が降りていく。

神楽は彫刻のようにただ俺の為すがままに立ち、黒い瞳の奥に微かな欲を感じた。

俺と同じ情欲。

俺と同じなのだろうか？

俺が狂ったように求めるほど神楽も俺を求めているのだろうか？

その欲をたぐり寄せるように、神楽の服の隙間から手を入れる。ビクリと反応したが抵抗はなかった。

布越しに感じる体温はとても暖かく、心地が良かった。

このまま済し崩的に神楽を奪ってしまおうかと思った瞬間

バチツと静かな空間で大きな音がした。
どうやら蠟燭の火に心奪われ近づきすぎた虫が運悪く焼け落ちたようだった。
藻掻き苦しみながら体を焼かれていく虫は床に落ち、灰になるまで燃えつきた。

虫が焼けたと同時に触れていた妻が離れていった。
腕を伸ばせば届く距離にいるのに、身を守るように体を抱きしめる神楽との距離は遠かった。

「……神楽……それが答えか？」

乾ききつた唇から零れた声にビクリと体を震わせて目も会わせようとしない妻が

何かに耐えるように一度大きく息を吐いて伏せていた顔を上げる。

そこに昔まだ村にいた頃の幼い神楽がいた。

必死に我慢して笑みを浮かべようとして失敗している神楽。
その歪んだ笑みを浮かべたまま、

「……閃、これが私の答えだよ……」

そう言った。

必死になって感情を殺して涙する彼女に俺は何一つ言えなかった。
手を伸ばし抱きしめることも、その涙を拭うことさえも彼女に拒絶されてしまった。

壊れだした歯車？（後書き）

私情により更新が停止します。

次回の更新は11月中旬もしくは下旬頃となります。

しばしお待ちください。

不穏な動き

神樂が後宮に戻らなくなったある日のこと。

日が落ちるのも早くなった秋の夜

肌寒くなった部屋で一枚羽織を羽織りながら緊急を要する採決の仕事ではなかったが持てあました時間を潰すために、執務室でいつものように仕事をしていた。

足下に横になつて欠伸する虎の頭を時折撫でながら、ただひたすらに仕事をしていた。

欠伸の途中で虎がふと何かを察したのか、入り口の扉をジッと見つめピクリとも動かない。その反応に竜將軍も入り口に目を向けると誰かが走ってきている音がする。

バタバタとこんな夜に何かあったのだらうかと、持っていた筆を置きすぐさま叩かれる扉に向かつて

「入れ」

と招き入れた。

「はあはあ・・・大変です！竜將軍！！ついに露国が！！露国が動き出しました！！」

荒い呼吸を押さえるように大きく肩を動かしながら翔大が叫ぶように報告した。

ガタリと手に持った筆が落ちて書き上げたばかりの書簡を黒く汚していく。広がる墨は不安を煽るかのように黒々と書簡の文字を飲み

込んでいった。

「馬鹿・・・な・・・。あり得ない・・・。將軍達に三老を集めよ!!」
露国が動き出すことはあり得ないことだった。

そうあり得ないことだったが、そんなことは言ってられない。敵国が動き出した以上何らかの手を打たねばいけない。

すぐに頭を切り換えて、発して命令に翔大は転びそうになりながら走っていった。

(・・・落ち着くんだ竜將軍!!落ち着いてよく考えなさい!ここで焦ってはいけない!!)

焦りを隠すようにどっしりと椅子に座り込み、組んだ手を仮面に押し当てて考える。

自分を竜將軍として第三者の視点になって考えれば焦っていた感情が落ち着きを取り戻し、ゆっくりと考えに浸かれた。

(露国は藍光の隣国。先ず攻めにはいるなら藍光に攻め入ることになるだろう。だが何故今の時期に?)

藍光と露国には国境には高い山があるはずだ。今の時期は秋。山ならば既に冬に近い状態のはずだ。その状況下で軍を進めるなど、正気の沙汰とは思えない。

攻めはいるなら雪解け後の季節だと思っていた。それまでに備蓄などの整備をきちんとしたかったのに、準備は整っていない。それに秋は兵を徴集できない。みな村に帰り刈り入れ時だ。安定した食糧の自給を獲るためには兵の徴集はするわけにはいかない。

ちくしょう！！何故この時期なんだ！！時期があまりにも悪すぎる！！）

いくら考えても答えは出てこない。

ただ敵国が兵を出し友好国に手を出してきた以上何らかの手を打たねば、それこそ他国に示しが付かない。

友好を結んでおきながら、被害が出ても何もしなかったとなればせつかく結んだ他国との友好が一気にダメになる。
ダンと拳で机を叩いた。

大きな音にビクツと身を縮こまらせる虎。

「クウーン」

私の怒気にやられたのかへニヨリと垂れた耳と尻尾。

こちらを覗くようにゆっくりと近づいてきて、慰めるように机の上で固く握りしめた拳をペロペロと舐めてくる。

「フウ〜。すまん八つ当たりした。ごめんな。」

解いた手でガシガシと頭を撫でるとゴロゴロと虎が鳴いた。

（どうやらまだ落ち着いてないみたいだ。ツたく、部下に心配させるなんて上官失格だな）

ふと口元が弛んだが、それも一瞬。

しっかりと結び直して、椅子から立ち上がる。

「来るなら来い。閃の国に一步たりとも踏み入れさせはしない」

暗示のように囁いて、しっかりとした足取りで部屋を出た。
例えまた戦いになるうとも、閃のいる国を守るだけ。
それだけが私の使命なんだ。

不穏な動き（後書き）

更新が遅くなり申し訳ありません。ストックが溜まらず今月の更新は5話ほどの予定です。

亀さん更新なのですが拝読いただければ幸いです。

藍光崩壊

詮議の間は叩き起こされた官吏達やうつらと船をこぐ兵士達がいだが、ピリリとした雰囲気を出した竜将軍が入ってきた瞬間一瞬で静まりかえった。

王はまだ来てないのか玉座は空席のままだ。さすがに歴戦の将達である將軍達は既に先ほどの情報を聞いて、皆一様に険しい顔をしている。

竜将軍が椅子に座るなり奥の扉が開き簡易の服を纏った閃が出てきた。チラリとこちらに視線を寄こしてきたが礼の形を取るために顔を伏したため気づかないふりをした。

「報告を頼む」

閃は玉座に座るなり、口を開いた。

「はっ。先刻藍光国の王の使者が参りまして友好国に助けを求めにきました。」

兵士の一人が進み出て報告するが実際の使者がおらず話をするのは不思議だ。

訝しげに竜将軍が尋ねると

「その使者は何処にいる？実際の現状を聞きたい。」

「はいえっと・・・」

言いよどむように視線を彷徨させた兵士。

「それにつきましては私から報告があります。」

バンと音をたてて入室してきたのは藍光の姫の側近としてやって来た宰相、陽月だった。

陽月に伴って顔を蒼白にさせている紫翠姫の姿もある。

支えなければその場で倒れそうなほどうつろな表情をした紫翠。

閃の前にたった二人は臣下の礼をとって跪いた。

「先ほどの使者は既にこの世にはおりません。既に息絶えており報告は出来ません。しかしかの者の顔は知っておりました。紫翠姫が兄上しおん紫苑様でした。」

「兄・・・上・・・」

兄の名に反応したのか紫翠の瞳からはボロボロと涙が溢れて床に敷かれている絨毯を色濃く染めていた。

陽月は懐から書簡を出しながら

「紫苑様は命をかけて持ってきた書簡です。お目通りをお願いします。」

必死になって頭を床に擦りつけた。

その手に持つ書簡は所々が血に染まってどす黒くなっていた。

チラリと閃が視線を向けた兵がゆっくりとその書簡を持ち閃へと差し出した。

書簡の紐を解き、中に目を通す閃の動きに誰もが押し黙り王が何を言うのか期待の籠もった目で見つめていた。

それもそのはずだ。

王の側室にとやって来た王女は王の側近である竜將軍にお熱。

それなのに王自身がこの姫のために動く理由があるだろうか？

もし動いたとすれば王は何かしらこの姫に気があるのではないだろうかとも見て取れるのだ。

そうすれば今まで寵妃の神楽ばかりを寵愛していたが、他に目が向けば別の女も抱けることを意味している。王に側室として女を後宮入りさせることが可能になると言うものだ。

だが逆に動かなければ、王は同盟を反故したことになる王は約束を守らないとして叩きあげることも出来る。

そんな期待の籠もった目を受けながら閃は一通り目を通すと近くに座る竜將軍に向かつてその書簡を差し出してきた。

竜將軍はすぐさま席を立ちその書簡に目を通す。

書かれてあることにただ呆然として、その真実が受け入れられなかった。

「まさか……。そんな……」

呆然と言い放った竜將軍に内容が分からない官吏達から

「何と！！何と書かれてあるのですか！！」

「内容を！！」

叫ぶように答えを求められた。

竜将軍はギョツと落ちそうになる書簡を握りしめて
ゆっくりとその口を開いた。

「・・・藍光王城・・・落城・・・。藍光王夫妻・・・処刑・・・。そ
の他王位継承権を持つ者全て処刑。」

たったこれだけの言葉に一瞬でその場が静まりかえった。

そうこの日藍光国は王女紫翠姫を残して滅んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5980p/>

王の竜玉

2011年12月11日02時57分発行